

戦後障害児保育・教育における実践記録映像のアーカイブ化に関する研究

－大野松雄と『光の中に子供たちがいる』を中心に－

2013 年度放送文化基金研究助成報告書

戦後障害児教育福祉実践記録史研究会
(代表 玉村 公二彦)

戦後障害児保育・教育における実践記録映像のアーカイブ化に関する研究
—大野松雄と『光の中に子供たちがいる』を中心に—

目 次

I. 研究の目的と概要	1
II. 戦後における障害児の発達と発達保障の記録の歴史的な位置づけをめぐって—近江学園などにおける映像記録を中心に	5
III. 大野松雄と『光の中に子供たちがいる』	15
1. 『夜明け前の子どもたち』から『光の中に子供たちがいる』へ（大野松雄聞き取り）	16
2. 『光の中に子供たちがいる』3部作の内容	28
1. 『光の中に子供たちがいる 1 大津市における新しい障害児保育の誕生』	28
2. 『光の中に子供たちがいる 2 カズエちゃんの二年目』	36
3. 『光の中に子供たちがいる 3 「わかれ」は「かどで』	45
3. 大野松雄「光の中に大人たちもいる：独断的発達についての覚書」 （『幼児の教育』75（6）、pp.16-24）	53
IV. 『光の中に子供たちがいる』関連資料	59
1. 『光の中に子供たちがいる—大津市における新しい保育の実践』（1975年）	60
2. 田中昌人・大島弘美『大津市における新しい保育の実践』（「光の中に子供たちがいる」上映をすすめる会）	88
3. 『光の中に子供たちがいる—2 カズエちゃんの二年目』（1976年）	98
4. 田中昌人・田中杉恵・沙加戸明『カズエちゃんの二年目』（「光の中に子供たちがいる」上映をすすめる会）	124
5. 『光の中に子供たちがいる—3 「わかれ」は「かどで』（1978年）	132

I . 研究の目的と概要

I. 研究の目的と概要

1. 研究の経過と意義

本研究会の取り組みは、本研究代表者が2008年度から4年間、奈良教育大学学術情報センター研究プロジェクト「戦後障害児福祉教育実践映像のデジタル化とデータベースの構築」をテーマとして取り組みを行ってきたものを発展させたものである。このプロジェクトでは大津市等の了解のもと、大津市製作の『保育元年』『続保育元年』『続々保育元年』や『夜明け前の子どもたち』の未使用フィルムのデジタル化を行ってきた。さらに、インタビュー等の必要やその内容を集团的に検討する必要がある、戦後障害児教育福祉実践記録史研究会を組織して、研究を進めてきた。

戦後障害児教育福祉実践史研究会は、障害児教育・保育・福祉における理念・実践について、制度的な発展を踏まえて、検討することを目的として、2010年度より活動を行っている。とりわけ、関西の福祉施設や障害児学校の歴史資料の保存と整理を中心に活動しているが、なかでも障害のある子どもたちの発達の事実と実践記録の重要性を認識し、その検討をおこなってきた。これまで、保育や障害児福祉、また障害児教育の実践に関する映像などを収集し、その保存とアーカイブ化にとりくんできた。

本研究は、研究会での活動として行ってきた近江学園等の福祉施設や大津市障害児保育の資料整理、京都での学校づくりの記録の整理の過程で、録画・録音されたフィルムや音声、放送された番組・映画などの検討から発想されたものである。近江学園等での障害児者福祉の取り組みは、障害児保育・教育・福祉の先駆的の映像記録として発表されると共に、障害児者関係の啓発の放送として放映されてきた（2007年NHKラストメッセージ「この子らを世の光に」）。福祉や教育の実践を記録した映像は、実践を改善すると共に、障害児者の福祉や教育の重要性を訴えるものとして役割を担い、教育福祉の放送文化の内容をつくってきた。本研究・事業のアーカイブ化はその実践記録映像資料のリソースとすることができると考えてきた。

2. 研究のねらい

戦後における障害児教育・福祉関連の学校・施設資料と教育実践資料は膨大であり、貴重な資料が散逸されるままになっている。その中でも、就学前施設・福祉施設や学校での実践を記録した貴重な映像フィルムや音声記録が存在している。その中で、記録映画「光の中に子どもたちがいる」の未使用フィルムが発掘され、監督をつとめた大野松雄氏の協力も得られる見通しとなり、未使用のフィルムのデジタル化の作業とともに、その内容の再検討と意義の検証が必要となった。

本研究では、戦後障害児教育・福祉に関する映像資料の典型として1974年から製作された「光の中に子どもたちがいる（3部作）」（第1部は、1974年放送文化基金助成によって製作された）及びその未使用のフィルムのアーカイブ化を行い、実践記録映像の歴史的な意義の検証を行う。この作業を典型として、本研究では、戦後障害児教育福祉の実践に関する映像資料等の共同利用の在り方を検討する。戦後障害児福祉・教育に関する歴史的資料の整理、公開・共同利用を展望する研究の一環として、障害児者の当時の実態とともに生き生きとした発達の姿を示す映像や音声の資料は重要な位置を占める。また、それは時代の障害児者観を示すものでもある。それらの映像コンテンツから、時代の障害児者の実態や障害児者観の変遷を跡づけることによって、これからの障害児教育福祉実践の記録の在り方を示すことができると考えた。

3. 本研究の内容・方法

(1) 戦後障害児者福祉教育に関する映像年表の作成及び資料リストの作成

全国的な戦後障害児教育、障害者福祉や障害者問題も射程に入れてより戦後の障害者施策の歴史を示

す年表の整備とそれに対応させた映像資料の整理を行う（国際障害者年日本推進委員会編『障害者関係映画総目録』のデータ化など）。特に、本研究の場合は、関西を中心とした障害者福祉や教育の歴史的展開を重視する。知的障害児施設・近江学園の創設の前提を描いた「忘れられた子等」「手をつなぐ子等」の上映などがなされている。これらの映画は戦後の障害児の教育や福祉の出発を示す貴重な資料となっている。戦後障害児者福祉教育の歴史過程に映像を位置づけ、その中で就学前障害児の保育療育がどのような歴史的文脈で映像のアプローチがなされたてきたのかを解明する。

（2）映像資料のデータ化

京都大学名誉教授であった田中昌人の障害児保育関係の資料の整理の中で、1974年以後製作された「光の中に子どもたちがいる」（3部作）の未使用フィルムが存在が確認された（全18巻）。この「光の中に子どもたちがいる」は、障害のある子どもの発達を記録したドキュメンタリー映画であり、関係者によって解説などもなされているが、戦後障害児保育の実践を示す貴重な映画である。この前後に、大津市などでは、乳幼児健診の取り組みが、注目されNHKの番組として放映されることともなった。また、大津市独自で、障害児保育の取り組みを広報映画「保育元年」として製作上映している。このような映像や番組、映画、その際に撮影された未使用フィルムなどの調査を行い、必要に応じてデータ化していく。また、障害児福祉・療育記録映像として、社会福祉法人大木会、社会福祉法人びわこ学園等における療育・福祉実践記録の整理、1960年代から70年代にかけて京都にも受け継がれて製作された映像（京都府教育委員会広報映画「人」）等の整理、同時期に、奈良や和歌山での養護学校の映像記録などの発掘へも視野を拡げていきたい。

（3）映像コンテンツの内容検討とアーカイブ化

「光の中に子どもたちがいる」「保育元年」などの監督としてこの一連の映像に関わったのが大野松雄（元総合社代表）であり、そのインタビューを行いつつ、未使用フィルムの検討を行う。また、上映運動の記録などを調査し、その意義と共に社会的な影響を検証する。

25年度は、関西における障害児保育・教育・療育の基礎を築いた近江学園園長糸賀一雄生誕100周年にあたり、また、重症心身障害児施設びわこ学園も50周年を迎えていた。この間発掘してきたフィルム等は当時の実践の記録として貴重なものである。調査の中でデータ化した未使用フィルムを中心として、関係者の聞き取りをもとに当時の実践の内容について検討を行い、映像コンテンツとして活用を検討する。また、映像資料のアーカイブ化を行い、各法人での公開の在り方を検討し、報告書を作成する。

4. 研究成果

戦後障害児福祉教育に関する年表の作成を行うと共に、1960年代後半から70年代にかけての映像資料の目録の収集や整理をおこない調査研究の前提とした。その上で、近江学園、信楽青年寮、びわこ学園、大津市などの映像資料の調査を行い、関係者の了解の下でデジタル化し、保存蓄積することとした。また、ドキュメント映画などの再評価のため公開発表会などを行う。それぞれ発掘した資料はインタビューなどを行い検証し、各大学の紀要などで成果を公表することとした。さらに、びわこ学園の創立50周年記念事業、糸賀一雄生誕100周年記念事業と連携しながら、関係者と協議しまとめてきた。

本報告書に掲載したもの以外での戦後障害児教育福祉実践記録史研究会会員の研究成果は次の通りである。

中村隆一編『一次元の子どもたち資料集』人間発達研究所、2013年10月

- 中村隆一「一次元の子どもたち」『甘露一滴』（故田中昌人・杉恵両氏の発達研究・発達保障論関係業績・資料保存プロジェクトニーズレター）No.2、2013年11月
- 河合隆平『『この子ら』と生きた糸賀一雄と対話する』『糸賀一雄生誕100周年記念論文集 生きることが光になる』糸賀一雄生誕100周年記念事業実行委員会、2014年3月
- 窪田知子『『共に生きる』ことの意味をみつめて』『糸賀一雄生誕100周年記念論文集 生きることが光になる』糸賀一雄生誕100周年記念事業実行委員会、2014年3月
- 玉村公二彦・服部敬子「戦後京都府における障害児教育の進展と学校づくりー京都府広報映画『人』（1968年）を中心にー」『福祉社会研究』、2014年3月、pp.15-32.

5. 本研究の今後と将来計画

記録映画も含む障害者関係映画の目録としては、国際障害者年日本推進委員会が編集した『障害者関係映画総目録』などがあり、最近では障害と文化という観点から映画の中の障害者像がとりあげられ、障害と障害者理解の導きとしても解説がなされている。しかし、その中では、障害児教育福祉の実践映像が十分位置づけられ、取り上げられているというわけではない。ドキュメンタリーについては、近年、映画学の研究がようやく世に問われてきた。最近刊行されたものだけでも、佐藤忠夫編著『シリーズ 日本のドキュメンタリー』（全五冊、岩波書店、2009-2010）、黒沢清他編『〔日本映画は生きている 第7巻〕踏み越えるドキュメンタリー』（岩波書店、2010年）、土本典昭フィルモグラフィティ展2004実行委員会『ドキュメンタリーとは何か』（現代書館、2005年）、丹羽美之・吉見俊哉編『〔記録映画アーカイブ1〕岩波映画の1億フレーム』（東京大学出版会、2012年）、「地方の時代」映画祭実行委員会編『映像が語る「地方の時代」30年』（岩波書店、2010年）などがある。この中では、これまでフィルムとして存在は知られていたが、直接目にすることは出来なかったものを、今日的なメディアに変換して整理し蓄積している。このようなアーカイブ作業としては、東京大学大学院情報学環「記録映画アーカイブプロジェクト」、記録映画保存センターの活動などが注目される。しかし、そのような中でも、障害児者教育や福祉のドキュメンタリーの位置づけはまだまだ十分なものとはいえない。

本研究では、障害児教育福祉実践記録のうちフィルムを中心として、そのデジタル化やアーカイブ化を行う第一歩を踏み出すことが出来た。しかし、残された課題も多い。

2013年4月、大野松雄氏は、大動脈解離によって緊急入院・緊急手術となり、この一年間、リハビリの生活を送らざるを得ない状況におかれた。そのため、当初予定していた『光の中に子供たちがいる』3部作の未使用フィルムのカット表などの作成、それに基づく聞き取りなどの研究については支障がでた。幸いなことに、大野松雄氏は、その後、身体を持ち直し、これまで長くつきあってきた「もみじ・あざみ寮」での活動にも一定参加することが出来るようになり、初代あざみ寮長糸賀房先生（糸賀一雄夫人）がお亡くなりになった際のお別れの会のためのDVDの製作、寮生劇での音響構成や演出などを行うまでに回復した。本研究助成によって、『光の中に子供たちがいる』の完成版及び未使用フィルムのデジタル化は完了したが、未使用フィルムに関する聞き取りと検討は今後の課題となっている。また、『光の中に子供たちがいる』と関連して製作された『保育元年』『続・保育元年』『続々・保育元年』などとあわせて、戦後障害児保育療育の草創期における実践と障害児の発達を記録したフィルムとしての意義を明らかにしていくことは残された課題である。

戦後障害児教育福祉実践記録史研究会

玉村公二彦（奈良教育大学・代表） 中村 隆一（立命館大学） 越野 和之（奈良教育大学）
山崎由可里（和歌山大学） 河合 隆平（金沢大学） 窪田 知子（滋賀大学）

Ⅱ．戦後における障害児の発達と発達保障の記録の 歴史的な位置づけをめぐって

Ⅱ. 戦後における障害児の発達と発達保障の記録の歴史的位置づけをめぐって—近江学園などにおける映像記録を中心に

はじめに—史資料の整理と保存

田中昌人は、障害のある子どもたちや成人、そして、障害のあるなしにかかわらず子どもの発達全体にわたって、その映像を含む記録を重視した。障害のある子どもの発達の記録は、子どもの発達全体の中に位置づけられ、権利としての障害児教育の発展の原動力となってきた。映像記録・資料は、発達の質的な研究として、その中でも重要な位置をもっている。田中との共同作者の大野松雄は、映像資料の整理編集の試みは、「田中昌人映像著作集」という形で進められるべきであると強調している。また、田中昌人は、「南郷時代の近江学園を撮影したフィルムについて」(『南郷』第24号、1996年)という文章も残しており、『障害のある人びとと創る人間教育』(大月書店、2003年)においても、障害のある子どもの発達の映像記録を記している。田中昌人氏の発達研究と障害児教育研究の源泉となった近江学園をはじめとする各種取り組みとそこでの発達の記録は、戦後の障害児教育史に位置づけられる必要がある。そうした取り組みの一環として、障害児者教育・福祉関係映像のデジタル化・アーカイブ化の作業を始めてきた。本報告では、その一端を示すものとした。

ところで、田中昌人は、1970年代に糸賀一雄と近江学園について短いながら凝縮した紹介をおこなっている。すなわち、近江学園は1946年11月、糸賀一雄、田村一二、池田太郎らによって、「戦争によって社会に投げだされた戦災孤児あるいは生活困窮児」と「忘れられている精神薄弱児」を、それぞれの教育集団を基礎に区別と相互援助において教育し、人間社会や教育のあるべき姿を追求することを目的に、滋賀県大津市石山南郷町に設立された。南郷時代を中心とした近江学園の実践の発展は、発達の総合的追求、社会福祉施設体系の開拓、社会福祉施設体系と地域福祉活動の提携の3つの側面から把握される。そして、その時期区分として、次のように述べている。

「四分の一世紀にわたる近江学園の実践全体の発展はこれを三期にわけて把握しよう。即ち第一期は養護施設を中心として創設に伴う実践を展開した時期であり、第二期は

1950年代に精神薄弱児施設を中心として指導内容の発展に伴う実践を展開した時期であり、第三期は1960年代に発達保障をめざして労働組合も結成され、各種の自覚的な実践が展開した時期である。以上の実践には戦後わが国における階級闘争が複雑に反映していると共に、その中で社会進歩の担い手が形成されていく過程も典型的に示されている。」(糸賀一雄と近江学園の実践) 小川利夫・高島進・高野史郎編『社会福祉を学ぶ—権利としての社会福祉』有斐閣、1976年)

先に述べた「南郷時代の近江学園を撮影したフィルム」の論考は、近江学園の設立から10年ごとに3期に時期区分している(1946年から1955年、1956年から1966年、1966年から石部への移転まで)。ここで示された時期区分を重ねつつ、典型的な映像資料を紹介しつつ、発達の記録と発達保障についてその歴史的位置づけを考えてみたい。

1. 戦後知的障害児教育の復興と近江学園の設立—「手をつなぐ子等」「忘れられた子等」

近江学園は当初戦災孤児と知的障害児を共に収容し、相互に影響を及ぼすことを意図して、設置されたものである。その近江学園の構想と実践は、1946年9月28日に記された設立の「趣意書」に集約されている。趣意書は、まず、戦争によって社会に投げ出された戦災孤児や生活困窮児と一般に忘れられている「精神薄弱」児が放置されていることを指摘した上で、「彼等をやはり私達の仲間として温かく育て上げ、正しく教育すれば、それが又同時に社会の



健全な発展を少しでも助けることになる」「どうしてもこの子等達を適当な施設に収容して教育しなければなりません」と述べている。さらに学園を二部制とし、第一部を戦災孤児、生活困窮児の部門、第二部を「精神薄弱」児の部門とし、生活困窮児と知的障害児の交流、教育と福祉の同時追求、教育と医療の連携、教育と生産の結合、研究と職員の養成を追求した。近江学園の設立と軌を一にして、知的障害の子どもを描いた映画が登場した。糸賀と共に近江学園の設立の担い手となった田村一二の実践記録をもとにした「手をつなぐ子等」(1948年)、「忘れられた子等」(1949年)である、いずれも、戦前京都の「特別学級」(障害児学級)の担任であった田村一二の同名の原作を映画化したものである。原作の『手をつなぐ子等』(1944年)、『忘れられた子等』(1942年)は、ともに、第二次世界大戦最中に刊行されたものである。

「手をつなぐ子等」は、脚本は伊丹万作が書き、病床にあった伊丹にかわって稲垣浩が監督したものである。舞台は通常の学級で、そこに転校してきた知的障害の中山寛太、そして寛太を受けとめる松村先生(笠智衆)と松村学級の仲間たちを描いたものである。

軽度知的障害のある中山寛太は、学校での授業についていけず、教室の中からつまみ出されている始末。「学校には行かない」と言い出し、その都度、転校を繰り返してきた。父親、母親は寛太のことが不憫で仕方がない。新しい転校先の学校に受け入れてもらうよう懇願し、担任の松村は受けとめることを決める。松村は、子どもたちをあつめ相談する。学級の仲間たちは、寛太にたいして様々な工夫をし始め、寛太はみんなのなかにとけこみはじめる。寛太は、学校に行くのが面白くてしょうがなくなり、毎朝、門が開く前から学校へ行くほどとなる。

そんな松村学級に、もう一人の転校生・山田金三が来る。金三は、家庭環境に問題をもって歪んだ不良少年・悪童として描かれている。金三と寛太との関係は、はじめはことあるごとにおもちゃにしたり、いじめたりするもので厳しい関係だった。しかし、寛太の根っからの純真さとそれを受けとめる級友たちの姿から、金三の心は次第に穏やかなものとなっていく。この映画の脚本をつくった伊丹万作はこの映画に込めた意図を次のように書いている(『伊丹万

作全集Ⅲ』筑摩書房、1961年)。

「(原作には) 快いユーモアもあり、悲しみもあり、その他社会にあるようないろいろなものがあるが、ただ違う点は、こちらはどこまでも純真であり、明朗であり、徹底的に澄みきっていることである。このような美しさを、もしもそっくり映画に移し植えることができたならば、多くの人がその映画を見て泣いたり、笑ったりしたあげく、結局心を洗われたような快感を抱いて帰っていくだろう。そういう映画を作りたいというものでというのが私の最初に描いた夢であり、未だ覚めない夢なのである。」

「手をつなぐ子等」は通常学級での軽度知的障害の子どもと教師・友だちとの関係を描いたものだったが、稲垣浩脚本・監督で制作された映画「忘れられた子等」は、「特別学級」を正面から取り上げたものであった。そこには、知的障害の子どもたちと担任教師のかかわりを様々なエピソードを交えて描かれている。この作品は、実は、戦後知的障害児施設近江学園の創設の担い手の一人となっていた田村一二の障害児教育との出会いの頃の姿と初期の特別学級での取り組みを描いたものであった。

師範学校の美術の専攻科を卒業した谷村清吉は、小学校の校長から「特別学級を受け持つてほしい」といわれ二つ返事で請け負ってしまう。実は、「特別学級」を優秀な子どもを集めた学級と勘違いし、引き受けてしまう。しかし、その学級に案内されると事態の深刻さを理解することになった。すぐさま、校長室にもどって直談判がはじまる。谷村「校長先生、僕にはとてもあんな学級は持てません」校長「なぜですか」

谷村「なぜとって、あれはどういう子供達ですか」

校長は知的障害であることを説明するが、谷村は「どう教





えてよいかわかりません」と拒否する。

校長「誰でも、はじめから教え方なんか、わかるものではないのです。できるかできないかやってみなければわかりませんでしょ」

谷村「ベテンだ。普通学級を持たせてください」

そういう谷村に校長は次のように論じて、二年という期限付きで担任を承諾させる。

「(前略) 本当の教育の味というものは、むしろ、そういった地味なところにあるんじゃないかと、私は思う。私は、むしろ若いのが故に、君をこの教育に投げ込みたいと思う。苦しい。苦しいには違いがないが、それが君の人生というものに、何らかの意味で役立つものだとは私は確信する」

担任を渋々引き受けた谷村は、校長に自分のやりたいようにやると了承をとりつけ、自分の好きな絵を描き続けることになる。そんな中、ひょんなことから、生活指導の中で子どもたちとのかかわりが深まっていく。純真に谷村を慕う姿に接するようになり、子どもたちの願いや思いも理解し始める。谷村は、教材を工夫して授業をつくり、夏休みには琵琶湖に子どもたちをつれていき、学芸会にはオリジナルの歌や振り付けを創作して、学級のみんなといっしょになって生活をつくっていく。

はじめは教育を放棄していた青年教師谷村が、知的障害の子どもたちの魅力にどんどんとひかれ、子どもたちが生き生きしていく過程とともに、「特別学級」の教師になっていく姿が描かれた映画となっている。その新任教師を見守る笠智衆演ずる校長も印象的である。

これら二つの知的障害児と教師を扱った映画は、冒頭も指摘したように戦前における田村一二の「特別教育」(障害児教育)の実践に基づいた教育小説を原作に、戦中に準

備され、戦後初期の占領期において撮影・公開されたものであった。公開にあたっては、アメリカ進駐軍やその検閲官との間で緊張関係もあったようである。この映画「手をつなぐ子等」は、その時代を「昭和12年」としているが、「忘れられた子等」では「現代」になっている点は、戦前と戦後の時代のいずれに位置づけるかを課題としている。しかし、全体として、憲法・教育基本法が公布され、学校教育法が制定されるという戦後の教育復興の中にあって、あるいは知的障害の子どもへの教育の姿が民主教育の推進の役割を担うものとして、さらに障害児教育の振興させるものとして、この映画も位置づけられたのではないだろうか。そして、当時のこの映画の視聴者は、映画の中での子どもたちと教師のエピソードやその純真さに心を洗われるひとときをもつこととなったと想像される。戦前京都における田村一二などの実践記録を典型とする特別学級での実践の蓄積が直接的には戦後知的障害児教育の復興につながったということを示すといつてよいであろう。

稲垣浩監督によって製作された「手をつなぐ子等」、「忘れられた子等」は、戦後教育の再出発においてその象徴的映像となるとともに、1946年に設立された近江学園の養護児童及び知的障害児の教育実践をも励ますものとなったことは想像に難くない。

2. 近江学園における知的障害児の教育の進展—「一次元の子どもたち」の制作へ

戦災孤児を中心とした生育環境に課題のある児童を中心として運営された戦後復興期から高度経済成長の歴史過程において、近江学園に在籍する児童は、知的障害児を主とした構成となり、学園の実践に質的に大きな変化をもたらしたのが、1950年代である。具体的には、教育体制を養護児童と知的障害児の区分で名称をつけていたものから、1950年代後半には、教育部に班体制をひいたり、知的障害の程度別に区分するなどの模索を行っていった。1950年代後半の知的障害の実践の模索に先だって、1950年代の映像として、教育部での学習(音楽、そろばんなど)の様子や農業科、畜産科、窯業科、木工科の様子をショートカットしたものが残されている。さらに、1954年9月、知的障害の子どもたちで組織する「さくら組」のびわこ1

周の取り組みの映像がのこされている。また、行事としては、1954年ころと思われる運動会の映像が残されている。

1950年代後半には、映画フィルムで撮影が行われた記録や資料に残されているものとして、『近江学園の足音』『近江学園の一年』『次元の子どもたち』、さらにNHKの『三歳児』『幼児の世界』などがあるとされている。田中昌人は、NHK大阪BK担当「婦人百科」の『三歳児』（1964年4月から）、同『幼年期』（1965年4月）などにふれ、「何度もスタッフと一緒に、準備、撮影、編集に立ち会えたのは、その後の発達記録フィルムの作成のための勉強になった」と記している。しかし、これら近江学園を中心として撮影されたものの大部分のフィルムは現認できないといわれていた。その中で、フィルムが確認されているのが、1965年4月、「未知への挑戦」のシリーズとして東京12チャンネルで放映された『次元の子どもたち』（監督：柳沢寿男）である。

監督をした柳沢寿男は、「療育との出会い」として、岩波映画の製作から足を遠ざけていた1960年代のはじめに糸賀一雄から誘われ近江学園を訪問したことを、次のように回想している。

「たまたま西の知恵遅れの父親と言われる先生が、近江の琵琶湖学園（近江学園のあやまりー玉村注）に遊びにきなさいと言ってくれた。知恵遅れの子供の施設に遊びについて何が面白いか、と思っていたんですけども、あまりお誘いがあったものですから、それならとでかけたんです。今は場所が違いますが、昔は琵琶湖から流れる宇治川沿いにありまして桜並木の下をあがっていくと、僕より背が高い、ちょっと人相の悪い、知恵遅れの子に初めて会ったものですから人相が悪いって思ったんですけど、そんな子が腕組みして、仁王立ちになって私を睨みつけている。半分ぐらいこわかったですね。近づいてみれば僕の顔を見ながら、「先生なにしに来たんや」と言うんですね。そういわれたって、遊びに来たんですからね。「遊びに来たんやなあ」と言いましたら。いきなり、その子は声を大にして「先生、人間ちゅうのは遊んでたらあかんねん、働かんとかあかんねん」と言うわけです。嫌なことをぬかしやがると思ったんですけども、しばらく滞在いたしました。

その子と幸いなことに仲良くなった。ある日、その子が

一晩帰ってこなかった。近所に宇治川が流れていますから、みんな手分けして捜したわけです。次の日の夕方帰ってきました。2日目になったら、また彼がでかけていくって言うんです。どこへ行くのか聞きますと、向こう側に観音様があったんです。じゃあ僕らもいこうかと一緒に行きました。我々は岩波文庫とか小説とか持っていったんですが、彼は何も持っていかない。弁当だけ持っていった。観音様の先に水車小屋があります。水車小屋の前に彼は腰をおろしたんです。12時ころでした。飯も水車小屋を眺めながら、夕方の4時ころまでいる。そのうちに夕方になったからかえろや、また心配するからね、と言ったんです。「ときにお前な、この水車小屋がなんでおもしろいねん」と聞いたんです。水車が回りますから水滴が散ります。彼はその水滴を指さして、「先生なあ、こんなに世の中に美しいものあらへん」と。情けない話なんです、はたと気がついたんです。太陽が東から西へ移りますから水滴が千変万化する。こんな美しいものあらへんといわれてみると本当にきれいなんです。そうか、この子はこういうことが見られるのか、と思いました。」（柳沢寿男「福祉映画づくり、いってこいの関係」山形国際ドキュメンタリー映画祭ネットワーク『ネットワークつうしん』No.28、1993年3月）

柳沢寿男の回想は、「次元の子どもたち」の後半部分にいれられた近江学園の煉瓦づくりのことも触れてはいるが、柳沢の視線はむしろ重度の知的障害ではなく、軽度の知的障害の子どもに向けられており、直接、「次元の子どもたち」については触れていない。むしろ、「次元の子どもたち」については触れていない。むしろ、「次元の子どもたち」は、近江学園研究部が主導して製作されたものといえよう。「次元の子どもたち」は以下のような構成となっている。





「大津市保健衛生課が行なっている乳児健診の風景」

「精神薄弱児施設 近江学園」

「重度精神薄弱児といわれている子どもたち—1次元可逆操作の獲得に障害がある」

○きよしくん（1歳10ヶ月頃の発達）とかつおくん（2歳1ヶ月頃の発達）の発達検査（はめ板と積み木など）

- 起床、洗面—行動をつなぐ（ユカちゃん）
- ヤカンを持つての移動（きよしくん）
- 食事とその後の生活の枠—“間”への働きかけ
- ボールあそび—外からの変化
- 粘土あそび—内からの流露
- 自由時間
- 二次元形成の課題にたち向かって行く—はめ板
- 二次元可逆操作獲得の壁
- リトミックと交互開閉
- 仲間の中で働く—レンガづくり

「集団指導体制—指導についての職員との討議と社会の発達」

「無限の可能性—きよしくんの卒業式」

この「一次元の子どもたち」では、次のように、知的障害児の発達についての解説を行っている。「すべての正常な子どもも、1才半までにこの段階（自分の体と心にぴったりとくっついた行動をいろいろとくりかえすことはできるが、まだ外のようなすが変わったとき、その意味がくみとれない）を通る。そのことを明らかにしたのは、正常児ではなく、実はこのきよしくんたちである」「正常な子どもなら、1歳後半の数ヶ月で、あっという間に通りすぎるこの一次元の世界を、この子どもたちは、足をもつれさせながら、一步一步ふみしめるように行く」「人間は決して萬

物の霊長などではない。もともとおよそ不完全で欠陥だらけの生きものだった。だが、彼らは、一瞬も休まずに発達し、進歩しようとしている。だからこそ、人間なのだ。この子どもたちは、自分の全身で、われわれ正常者にそう訴えかけようとしているように見える」。すなわち、近江学園の映像とナレーションとして、人間発達の共通性、発達の質的転換期と障害児のもつれ・発達、無限の発達の可能性と継続する発達保障の取り組みの役割を示すことができるようになったのである。

この背景には、近江学園研究部における発達認識と発達研究の深化、職員間での教育体制についての自主的な検討、ヨーロッパでの障害のある人たちの社会参加や地域での受容についての糸賀一雄の視察からの示唆などがあいまって、1960年代の近江学園における「発達保障」の提起があった。それが重症心身障害児への取り組みを促し、第1びわこ学園の設立など重症心身障害児への「療育」の取り組みとして結実していくとともに、知的障害の重い子どもたちや、学齢を超える在籍者も存在していた近江学園内において、医療・福祉・教育の総合保障としての発達保障の提起となって、重度の子どもの教育保障の継続（養護学校の併設への対応）やびわこ学園での重症児の発達の追求としての療育実践を促していった。1965年、その社会への発信の一つとして、「一次元の子どもたち」があり、同時に、「発達保障」のより一層の深化のために、近江学園内外に呼びかけられて結成された「発達保障研究会」での問題の討議があった。発達保障研究会の機関誌として「発達の権利」が準備されたが、集団的議論のたたき台として田中昌人の筆によって、以下のような声明を含む未完の草稿が残されている。

「〈声明〉

われわれは、ここに、新しい権利獲得への闘いを開始する。

まず、われわれは、人間の全面的な自己実現の過程が、一面的・社会効用論的な能力結果主義によって、一方的・画一的に差別され、搾取されている現状を拒否する。

われわれは、障害をもっている老若男女をふくめて、あらゆる人たちの生涯にわたる全面的な自己実現の過程は、

平等な価値をもつことを認め、その実現過程を徹底的に尊重する立場にたつ。

そして、社会的な不平等と闘ってきた人類が、その闘いを強めていく中で、自然的な不平等を容認するようならば、自らもふくめて新しい社会的な不平等の中におちこんでしまうことを警告しつつ、搾取と闘う戦列に参加する。

「すべての人間の全面発達の権利を積極的に保障せよ」

これがわれわれの旗じるしである。」(機関紙「発達の権利」(仮称)第1号、1965年9月、田中昌人による原紙への鉛筆書き第3版)

3. 障害の重い子どもたちの発達保障の流れとその全国的展開—「夜明け前の子どもたち」

重症心身障害児の福祉的医療的対応は、1950年代後半から社会的な問題となりはじめ、1961年の島田療育園、1963年のびわこ学園と重症心身障害児施設の開設へつながり、1967年の児童福祉法改正によって重症心身障害児施設は法制化され、また、1966年からは国立療養所に重症心身障害児病棟が設置されていった。1964年には重症心身障害児の親の全国的組織として「全国重症心身障害児(者)を守る会」が結成されており、1960年代は重症心身障害児とその家族への医療的福祉的対策が社会的に整備されはじめた時期であった。しかし、1960年代から70年代にかけて進展したとはいえ重症心身障害児への対応は、就学免除をうけることを前提に医療的に処遇され、発達への働きかけは十分ではなく、施設や病棟のスタッフの筆舌に尽くしがたい貧困な療育条件の下にあった。重症心身障害児の極微の発達の様相は、先駆的に取り組まれた濃

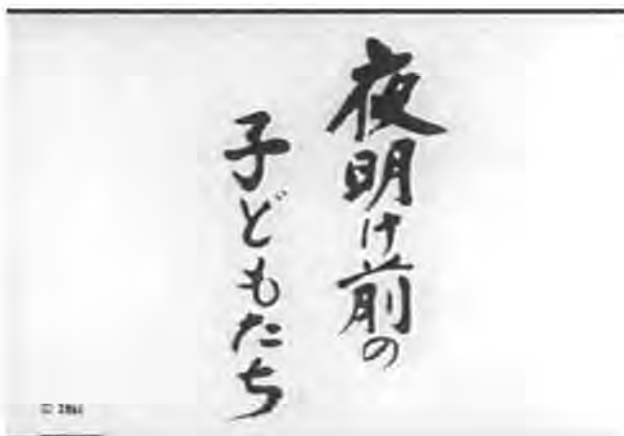
密な働きかけの中で、ようやく捉えられるようになっていった。その一つの典型が、重症心身障害児施設びわこ学園の取り組みから制作された療育記録映画「夜明け前の子どもたち」である(1968年4月)。

監督は「次元の子どもたち」の制作した柳沢寿男であるが、柳沢は制作の発端について、次のように回想している。

「(糸賀)先生が重症心身障害児の施設をつくる。重症心身障害児なんて見たことも会ったこともないんです。見に行きましょうというんで、行きました。尼崎というところに行っただけですけども、鉄格子のなかにいるんですよ。お母さんがお昼ご飯をもって入りますと、むしゃぶりついて食べる。お母さんが外へ出て鍵をかけようとする、母親に抱きついて、踏んだり蹴ったりする。これが重症心身障害児…(それを)教育する、療育をする。先生に「療育ってなんですか」と聞いたら、「そりゃあ、理論的にはわかってるけど、現場で試して当たっているかどうかわからない。だから学園を作って療育するんだ」というので、そうか、これはまたすごい、でも、この子が明日どうなるかということもわからないのに映画を撮るわけにはいかないと考えた。」

柳沢は、続いて、野洲の河原の石運び学習に言及しているが、そこに登場する一人ひとり子どもについては言及しているわけではない。「夜明け前の子どもたち」の音声を担当し、最終的にこの映画をまとめ上げた大野松雄は、この映画の最終部分での子どもたちのインタビューの経験において衝撃を受けたことを語っている。

「子どもたちは、大なり小なり言語障害をもち、車椅子に坐るとき以外は、寝たままではいなければなりません。聞き取りにくい話のやりとりの中で、私は次第に呆然とせざるを得ない状態になってしまったのです。子どもたちの口から出てきたことは、ベトナム戦争批判、万国博批判、全国の施設の子どもたちとの連帯…これらが、十歳前後の子どもたち、それも障害をもっているために、学校へ行きたくてもそれを免除させられてしまった子どもたちの声だったので。話はさらに、現場の職員がやめていく問題(へと続きます)。でも、驚いたことに、子どもたちの言葉の中には、批判めいた響きはなく、むしろ、やさしい、いた



わりの気持ちが感じられたのです。私たちスタッフは、療育に映画が参加したとか何とか、結構粋がって一年間も現場にいたくせに、子どもたちの確かな眼について全く無知であったのです。…このことは、私にとって、子どもたちへの心の負債として、私の中に長く残ることになってしまいました」

「夜明け前の子どもたち」のエンディングに使われた「学校に行きたい」「職員がやめていく」という子どもたちの声に、大野は「日本の現状に対するきびしさ、職員の現実に対するやさしさ」の確かな視点を障害のある子どもたちの発達として捉えたのである。しかし、映画「夜明け前の子どもたち」の最後で、「学校へ行きたい」「先生なんでやめるのか」といっていた重症心身障害児施設の3人の子どもうち、ふたりが映画完成後9ヶ月しかたたないのに、おむつをしてでもいきたいと強く願っていた学校へいくことを果たせないままに亡くなった現実が報告され、障害児の願いと権利を受けとめることへのあくなき追求がなされることとなる。

この「夜明け前の子どもたち」は、発達的にみると回転可逆操作の階層にある「ねたきり」のシモちゃん、連結可逆操作の階層にある三井君、そして次元可逆操作の階層へ移行の段階にある動きまわるナベちゃん、次元可逆操作の階層にありもつれをもつウエダ君・戸次君の姿をとおして、重症心身障害児の発達と療育が検討されている。「夜明け前の子どもたち」製作委員会の委員長だった田中昌人は、次のようにこの療育記録映画から紡ぎ出された課題を次のように述べている。

「シモちゃんたちへのとりくみの過程から、わたしたちは『回転可逆操作』の獲得期という発達の階層で障害をおこしている子どもたち、ベッドに寝たきりになっている子どもたちに、どのように連帯し、働きかけることによって子どもたちの発達要求にこたえ、縛られていた心を解放し、おたがいの共有財産にしつつ発達を保障していくことができるのか、そのとりくみの手がかりをつかみはじめたともいえます。しかし、同時にわたしたちは、そのつかみかかった手がかりを、その発見されたとりくみのいとぐちを、ただちに系統的な実践に結びつけていくことのできない、困難であるとともに重要な課題をもたされてきました。」

1960年代末の段階での「重要な課題」とは、「勇氣あるとりくみをして得た発達の事実、それを確かなものにしていくための条件—複数の人、時間・空間の確保、設備・保育材料費の確保など—を施設の内と外に実現させていくこと」であり、そのための行財政的な措置であった。1960年代の重症心身障害児施設の貧困な条件からは、療育充実は、筆舌に尽くしがたい困難をもっていた。しかし、そのような重症心身障害児への取り組みの基礎の確立は、「基本的人権獲得へつらなる重大な取り組み」であり、「シモちゃんのばあい」も含んで普遍的な重症心身障害児の発達を保障する科学をして共有財産化し、そしてこの子どもたちを「生きている」ことから「生きていく」という次の段階への発展をなしとげていくという、次の歴史の幕を上げるという課題を意味していた。「夜明け前の子どもたち」のフィルムは、全体で15万フィート、30時間分撮影され、その内の2時間がまとめられて「夜明け前の子どもたち」となったものであった。歴史的にもその初発の問題提起としてあり、また、療育実践としてもその一部で構成されているという意味でも、「夜明け前の子どもたち」は、その発達と療育の出発を告げるものであり、それ自体完結しているものではないものと位置づけられる。

むすびにかえて

戦後における障害児教育・福祉関連の学校・施設資料と教育実践資料は膨大であり、貴重な資料が散逸されるままになっている。その中でも、福祉施設や学校での実践を記録した貴重なフィルムやビデオが存在している。本報告では、近江学園を中心としたフィルムの概要を示して、その時期における障害のある子どもの発達の記録と発達保障の取り組みの特徴の一端を示したに過ぎない。

戦後における障害児教育・福祉、障害児保育・健診、障害者福祉関係映像のデジタル化については、現在まで以下のような関係資料のデジタル化を行ってきている。

①滋賀県障害児保育関係（『保育元年』『続保育元年』『続々保育元年』『光の中に子どもたちがいる』『続光の中に子どもたちがいる』『光の中に子どもたちがいる総集編』）

②近江学園・あざみ寮関係（『近江学園のいろいろ』、『あざみ寮—今日も元気です』『ロビンフッドの冒険』シリー

ズなど)

③びわこ学園療育記録関係(療育記録映画『夜明け前の子どもたち』およびその未使用フィルム、初期ビデオ映像)

④京都府障害児教育関係(京都府広報映画『人』、京都府立与謝の海養護学校『ぼくらの学校』およびその未使用フィルム)

⑤その他(奈良教育大学附属小学校障害児学級関連8ミリフィルム)

本研究では、障害児福祉や教育の実践を記録した映像資料を調査し、歴史的資料としてデジタル化し蓄積をはかること、あわせて、その活用により障害児教育・福祉などの施策の歴史に触れ、学習を深める映像コンテンツを作成することが必要であると考えてきた。戦後障害児福祉・教育に関する歴史的資料の整理、公開・共同利用を展望する研究の一環として、映像や音声の資料は重要な位置を占めるものである。また、それらは、障害児者の実態を生き生きとしめすものであるとともに、それを撮ったものの障害児者観を示すものでもある。それが故に、それらの映像コンテンツから、障害児者の実態や障害児者観の変遷、その発展を跡づけることができると考えられる。

戦後、権利としての障害児教育・福祉を追求してきた方々の粘り強い実践とその原動力になった子どもたちの発達の事実は、共有の財産とされなければならない。最後に、「夜明け前の子どもたち」の制作の後の田中昌人が、「夜明け前」から「夜明け」への努力を訴え、発達の価値を人々の共有財産とすることの意義を述べていることを引いて、結びとかけたい。

「1968年、わたくしは重症心身障害児の療育記録映画「夜明け前の子どもたち」の製作に参加しました。生き生きとして力強く明るい人間の発達の力を発見したわたくしちの中からは、もっと躍動した題名をつけようではないかという声もあがりました。こんなにも力強い人間の発達の力、差別に対するはげしい怒りの感情を全身にみなぎらせる人間の命の叫び、しかしこれにたいしてうけとめる政治には、この子ども達の権利保障の観点がない、その状況を示す表現として、そして、わたくしたちは、夜明けへむかって運動を前進させていこうという決意をこめて、『夜明

け前』の子どもたち」が作りだされました。

「夜明け前の子どもたち」が石運び作業で展開した人間の連帯の発達を学んでいった夏、全国のなかまの力は、全国障害者問題研究会を結成して、障害種別や地域をこえた自主的・民主的研究運動を生みだしました。全国のなかまに学び、「夜明け前の子どもたち」の職場では、「おたがいが団結し、わたしたちの生活と健康を守り、障害児の療育を守る」ために組合をつくりました。夜明けをめざして、権利保障への杭をうちこんだのです。それから、ひとあし、ひとあしのきびしいあゆみ、しかし子ども達はまた教育行政が責任をもった権利としての教育の保障がなされていません。映画製作の翌年やっと全員に教科書が渡たされ、地域の小学校と交流しました。その間に、「おむつをしても学校へ行きたい。友達がほしい」と訴えていたあつのおくんをはじめ9人の子どもたちがそのねがいを実現しえないまま亡くなりました。わたくしたちは全国のなかまとともに、「すべての子どもに教育権の保障を」をスローガンに運動にとりくみました。「学校へいきたい、ともだちがほしい」というねがいはフィルムから、テープから、活字から解きはなたれ、人びとの心にうつしかえられ、人びとを結びつけました。

ちょうどこの頃、わたくしたちはまた、「夜明け前」から、「夜明け」へ行くのには直線コースだけ、たとえば自治体請願をくりかえすということだけにあるのではないということを戦後の京都のたたかひの歴史の中から学ぶことができました。たんにサークルをつくるだけでなく、日常的な要求活動を結集し、いわばそこを拠点とする民主的な学校や保育所・診療所をつくって運動を強め、それを軸にして連帯への発達を実現し、自治体民主化と結合して進めなければならないことを学んだのです。「夜明け前」の状態ではあかりをつけることによって一部分を軽くすることができます。しかしそれが集まっても「夜明け」にはなりません。「夜明け」はすべてが明るくなることです。」

(田中昌人「みんなで夜明けを」(『夜明け』創刊号、1970年6月)

この論考は、『人間発達研究所紀要』(第26号、2013年3月、pp.87-96)に掲載されたものである。

Ⅲ. 大野松雄と『光の中に子供たちがいる』

Ⅲ-1. 『夜明け前の子どもたち』から『光の中に子供たちがいる』へ（大野松雄聞き取り）

玉村「旧制の中学校の時に敗戦ということですね。1947年に旧制の富山高校に入学したということで。1945年が敗戦ですよ。敗戦の時は府立六中の3年生ということで。先ほども少し話をしていたんですけども、その時の戦争の体験というようなことや、あるいは戦後どういう風に生きていくかみたいなことで。旧制高校に入ってただけでも新制に変わるところですよ。そんな端境期に色んなことをやり始める、文学座に入って、NHKの効果団に入って。フジテレビの方、新婚のお宅のところに窓から出入りをして、というようなことをやりながら1963年フジテレビ放送のアニメの鉄腕アトムの足音等を作られたというようなことです。音響デザイナーとしての経歴についてはレジュメに示した通りなんですけど、「アトムの足音が聞こえる」のところにありましたように、1967年に「夜明け前の子どもたち」に携わるというようなことがありまして、その後、滋賀の施設なども含めてずっと継続して取り組まれてきたということになっています。今も、もみじ・あざみ寮の方で寮生劇をやっています。今年はどうですか？」

毎年やっております。

玉村「大野さんは、毎年ということで、寮生劇をやっている。それで、その話を今日は大野さんを交えて聞こうかなと思ってるんですけど、先ほどもお話したように、私自身も揺れていて、成人の障害者のあざみ寮の話をしてもらおうか、それとも「夜明け前の子どもたち」から、就学前の障害児保育みたいなことをやり始めて、ドキュメントを撮り始めた大野さんの事を経験から話してもらおうか、どちらにしようかなと悩んでいたんですけども、先ほど大野さんと話をしていて、まあ、「夜明け前」の話に触れざるをえないだろうということも含め、光の中に子どもたちがいるということなをなぜそういう風になったのかということをお話してみよう。そういうような話でしたね。ということで、夜明け前の子どもたちの音っていうのは、さっき聞いてもらったようなことだったんですけど、…「光の中に子どもたちがいる」の一番はじめを見せたいなと思います。ちなみにパンフレットが本当はB5版ですかね、もう少し小さいんですかね。上映をすすめる会が作ったパンフレットが3冊ほどあって、「光の中に子どもたちがいる」

は一番はじめのものと、その2とその3というのがあって、また見ていただければと思っています。それで、ちょっとだけ、はじめの出だしを見ましようかね。」

玉村「ちょっと止めておきますね。大野さんにせっかく来ていただいているので、光の中に子どもたちを作ることになったいきさつとか、そこでどんな出会いがあったのか等についてお話をうかがっていいと思います」

はじめまして。大野と申します。いろんなことをやって今まで来たんですけども、60年代から70年代にかけて、いろんなことができた時代だったということもあるんですけど、60年代頭に鉄腕アトムっていう、日本で最初の連続テレビアニメ、当時テレビアニメって言ったかテレビ漫画って言ったか定かではないんですけど、ともかく国産ではじめて。それまではディズニーとかトム&ジェリーとか、ミッキー関係、そういったものしかなかったんです。はじめて連続のアニメーションをやるって言って当時騒がれたんですね。僕ははじめからやる予定はなくて、最初は関係なかったんですけど。今でもそうですけど、ある番組を作る場合に、その前にパイロットフィルムっていうのを作ります。で、それをスポンサー、クライアントに見せて、一応OKされるとはじめて放映されるっていう事です。まあNHKの場合は別ですけど、民放の場合はみんなそういう手順を踏んでいますね。そのパイロットをクライアントに「こんなじゃダメだ」ってキャンセル食らっちゃったことがあって。最初の放映が1月1日だったのに、12月の頭にキャンセルを食らっちゃったのかな、それでどうしようって言って。当時フジテレビが放映したから、関西では関西テレビですか。東京はフジテレビ。そこの映画部っていうのが取り仕切ってた。そこの副部長をやっていた人が僕の文学座時代の先輩で、僕をこの世界に引きずり込んだ悪い男で。彼の家に1年ぐらい居候というか転がり込んで、家賃は一銭も払ってなかった。その彼が、「誰かいないか」って言われて、「一人いるけど、すげえうるさい男だけいいか」って。向こうとしては藁にもすがる思い、「誰でも結構です」って。僕はテレビの仕事はやりたくなかったんですよ。ギャラは安いし、やたらと忙しいだけで。だからなんていうかな、でも家賃払ってなかったから、家賃代

わりに引き受けざるをえなくて。で、引き受けちゃうわけです。まあ、鉄腕アトムって漫画は本でずっと読んでいましたから、割と好きな作品でして、じゃあやるかっていう事で引き受けて。とにかくやりたいようにやらせろっていう事で、もう、遊びと実験とで、仕事しているのか何しているのか分からない状態で、4年間やって。

だから二度とああいう仕事っていうのはできないと思います。アトムが終わるころにはテレビ局はいわゆる効率化、そういう事で採算性を取る、無駄を省く。ところがこっちの仕事というのは無駄をやるというのが生きがいみたいな形でやっていたから、だから二度とできないと思うんですね。4年間そういう状態で続けられたのは、引き受けるにあたってギャラ交渉をしないとイケないんですけど、テレビっていうのはどうせ安いだろうと。だったら、はじめはそこそこいいけど、これは絶対にアメリカに売れると、こちらは音で売ってみせるから、その時にちゃんとしたギャラ交渉しよう。周りの人間はこいついったい何考えているんだろうと思ったらしいですね。日本のそういうアニメの動画が、アメリカに売れるなんてことは考えられないと。そしたら、1か月か2か月かしたら売れちゃったんですね。そういう事で、テレビ局は、こっちがやりたい放題やってもやめさせるわけにはいなくなっちゃった。そういう風に、弱みを握っちゃったもんだからこっちがやりたいことがやれた。やりたい放題やって遊び放題遊んだもんだから、すごい高いギャラをもらったんだけどすっからかんになっちゃって弱ったなあと思って。

そしたらたまたま、2、3年前にびわこ学園っていう施設が滋賀県に出来まして、ちょうどそのころ、そのドキュメンタリーを撮るっていう話は聞いてたんです。で、それを作ってる監督から電話がかかってきて、頼むからやってくれないかと。で、いいですよということになった。で、現場を見なきゃいけないんでびわこ学園に東京から行ったわけです。びわこ学園っていうのは当時、大津の街の中に第一びわこ学園、第一びわこ学園っていうのはどちらかという精神疾患のある方、もう一つは、その、極度の重症児。目が見えるかどうかわからない、耳が聞こえるかどうかわからない、ともかく寝てるだけという子どもたち、そういう重度な子どもたちが居たのが第一びわこ学園。それから、第二びわこ学園っていうのが、滋賀県の野洲町にありまして、そこには西病棟と東病棟があって。西病棟の方は、だいたい次元可逆操作以前の…

玉村「1歳半以前ぐらいの発達年齢の子どもさん達ですね」

だから、歩ける子どもも少なかったし、言葉も出てこない子どももいた。

玉村「ちょうど、少し見てもらった三井君みたいな子どもさんですね」

そうですね。ちなみに、「夜明け前」の頭の子どもたちの声が歌ってるのがありますよね。あれは三井君の言葉を繋いで歌にしたんです。で、東病棟、ここは脳性まひの子どもたちが割と多かったですね。それと、あとは今でいう知的障害、当時の知恵おくれ、その前で言えば精神薄弱、そういう子どもたちが居まして、その第二びわこ学園でほとんど撮影をやったんです。で、こっちが行ったときに、その映画の製作委員長が、当時近江学園の研究部長だった田中昌人さん。その後、京都大学の名誉教授になった人です。その人に会って、色々案内してもらって。これが、どろ沼に入る第一歩みたいなことになっちゃった。その時の僕は音響デザイン。「大野さんは、びわこ学園の子どもたちを見て、どういう事をやってみたいですか？」って言われて、こちらはそんなこと考えていないから、でもなんか言わないとイケないから、で、まあ前からちょっと思っていたんですけど、音声信号が言語に変わるのはどういう形になるのかという、これをちょっと考えてみたいとは思っていたので、それを言ったら、ぜひそれを考えてくださいと言われて。それを言ったのがもう、あとあと30年後までのしかりまして。それが、田中昌人さんとずっと映像面でお付き合いする第一歩になった。それで、色々やりましたともかく夜明け前の子どもたちっていうのは非常にすったもんだあったんですけど、とにかく完成しました。

ただ、その時に僕が見て感じたのは、ちょっと違うんじゃないかと、なんていうかな、今の言い方だと「目線」ですが、こちらはその頃「視線」って言ってたんです。上からの目線なんですね。子どもたちをこう、上から見てる。それじゃあ分かんねえだろうと。ドキュメンタリーっていうのはそれじゃ絶対撮れないですよ。相手と目と目を向き合って、それで相手から信頼されるということが大事。それがなければドキュメンタリーっていうのは撮れない。ところが、それはどっちかというところ（上から）なんですね。あれは療育記録映画、療育の療は医療の療、療育の育

は教育の育。だから、当時医療にしても教育にしても全部上からですよ。以外にね、みんなそうなっちゃうことがあるんですよ。例えば、去年に 3.11 の後で、日本中が「頑張ろう」となった中でこういう言い方をする人がいました。「みんなに希望を与えたい、勇気を与えたい」。特にスポーツ選手に多かったですね。それにものすごく僕は引かかった。与えるっていうのは上から下にものをやるっていう事なんです。僕なんかトラウマになっているんだけど、子どもの時にアメリカ軍がチョコレートを放り投げるんですよ、で、みんなもらうわけ。まさにそういうことですよ、与えるっていうのは。だから、昔でいえば、病人にものを与えるわけですね。勇気とか希望を届けたいっていうのなら分かる。与えるっていうのはいったい、お前は何様なんだっていう。それと同じことが、夜明け前の子どもたちの作り方の中に、やはりあったんじゃないかと感じた。

玉村「特に監督、柳沢監督のやり方に…」

それを話すと長くなっちゃうから…。

玉村「コンパクトに、ちょっとお願いします。」

それをやった監督というのは、私はもう昔から知っている人だったんだけど、やたらと上昇志向が強い人だったんですよ。当時の劇映画をやってた、そういう連中というのは劇映画が唯一のあれなんです。ドキュメンタリーなんていうのは片手間みたいな。その監督も劇映画の監督になりたかったんだかなれなかったという、すごい鬱屈したものがあってですね。だから何か、有名になることをやりたいと。たまたまその人の奥さんが岩波映画の監督をやっています、当時、夜明けの国という中国の…

玉村「ちょうど、文化大革命が始まるころの…」

そうです。まだ毛沢東の時代の。で、当時の中国がこのぐらい凄いんだっていう感じの映画なんですけど。まあ、なんていうか奥さんが有名になっちゃった。だから、何とか奥さんより自分が偉くなりたいっていうこと。なんていうかな、映画界ではね、テレビ界でもそうだったけど、青春ものみたいな風に、身障ものというのがあったんですよ。

玉村「しんしょうもの？」

身体障害ですね。心身障害も。

玉村「ああ、障害のある人をとにかく映すみたいな」

だから、子どもたちがどうなればいいのか、発達とは何かということを中心に考えようともしないで撮っちゃったんじゃないかと思う。スタッフもまじめな人が集まったんだけど、まじめだから余計始末に悪いわけですよ。妙にまじめに現場を批判したりする。例えば田中先生が「ときはなつ」とか色々言うから、例えば見ればわかると思いますが、ナベちゃんという子がいて、すぐ飛び出しちゃうんですよ。だから、どうしていいかわからなくて、紐で縛っておくという。それもだんだん皆分かってきたんだけど、そういう事をスタッフが聞きかじって『そういうのはけしからん。違っているんじゃないか』とか言うんですよ。そんなこんなで、現場とスタッフの間で相当もやもやしていたことがあったんですね。そういうところから、当時の、田中先生もそういう面がちょっとあったんですけど、やはり学校の先生とか研究者っていうのは、割とこういうのが多いんですよ。なんていうかな、出来上がったんだけど、これでいいのかと。それから、これは入門編ではないかということ。その次の各論がないと、序論だけでやったらあれでしょ。各論があって、最後に結びがないと。起承転結がない限りは一つの物にならないわけですよ。だからすごく違和感を抱いたまま、子どもたちに許可をもらわないまま、許可をもらおうと思っても無理だったかもしれないけど。ただ、もらえるような作り方、接し方をしてないし。だから、やはり、これはおかしいなと思っていたわけですよ。

で、まあ、それが 68 年に終わって、71 年に、大津市で社会党系の市長さんが当選しちゃって、その市長さんの公約が、当選した暁には障害児保育の実現を目指す。当選しちゃったんで、障害児保育をやるということになった。それで、それをやるにあたって、そういうのを映画にしたいということで、これまた田中先生からお願いがあって、頼まれて、そしたら予算的にもあれだし、製作期間も 1 か月半ぐらいしかない。これじゃ何もできないし、だから、その後も撮り続けられるのであれば引き受けてもいいと。それで、こういう試みが始まりましたというのを作ったんですね。それが保育元年っていう。市役所なんていうのは 1

年たつと職員の異動があるわけですね。その時の課長、次長、部長なんていうのがみんなどこかへ行っちゃった。そしたら、そんなものやる気ないっていうような感じになっちゃって、なんか詐欺にあったみたいになっちゃった。で、田中先生と、しょうがないから撮ろうっていう事で、それでカズエちゃん、今の入園前を撮り始めた。誰にするかっていう事は、民生委員の児童委員の人に、今年入園する子どもで撮影するにあたってご家族の方が撮ることを了解してくれる、できれば家庭まで行って撮らせてもらえるかどうか、それがOKな人ということで。で、一人、OKだったのが、さっきのカズエさんっていう。あの時は3歳ちょっとなんですけどね、あれで何キロだったっけな、見ると体重がわかりますけど、なんせ彼女だけ二桁以上だった、すごかったんですよ。で、とにかく撮っていた。そしたら、入園の日に保育園まで行って撮っていたら、新聞記者が取材に来て、田中先生と僕がこうこうでと対応したら、それが次の日の滋賀版かなんかに出ちゃったわけ。それで市役所が慌てて、急ぎよ安い予算を組んで。で、結局、市の方としては、保育元年、続保育元年、続続保育元年、3本作ったんですけど。でも、それじゃ障害児保育の発達のもとになるものがわかりませんから、しょうがないけど1年間はとにかく撮ろうと。で、撮ったわけですね。そしたら、ちょっと前まで歩行ができなかったのが、ようやく、あの子、歩行ができるようになった。

玉村「入園式の時には走ってましたよ、バタバタって」

あ、出てくるどころ？でも後は歩いたでしょ。で、ともかく保育園に通っていく中で歩行ができるようになった。だから、1か月半になるとスタスタ歩けるし、歩くことに余裕ができるとあちこちに。だから外の世界を取り込もうとしていくわけですよ。それと同時に道草を食うようになった。そして、全然言葉のなかったのが喃語が出てきた。チャブチャブとかアブアブ。これはすごいなってなって。それで、ちょうど1年ぐらいたった時に、うちに遊びに行ったときかな、僕が『どっこいしょ』って言ったら、オウム返しに『どっこいしょ』って言った。これが、音声信号が言葉として出てきた初めてのことですね。

ドキュメンタリーっていうのはいつもうまくいくわけじゃなくて、全然ダメな場合もあるわけですね。だから、よく言われるのは、『1年目にどっこいしょって言わなかったらどうしてたんですか？』。言わなかったら、なぜ言わ

なかったかということ報告する。だから、1年たって、そういう発達以前の変化ですね、変化がなかったのはなぜかという原因がないとおかしいんですよ。どんな重度の障害のある子どもでも、いろんな働きかけをすると何かしらの変化が出てくる。発達とは言えませんが変化が出てくる。その変化の積み重ねが発達に繋がっていくんだろうと思うんです。だから、変化が見えなかったら、それを起こさない原因があったということですね。これは医学的な問題なのかもしれないし、何があるのか分からないけれど、そういう事をきちんとやっていかないといけない。そういう事をやっていくのもドキュメンタリーフィルムの仕事だということですね。だから、テレビのドキュメンタリーの見出しでありますよね、『〇〇に密着』。で、何かあれば号泣したりね、感動したり。あのね、やっぱり感動なんてのはそんなにあるものではないんですよ。だから、今、みんな感動音痴になっているんじゃないですかね。感動したフリをすればいい。そんなに人間っていうのは簡単に泣けるものではないですよ。だから、1年やってみて、『どっこいしょ』って言ったのがよかったなど。撮りはじめてみて、撮り続けなければ、夜明け前の子どもたちの二の舞になってしまうわけですね。だから、やるんだったら、少なくとも、カズエちゃんっていう子どもが入園してから卒園するまでは撮り続けよう。ということで3年以上撮って、すっからかんになって。借金だらけになって。そういう事なんですよ。だから1年目の中でも、どういう働きかけがあれば、何かが出てくるっていうのは、僕は信念として持つようになったんですね。カズエちゃんが歩けないところから歩けるようになった、歩けるようになると、好奇心が出てきて世界が広がっていく。その中で、保育園っていう、要するに子どもの集団ですよ。だから、あの子達がよかったのは、障害児だからといってベタベタしない。悪いところは悪いっていうところがあったんですよ。その中でカズエちゃん自身は子ども同士の中でルールみたいなものを見つけていく。それから、彼女にとっての弱い部分、それを子どもたちがさりげなく手伝っていく。手伝ってやるんじゃないんですよ、サッとこう…

玉村「手伝っていくと」

もう一つは、保母さんがベタベタしていなかった。一步引いて、見ていたんですね。これはやはり、その年にできたばかりの保育園だったんですけど、保母さんの中で、障

害児保育の経験があった人はいなかったんですね。だから、どうしていいのか手探りだったそうなんです、それも良かったんじゃないかと。それともう一つよかったこと。障害児保育をずっとやっているところはあったわけですよ。エリート保育園って言うたのね。そういうところじゃなかったってこと。だから、周りの子どもたちも保母さんも、カズエちゃんと一緒に育っていった。試行錯誤しながら。

玉村「だから、大野さんの文章の中には、光の中に大人たちもいるということになるんですね」

だから、ひとつ大事なものは、保母さんとか職員、指導者ですね、指導者っていうのはある程度こういう関係でやらなければならないところがあるわけですよ。ただ、やはり、大人は全員、元子どもなんだから、OBとして子どもと同じ位置で見ていく必要があるわけですよ。その両方ができるかどうか。子どもでもあれでしょ、1次元、2次元、3次元、その中で縦と横とナナメの関係、これはやはり発達の中の3次元の世界に入っていく大事なことなんですね。

玉村「だから、大体1歳頃には『～ダ』みたいな行動をするんだけど、1歳半の節目あたりで『～デハナイ～ダ』みたいな行動の様式が出てくると。そういうのはまた後で子どもの発達と遊びの中に見る子どもの発達というところで話があると思うんですけど。で、2,3歳ぐらいで『イヤ』みたいなところが出てきて、でも、4歳ぐらいになると自己調整ができてくると。で、マルなんか閉じて、いっぱい大きなマルを描ける2次元的な世界に入ってくると。で、5歳半ばから7,8歳になってくると、真ん中みたいなもの、昨日と今日と明日の関係みたいなものができてくると、というようなことなのかな、発達の筋道で言うと」

まあ、発達の筋道なんていうと、また話は尽きないんですけど。田中昌人さんと90年代に、健常児、4か月から6歳までを、発達診断と、遊ばせてそこで何があるか見るっていうのを二本立てで6年間追いかけたことがあって。これはなんと申しますか、光の中に子どもたちがいるでお金を使い果たして、京都へ亡命してきたわけです。それで、大野松雄でやると、あちこちに迷惑がかかるかもしれないんで、大竹二郎っていう名前です。これもあれなんですけど。

玉村「大竹一郎、大竹二郎、大竹三郎っていうのがあるらしい」

大竹一郎っていうのは、それぞれがそれぞれの所属があった時代に、民放なんかができる、そこに出稼ぎに行ったわけですね。それからフジテレビの映画の副部長だった竹内さん、竹内さんっていうのが1番年上だった。それから僕が来た時に、二人の名前から『大竹』で、一郎で、僕が二郎だった。それで稼いで、ギャラもらって。だからそれを使えばちょうどいいやと思って。クロサワリョウって割と有名な、そいつが大竹三郎で…。

玉村「ということなんです、話を戻して。6年間ですか？撮ることになったと」

やはり、障害をもっている子どもだけじゃなくて、健常児を追いかけると。まあ初めてですよ、映像で。これを行ったのは、僕にとってもすごく面白かったですね。だから、カズエちゃんにしても、あざみの寮生さんにしても、ほんとにスローモーションみたいな形で行くわけですね。それが健常児の場合だと、はっと気づくと変わっちゃう。一番びっくりしたのは、最初に4か月撮ったわけですね、発達診断を。その時にアヤちゃんて子どもが、4か月だから最後はグズったりして、もう一回撮ろうってなって。1週間か十日後かな。その中のいいところを繋ごうということ。お母さんとアヤちゃんに同じ服装で来てくださいとお願いして。そしたら1週間か十日後で、そのアヤちゃんの顔がまるっきり変わっちゃった。

玉村「きりっとしたような…」

分かるでしょ、乳児期前半後半の。ほんとは乳児期前半だけで、4か月の変わり目っていうとこでやってたのが、それだけじゃ収まらなくなって、それで、前半、後半に分けたんですね。それまで、研究してる人たちの中でもそれは分からなかったと思うんです。やはりそういう目で見ないとそれは分からないと思うんですよ。育てているお母さんの場合でもずっと連続してるからわからない。

玉村「ずっと連続しているのも分からないんですよ。だんだん僕が太っていくように、ねえ」

それを A という時間軸で見て、今度は B という時間軸で見る、その間に時間が流れているわけですよね。そこそこを並べてみると、まるっきり別人ですね。やはり、発達診断ではこうだったけども、遊びではそれができている。だから発達診断だけで判断するのも非常に危険だということを感じましたね。発達診断はテストですよね、緊張するんですよ、子どもは。場合によってはできることができない場合もある。特に発達診断というのは、はい次、はい次っていうようにやるでしょ。ゆっくり見ている暇がないわけですよ。そういう事もあるし、遊び、要するに、その子ども、同年輩の子どもと公園に行って勝手に遊ばせる。そこで何をやるかを全部記録する。カメラマンは大変でしたけどね。どこへどう動いていくかわからないわけですよ。こっちに行っただと思ったらあっちに行っちゃうしね。でも、それをやってみて、子どもの遊びの中でも、例えば兄弟がいるか、一人っ子か、保育園に行ってるか行ってないかで、子どもってできることできないことが随分あるんですよ。だから、アヤちゃんの場合はお姉さんがいたんですけど、ブランコにしてもなんにしてもお姉さんが見本を見せて真似できるわけですよね。もう一人同い年のチイちゃん、この子は一人っ子で。そうすると見習う上がいないから、どうしても遅くなっちゃうんですよね。チイちゃんて子は保育園に行っていた。アヤちゃんは保育園に行っていなかった。チイちゃんはできる、アヤちゃんにはできないっていう事もあって。だから、置かれた環境で、いろんなことがあるんですよね。そこらへんもきちんと見ていないと、なんだできないじゃないかということになってしまう。

玉村「発達診断っていう場面だけではなく、自由に遊ぶ場面を撮ったということの意味が大事であったと」

大事だった。だから、遊びと発達診断をフィードバックさせること。

玉村「関係させながら…」

遊びの場合っていうのは流れてますからね。見落とすとすぐ次に行っちゃいますから。だからそれをフィードバックさせてあげるとよく分かるし、さらに田中先生の解説と一緒に見るとさらに分かる。田中先生ともよく話したんですけど、今の学問の世界では論文っていうのが重要視されてますよね。論文っていうのは書くこと。ところが書くこと

ていうのは、そこで終わっちゃう場合があるんですよね。そこから立体的に、映像的なものが浮かぶかどうか。それと同時に論文の用語がありますね、非常に堅苦しい。あれは学者村だけに通用する。だから、そういう学者村みたいなものがあつたから原子力村っていうのもできたんじゃないかと思いますけどね。一般の人たちがなんとなくわかる喋り方とか書き方、そういうものがあるんじゃないかと思うんです。特に発達なんかをやる場合には、あんまりそういう事が分からない保母さんとか、お母さんたちですね、そういう人に話をする場合に、一次元可逆操作とか、ちんぷんかんぷんだと思うんですよ。それを分かるように喋るにはどうしたらいいか。これは日文研の人たち、あそこの先生が小学校に教えに来てて、みんなすごく弱ったそうですよ。子どもたちにも分かることを言えるのが教育者と分かった。やはり、世の中に通用するのは論文じゃないってことですね。これは学者村だけに通用するから、まあそれに通用しないと困るでしょうからそういう事も大事だけど、でもそれは世の中には通用しないと思った方がいい。

玉村「というわけで、夜明け前の子どもたちがきっかけとなって、保育元年、続保育元年…。これは大津市が作った映画なんですけど、それに引っ掛けて、もともとは光の中に子どもたちがいるという3部作を作って、卒園するまでということで障害のある子どもさんたちの保育を開拓するような記録映画を作られてきたということなんですけど。パンフレットをプリントアウトしたものなんですけど、その中には大野さんの歌がありましたよね、あれも大野さんの作詞で。作曲は誰なの？」

あれは鈴木キヨシっていう、関西フォークを最初にやりだした連中の…

玉村「もともとで言うと音響の人なので、作詞はなんでしたんですか？」

いや、だって音響の専門家になるつもりでは全くなかった。だって童話ばかり書いたこともあるしね。だから音響の専門家って言われると、ほんとにそうかしらと。

玉村「必要だから歌も作ったと、そういう感じですか？」

あの時は、なんとなく主題歌を作りたいなと思って。それ

で鈴木キヨシに頼んだら、いいよって言うから。大阪にいる人だったから、新幹線の中で作詞して。でも、その程度のことって誰でもできますよ。私は専門バカにならなかった。好奇心が旺盛で。

玉村「ではみなさん、今度のレポートは主題歌を作って、ということにしましょうか」

まあ、これは今の大学でこんなことをしたら除籍になっちゃうからダメだけど、言ってみれば、遊び心がないと何もできないとは思いますが。ゆとりがなくなるでしょ。遊び心と実験精神ですね。人がやってないことをやってみるとか。これは面白いからやってみようとか。

玉村「僕は光の中に子どもたちがいるの話を聞かせてもらって、あの歌も大野さんが作ったんだとかというのを改めて聞かせてもらおうと、お金がなかったのかなとか思ったりもするんです。逆に言えば、そういうの必要だよって言うところで、ドキュメンタリーに合ったような、そんな雰囲気というものは、やはり作っている人しか分からないと思うんです。例えば、カズエちゃんの雰囲気にしてもね。だから撮っている人や関わっている人が、この時はこんなだったよって。…当時、障害児保育を撮ったものって他にはなかったですよ？」

その時はないですね。それ以降もあんまりないですね。

玉村「そういう事も含め、ドキュメントフィルムとして歴史的な意味がすごくあるのではないかと思っているわけです。その時から30年、40年経ってるのかな。カズエちゃんはどうしたんですっけ」

一昨年、ばったり会って。元気は元気でした。お姉ちゃんがケースワーカーかなにかになっていて。やはり、ずっと面倒見ざるを得ないでしょう。

玉村「そういうことで。就学前の障害児保育と、それだけではなく、健常児のものもされていたと。今さっき、この子は障害児、この子は健常児っていう、これには意図みたいなものがあったんですか？」

要するに、子どもっていうのは、障害の有無にかかわらず

一緒なんだよと。

玉村「そういうようなメッセージを込めて」

分かる人には分かるだろうと。まああまり深く考える必要はないんですよ。

玉村「皆さんも一回、そういうドキュメンタリーみたいなものをね。今はビデオで撮るということも簡単にできるので、そういう事も考えてみたり、やってみることもできるのかなと思うんですけど、記録というのはフィルムで…」

大変ですよ。結局フィルムしか方法がないわけですよ。そうすると、キャノンの……これは3分弱しか撮れない。だから、そこを考えて撮らないと、一番いいとこで無くなっちゃうという。第2部、遠足のところで、川を渡っていくシーンがあるんですよ。はじめは怖くて渡れないんだけど、先生の関わりで渡れたという。そこでフィルムが無くなっちゃったんですよ。カメラを2台用意していたので、まわしっぱなしにしても、必ず6分は撮れる。あの時、やはり20分以上かかったのかな。で、慌ててフィルムをもって走って…という。で、撮れてるかどうかというの、現像してもらわないと分からない。だから苦労して撮って、編集フィルムをあげてもらわねえ。それがあがってきて、見て、ダメか、っていうのが随分あるわけですよ。その分はフィルム代、現像代、全部かかるから、べらぼうにかかっちゃう。あの時は東京から大津まで、行ってる期間の途中で倍に上がっちゃった(運賃)。最初の頃は東京の青山から、タクシーで東京駅行って新幹線で往復して、1万円でお釣りが来たの。今はそれじゃきかないですよ。1万円でお釣りが来ていたのが撮影の途中で2万円以上になった。毎週行くわけですからね。

玉村「というわけで、破産してしまったと。で、逃亡してきたと。そんな時代があったということで。それと同時に、あざみ寮の方は、寮生劇をずっと毎年やっていると。その指導とか音響に関わってきたということもありますが、そっちの方はどのようなものでしょうか。もう何年ぐらいいなりますか？」

もうあれですよ。77、78年からかな。

玉村「もともと、あざみ寮に関わったというのは…」

結局、夜明け前の子どもたちの時に、監督をやった人が、あざみ寮っていうのはすごく親切にしてくれるわけですよ、飯はうまいし。で、あざみ寮ではあざみ織りっていう織物をやってる。これがなかなか優れたもので、で、監督が、これはすごくいいから東京で展示会を開かせましょうということで、で、頼むよと言われて。そのことであざみ寮に行くようになった。もう一つは、夜明け前の子どもたちを撮ったカメラマンの人、当時のあざみ寮っていうのが、大津の幕末以前にできた料亭、当時の花街で。未認可の施設だったんで、認可させないといけないので、それで建て替えというよりも移転をした。で、カメラマンの人が、あんなにユニークなものが無くなるのは惜しいから記録に残しましょうよと。で向こうに今度行くから、行ってきましようかと。で、まあ寮としてはありがたいことで。じゃあ何から撮ろうかということで。それが万博の前の年で、ご当人はその撮影で、1年以上海外に行っちゃったわけ。だから、こっちはやると言った手前、やらざるを得なくなっちゃって。で、今日もみんな元気ですっていうフィルムを作ったわけ。

玉村「それを作ったのは1970年ぐらいですか？もう少し後ですか？」

作ったのは、光の中での第1部と一緒に。引っ越しまで撮って、そのままにしてたらなんか気持ち悪くなっちゃって。で、光の中での第1部がなかなかうまくいかないんですよ。なんか引っかかっているからかなと思って。で、あれをまとめたからっていうんでまとめた。

玉村「その時からずっと、寮生劇、寮生劇は引っ越した時からやり始めたんですか？」

引っ越しからちょっと経ってからですね。

玉村「何とか一座みたいな人たちが入ったのは」

それはもっと後。最初はそんなのじゃなくて。自分たちで作るのはいいけど、学芸会みたいなのはやめなさいと。やはり、本物を寮生が味わうようなことをやりなさいと。やはり本物っていうのを知らないで困るんですよ。で、そん

なこんな言ったらロビンフッド。

玉村「ロビンフッドの冒険っていうのをやることになったんですよ」

で、初めてプロが参加するようになって。一回目が終わって二回目に、その時に、大阪の、今は割と有名になっている、南河内万歳一座の人たちが応援に来て。それからドイツで有名になっている…（聞き取れず）。やはりそこで、プロの連中が付き合うことで寮生さんが刺激を受ける。で、面白いのは、そういう連中じゃないとずっと付き合えなかったと思うんだけど、役者連中も刺激を受けるんですよ。特に知的障害をもつ人たちの独特の才能なのかもしれないけど、本物の役者なんですよ。だからね、本番に強い。稽古の時全然ダメでも、本番になるとあれ？って。っていうのは割とあるんですよ。そういうのを劇団の連中が見るとぶったまげるわけ。だから両方で、非常にいい関係ができたわけ。それができたのも学芸会じゃなかったから。ダウン症の子で面白い子がいて。亡くなっちゃったんだけど。もう舞台の上で本物の役者が絶句しちゃうわけ。やりこみがすごくて。だからそういう関係ができたのは、ある意味成功でしょうね。

玉村「そういう意味で言えば、あざみ寮では本物のものを取り入れていく。あざみ織りなんかも含め、指導者が入って、交流をしていくというのが目指されているわけです。そういうのもフィルムに収められているので、また見せないと思うんですけど。では、今後ということで、夜明け前の子どもたちは、大野さんに言わせると、イントロ、導入であると。まだまだ子どもたちが変わってきているところが、発掘し残しているということもあるので、未使用のフィルムを岡崎英彦さんなんかから依頼をされて、テレシネをされていると。で、光の中に子どもたちがいるも実は、この前発見がされたんですが、本人はもう忘れていたんですか？未使用のフィルム18本について」

あれは、田中研究室でやったんです。

玉村「田中研究室で、1990年に逃亡して、京大の教育学部の田中昌人さんの研究室のところにずっと居候して、そこで未使用のフィルムを繋ぎなおして、それが18巻、この前発見されて。それを再度、作り直さないといけないな

という話をしていたんですね」

確かに、あれでしたね。1巻目、2巻目の時に、田中先生と見たんですよ。本編で見落としていたところ、こんなことやってたんだとかね。ここでこっちを見てるとか。新しい発見がありましたね。やはり、こういう障害児のドキュメンタリーなんか、編集しているときに5.6時間にまとめたものをみんなに見せて説明して行くわけですね。で、話をして。説明をしている間に、「あ、ここはいらない」とか自分の中でやって、最終的に2時間ぐらいにして。で、この2時間ぐらいにする時が一番大変なんですよ。

玉村「もう切れないというか。どっちを切るかという話になってくるんですね。」

で、説明して行くと、その度に発見するわけですよ。

玉村「逆に切れなくなってしまうということですか」

いや、どっちが必要かってことで。

玉村「そこらへんは、どれも大事だという話になるんですけど、映画の制作ということで言えば、2時間以内に収めないといけない、ということになりますでしょ」

だから、使っていない方に宝の山が残るっていうのはそういう事なんです。

玉村「使っていない方をもとにしたら、また別のものができるのかな」

できないことはない。いわゆる、こういう形ではなく、ある発達の軌跡という形ならできますね。やはり、そういう事をやっていくと発達についてたくさん勉強できるわけです。前にも言ったでしょ、発達に関しては、下手な大学院生よりも私の方が分かるって。

玉村「そんなこんなで。今、大野さんと一緒に、夜明け前の子どもたち、光の中に子どもたちがいる、そのほかにも近江学園の様々なフィルムを集めて、歴史的な順序性に基づいて並び替えてみたりとか、あるいは、少し解説をいただいて、これはこんな場面なんだと。僕らから見ても、分

からないわけですね。当時の指導員の人はこんな人だったとか。そういう事が分かってくると、ああこんな意図でやってたんだな、とか分かってくるということもありまして。その中で障害のある人たちの現実を考えさせていただいている、ということなんです。で、主には、夜明け前の子どもたちの時には大野さんは音声をずっと拾うということを中心にやってたわけですよ、あれ、違うの？大野さんは手伝ってくれてと言われて、全部手伝ったの？」

いや、手伝うというより、スタッフですから。スタッフってのは手伝いじゃないんですよ。

玉村「主には、田村一二先生の息子さんと、大野さんで現場を回していたんですか」

いやいや、現場は全然できないですよ。最後に吉田厚信の録音なんかはやったけど。撮影中は助監督に全部やらせてた。

玉村「最終的な編集のところを大野さんが？」

そうですね。田村君は現場の序列でいくと、サード。それとスチールカメラ。

「田村さんというのは、田村一二さんの息子さんで、スチールカメラと助監督…」

3番目の助監督。助監督が全体の段取りをやる。

玉村「制作委員会の関係っていうのはどのようなものだったんですか？制作委員会で場面設定などは議論になっていたんですか？」

さあ、僕は制作委員会に出たことはないから、最後には出たけど。まあ、それはほとんどお任せでしたね、分からないわけだから。だから、お任せにしたから、大変な事になった。すごい赤字を背負ったわけ。

玉村「当時二千万。今でいうと10倍ぐらいですから、2億3億ぐらいの負債があったと。そういう事も糸賀一雄の死期を早めた一つの要因だった、というようなことですね。で、まあできた時には糸賀先生はすごい喜ばれて…」

すごいほっとしてて。最後まで嫌だと言っていた父兄もOKしてくれて。丸く収まったと。

玉村「ずっと、映して、まず父兄に見せるんですね。こんな場面で私の息子が出てくるのは嫌だとか、そういう話があるんですね」

父兄だけじゃなくて、各施設の子ども達とか制作委員、父兄も含めてやるわけですね。撮影していく途中で見せていく。だからそんなに長くはない、全部やったら大変ですから。

玉村「で、最終的にこういうものができそうだと、という段階で父兄に見せるわけですね」

そういうことですね。だいぶ前からそういう問題はあったんですよ。

玉村「というようなことがあって、最終的には糸賀先生がお話をされて、納得をされて、上映という段取りになったと」

最後は、全部出来上がって、今でも覚えているけど、京都新聞のホールで保護者を集めた上映をして、それでOKと。

玉村「それで公開をしていくと。それで、最初は今の天皇が見たということになるわけです」

今の天皇は、びわこ学園に来てるからね。

玉村「ということで、不思議な話なんですけど、発達を保障していかなければいけないんだというような話を一番はじめに天皇が聞くと。なかなか面白いと思うわけです。今後また、フィルムみたいなことを含め、大野さんと一緒に仕事をしていきたいなと思っていますので、発達などについては、子ども発達診断のビデオ版とか、遊びの中の子どもの発達みたいなことをずっとやっておられるので、京都にお住まいでもあるので、いろいろ聞かせてもらえればと思います。何か質問は？」

『ありがとうございます。カズエちゃんの保育園の件で

すが、やはり、指導者というか保母さんが壁を作っていないか』

まあ、最初のところで、保育園が見えるガードレールのところで、カズエちゃんが疲れて座っているところがあるんです。あの時保母さんたちが、窓からカズエちゃんを見て、まあ初めて見たような感じで、どうしようと話をすることがあって。だから、最初は何かオムツをはかせることだったって言ってましたね。それがないと、動くことも難しい、ということは保母さんが言っていました。

『私、大野さん自身に興味がありまして、なんでも受け入れて、ものにしていかれますよね。それは、なんなんですかね』

なんていうか、こちらからやろうって言ったことは一度もないんですけどね。まあ、なんとなく、やる羽目になっちゃうことが多いですね。で、やるからにはやると。だから、鉄腕アトムもしようがないからやっただけ言う面がありますね。それから、光の中に子どもたちがいるも。あざみ寮もそうですし。

玉村「もともとで言うと、音についての興味はずっとあったんでしょ？」

ないですよ。僕は、学生時代、4年、旧制高校へ入っちゃったんですけど、あれは行くつもりはなかったんですよ、家族も思ってたなかった。サボってばかりいたから。割と、僕が当時行った中学校が進学校だったんですよ。だから、みんな受験するから。で、受けたら受かっちゃった。で、行くの嫌だけど、みんなが行けって言うから行ったんですけどね。で、当時の中学が5年制だったんですね。で、4年終了時で上級学校に入学する資格があったわけです。ところが、ちょうど僕の時が、学制の切り替えの時、だから僕は4年でいくと、最後まで、大学まで旧制で行ける。で、5年で行ったのは1年だけ旧制の高等学校や大学に入れる。で、1年経ったら、もう一回新制の大学に受けなおさないといけない。そうすると、僕が3年になると誰もいなくなるわけ。そのまま行けば旧制の大学に入れるわけ。で、当時、旧制の大学というのは、工学部とか経済学部とかそういうところを狙わなければ、東大なんてところは、

もう無試験同様で。だって、学科によっては学生よりも、助手、助教授、教授の方が多いたともあった。

玉村「だから、旧制の東大なんかは、旧制の一高なんかの人たちが無試験で入ってくるよな感じなんですよ」

当時の大学って言うのはそうですね、欲張らなきゃね。

玉村「そういう風に進学をせずに、大野さんがやめてしまったのはなぜなんですか？」

なんとなくバカバカしくなっちゃった。って言うのは、そんな形で、誰もいなくなるようなところでしょ、バカバカしいじゃない。学生生活みたいなものがないわけだから。だから、学生生活みたいなものがあったのは1年の時ですよ。寮にいて。2年、3年がいて、わーわーやるってのができたのは、1年間だけですよね。全部、みんなバラバラになっちゃったから同窓会なんてやってないと思う。だから、割と執着心、そういうところがない。まあ一番巻き込まれたのは、8月15日ね。それを境に、今まで正しかったことが、全部間違っていましたと言われちゃったわけですよ。やはり、中学3年生ぐらいになるとそれは困りますよ。ただ、今考えて、なるほどと思うのは、当時、20年の5月ぐらいになると、戦争に勝てるとは思わなかった。だけど、負けるってことが分からない。要するに教育でそういう、負けるってことを教わってきていないんですよ。だから、負けるってなんだかわかんない。勝てないとは思ってたけど。だから8月15日に、ガーガー雑音だらけでよく分からなかったんだけど、教師がみんな泣いてて。これは戦争が終わったんだと。だから終わったという感覚で。負けたという感覚は分からなかった。だから、戦争が終わって嬉しいという気持ちもないし、悲しいという気持ちもないし。ただ何となくぼーとしてた。ただ、戦争が終わって最初に感じたのは、灯火管制が無くなったこと。生まれた時から灯火管制のもとで生きてきたわけだから。だから、京都へ来て驚いたのは、回覧板っていうのがあるのよね。あれ、すごい僕は拒否反応があるわけ。戦争中、隣組って言うのがあって、回覧板が回ってくるわけ。隣組の組長って言うのが、権力の末端で、だから威張ってるわけ。そういうのが戦争末期は警防団って言うのができて、その団長になる。それもやはり威張ってて。だから防空演習って言うのがあって、それに出ないと非国民だから。ところが

空襲があって、真っ先に逃げたのはその人だった。だから、いわゆる権力とか、正しいとか正義とか、一切バカバカしくなった。

玉村「なおかつ、一番初めから、なんでもかんでも作らないといけない時代ですよ。音楽でも、ドキュメンタリーでも。一番初めに影響を受けたのは、亀井文雄さんだったんですか？」

ドキュメンタリーでは亀井文雄さんですね。亀井文雄さんってのは、東宝の短編映画部、戦前に小林一茶とか、上海、南京、最後に戦う兵隊っていうので、戦わない兵隊を作っちゃって、反戦映画だと。当時の現役の映画人ではただ一人パクられてしまった。

玉村「大野さん自身は、NHKの効果団とか、文学座とかなんですけども、映画とかドキュメンタリーに入っていくというのは…」

NHKの頃に、文学座の時から知ってたヨシダミツオさんっていう人を手伝って、その後、映画の方をやってくれないかということで。だから当時あれですよ。今井正とか、山本薩夫とか。

玉村「その中で一番影響を受けたのが亀井文雄さんで。亀井さんっていうのはドキュメンタリーを主に作っていた人ですよ。というわけで、一番初めに見せた、世界が恐怖するとか。その前に実は、生きていてよかったっていうのを作るんですよ。亀井さんは。原爆にあって、いろいろ悲惨な生活をしていただけども、生きていてよかった、みたいな」

結局、外へ出られない、当時、原爆で被爆した人たちっていうのはすごく差別されてた。外へ出られない生活だったわけ。ちょうどその頃に水爆実験があって、それで杉並の主婦の人たちが原水爆反対運動をおこして、署名運動をした。それが1千万人かなんかで。それで、原水協ができて、広島で原水爆禁止世界大会が開かれて、そこで被爆した人が参加して、そこでこの世の中になって、生きていてよかったって言った。

玉村「それがあつたり、そこで原爆小頭症の子どもさんの

話があって、それを亀井さんが聞いて、映画を作るわけですよね」

やはり、被爆した人の本当の声を…

玉村「伝えたいということで。その後、放射能の雨ということで、世界は恐怖するというのが作ったと」

ちょうどその後、1950年代っていうのは、日本中に放射能が降り注いだ時代なんです。だから、今流行っているセシウムとかストロンチウムとかっていうのは当時、毎日新聞に出ていたわけ。で、その放射能がいかに恐ろしいかっていうのを映画にしようっていう事で長編ドキュメンタリーを作ろうってなったのが、世界は恐怖する、なんでですよ。

玉村「この中の音をやっているのが大野さんで。50年代はドキュメントを中心に、亀井さんを中心に色んな人とお付き合いをしながらやってきて。60年ぐらいに入らへんで電子音楽とか…」

いや、電子音楽はもっと前で、NHKにいるとき。

玉村「それで、音と電子音楽の関係で、アトムが63年からと」

そういう事ですね。

玉村「何度も聞き取りを行っているんだけど、分からないこともあって。今年になって初めて、亀井文雄の話を見せてもらって。岩波新書に『戦う映画』っていう、亀井文雄が亡くなられた時に編集をされた新書があるんです。その本を手に入れて、読んでるとなるほどなど。ドキュメント映画みたいなものが、日本の中でどのように位置づいてきたのか等、少し分かってきたような気がしたんですけど、その中に身を投じられながら、いろんなことをやって、それを障害児、障害児保育の世界で、記録として作られてきたというのが大野さんであるのかなと」

そういうもんです。だから、ドキュメンタリーっていうのは、それだけじゃなくて、横への広がりっていうのが色々あるんですよ。社会ってものを見つめないで、ドキュメン

タリーっていうのはできないから。テレビのドキュメンタリーっていうのは、社会を見つめて撮ってるんじゃないで、言ってみれば、身障ものだから撮るとか。そういう言い方で撮っていくから感動を与えるものがないわけよね。感動を押し付けちゃうから。感動っていうのは、押し付けられると白けるだけ。だから、例えば、水俣病の映画があるでしょ。あれを見ると、やはりびわこ学園の子どもたちと似ている節があるわけですよ。だから、例えば、この前、鉄腕アトムで、原発問題とはどうなんだってことを言ったけど、原発を平和利用っていう非常におおらかな時代があったわけ。やはり、ヤバイぞっていうのは60年代の終わり、公害問題があったから。公害問題と、原発、すごく胡散臭くなってきたわけ。そこら辺から、原発に対しておかしいと思う人は増えた。

玉村「そして3.11があり。この前清水貞夫先生に来ていただいて、福島の障害のある人たちの、東洋学園ですか、その話も聞いて。特別支援学校をどのようにしていくのかということも含めて、今、横の関係、社会との関係で、障害のある人たちの問題も含めて、少し考えていただければなと思ったわけでございます」

あんまり深く考えずにね。でもちらっと、どこかに留めておけば、あれはこうなんだというのが出てくると思います。

注

この聞き取りは、2012年9月21日、京都府立大学での障害児教育の講義の中で行われたものである。

Ⅲ－２－１．『光の中に子供たちがいる 1 大津市における新しい障害児保育の誕生』(1975年、綜合社)

(ナ) 光の中に子どもたちがいる。光を浴びて子どもたちがいる。光は輝く。同じように輝く。どの子にもどの子にも。障害をもっている子にも、もっていない子にも、みんな同じように降りそそいでいる…はずだ。

子どもたちは未来の光。みんながきらきら光るように。みんなが明るく唄えるように。ぼくたちが手を貸そう。大人はみんな手を貸そう。一九七三年四月。日本列島のどまん中、日本一大きな湖、琵琶湖を抱えた大津市で新しい保育の試みが始まった。保育元年が始まった。

「先生おはようございます。みなさんおはようございます」

(大野) 一九七四年四月、大津市も保育二年を迎えました。ぼくたちは今年、入園するかずえちゃんの家を訪ねました。かずえちゃんの場合、障害の原因はわからないのですけれど、発達に障害があるということは認められていました。ちょうど今、このとき三歳と十か月。

(母) ひとりではあんまり出さないようにしてました。今までどこでしたら、たいがい外でじっとしてましたけど

(大野) あそこは前が国道だからね。

(女) ごちそうさまできる?

(大野) あ、できた

(女) 上手にできたね。

(女) どこ見てごちそうさましてるの? ごちそうさましたの? 残した?

(女) 高野さん、生まれたときは大きな声で泣きました?

(母) 取り上げてるときは泣いたんですけどね、保育器の中に入れてから全然泣かなくなったんです。それでちょうど保育器に入っているときに、熱が出たという話で、そのときに病気を起こしてたのではないかと思いますけど。

(大野) 初めにあったときのかずえちゃんの印象というのは、何かゴムまりみたいに太った愛敬のいい子どもだなという感じがしました。大津駅からすぐ裏の国道一号線を入ったところに、新しい保育園が建ちました。朝日が丘保育園。大津市立です。この園にかずえちゃんはちょうど一か月遅れて入園することになりました。五月一日、かずえちゃん入園の日です。

(保母) はいはい。いこう。立って

(母) おすわりしてしまっ

(保母) よかったね。よかったね。はいはい。

(保母) こっちいくんやで。かずちゃん、こっち。(…笑っているよみんな…)

(大野) かずえちゃんは前の年の十二月までまだ歩けません。ようやく歩き始めることができるようになったそうです。国道一号線へ出て、ここでは撮影できなかったんですけど、今むこうにみえているあのバスに乗って、停留所を三つばかりいったところでおります。降りたかずえちゃんは再び歩きます。だいふばてばての状態、足がもう横に開いています。ようやく園のみえる前まで来てまずは、一服。ここでは指さしができず、てのひらで方角をさしています。再び歩いて、かずえちゃんにとって生まれて初めての犬散歩旅行もいよいよ終わりに近づこうとしています。

(母) がんばって、がんばって

(保母) おはようございます。

(母) おはようございます。かずちゃん、おはようございますは?

(保母) おはよう。はい、いらしゃい。みんな、まっではるよ。

(母) どっこいしょ。くつぬげるかね。

(大野) 初めての友だちとの出会い。

(保母) はい、おかばんここ。

(子どもの声)

(大野) みんなちょっと、かずえちゃんに、かずえちゃんにとっても、お互いどうしちょっと戸惑っている感じで、相手にさわってたしかめ合います。

(子どもの声)

(保母) かずちゃん、ここ、ほいするの。ここ、ほい。

(保母) 押してあげたらあかへん。おこしてあげて。よいしょって。

よいしょ、よいしょ。かずちゃん、おかばんかけとこ。

(大野) 日課が始まります。まず、お手洗い。このときはまだ、かずえちゃんは自分で水道をいじれません。先生にやってもらっています。

(大野) かずえちゃんは、入園する前、親子教室に通っていて、むすんでひらいてを知っていました。そして手をたたくところがすごくお気に入りだったそうです。(…むすんでひらいて…)

(…はをみがきましょきゅつきゅつきゅ…)

(大野) お父さんも心配で仕事を休んでかけつけてきました。

だいたい一時間半くらいたったところです。もうちょっと飽きてきたようです。まあ、入園第一日目の顔見せとしては、まあこんなところではかろうというので、かずえちゃんは帰るわけです。これはかずえちゃんにとって新しい歴史の始まりの日であったということになります。

(大野) 子どもの日。皇子が丘でつどいがありました。かずえちゃんも参加しています。まだかずえちゃん、あれくらいの段を降りるのもちょっと厳しいようです。でも石段を抱えられながらですけど上がって行きます。

青嵐保育園のともちゃん。かずえちゃんが保育園に迎えられるためには、保育元年の一年間の大津市での実践があったわけです。一年前のともちゃんは、まだ、みんなのリズムの中に乗っていくことができませんでした。

(……いとまきくるくる……)

(大野) このつくし保育園。ここは、もうだいぶ長い障害児保育の実践の歴史があります。ちえちゃんはそのなかでもう二年目を迎えていました。そしてそういう実践の中で子どもたちがお互い同士助け合うという習慣が自然に生まれてきています。帰るときもボーイフレンドがちゃんとガードして門のところまで送って行きます。ちえちゃんは七十四年に逢坂小学校の仲良し学級の入学しました。

(大野) 七十四年青嵐保育園。二年目を迎えたともちゃんはもうすっかりみんなのリズムの中に入っています。そしてボーイフレンドもちゃんとできています。

(子どもの会話……聞き取り不可)

(大野) 入園してからだいたい一か月ばかりたちました。たったそれだけでかずえちゃんの歩き方がしっかりしてきたのにはびっくりしました。歩けるようになったことで余裕ができたのでしょうか。盛んに道草をしています。そして前にはできなかった指さしができるようになっていきます。そして園の門の前まで来たら急に一目散にかけだして入っていったのに、僕たちは驚かされました。

(……むすんでひらいて……)

(大野) 遊戯も先生や友だちのを観察して、まねをしながらなんとか合わせようとしています。

(……むすんでひらいて……)

(大野) それでも、なんか遠慮して乗ってるような思いやりを感じたりして。止まったはいいいけど降りることができなくなっちゃって、でんとしりもち。イスとりゲームでは、かずえちゃんはイスなんかに座ることよりも、もう走ることで一生懸命

命です。

(保母) ちょっとまって、かずちゃんが脱走する。かずちゃん。

(大野) かずえちゃんにも、かなちゃんとか、しのぶちゃんという友だちができ始めています。ブランコはまだ見るだけなんです。すべり台もまだちょっと片足を乗せる程度。

(保母) それでも今日初めて一段両足のせたわ。ブランコ乗ったらいいのに、かずちゃん。ものすご気になんねんな。すべり台が。

(保母) やってみたいんやね。

(保母) いままで、すべり台はあんまり興味示さへんかったやろ。

(保母) そうや。

(保母) それあかんわ。かずちゃんそこや。

(子) のいてください。のいてください。

(保母) かずちゃんすべってみる？ここらへんから。

(保母) せーの。のいてあげて、行こうっていでてあげて。

(大野) 子どもの世界ではルール違反は厳しく拒否されます。かずちゃんの泣き方というのはすごく勇壮です。

(保母) かずちゃん、さあ上がってくださいよ。

(子) はよう、はよう、

(保母) もったげよう。がんばり、がんばり。

(保母) あかん (泣き声) ……こわいのかな。

(保母) 悲しいの。じゃあどうするの

(大野) こうしてかずちゃんのすべり台への挑戦は、一応終わったわけなんですけど、やっぱりこれは腕の力に問題があるんですかね？

(田中) そうですね。かずちゃん、足の力がしっかりしてきて歩くだけでなく、かけるようになってきましたけど、これから、腕に力を入れていくことができるようになる。そのことが大切なわけですね。すべり台というのは、ただ足で上がっていくだけでなく、しっかりと手に力がついてくることによって足の力も生きてくる、そういうことを試す非常にいい場面なんだなって、この絵を見ていて思いました。

(大野) やっぱりこの場面に出ているタイヤ運びでも、腕に力がないんで、運べないということもあるんですね。

(田中) そうですね。腕から指への力、これがついてくるとこの段階をひとつのりきっていくわけですね。すべり台というこの絵は、僕は本当に素晴らしいかずちゃんの発達の状況を示している絵だと思いました。

(大野) やっぱり腕の力がついてくる、腕から指への力がついてくる。その次はいよいよ言葉の問題になってくるわけですか。

(田中) そうですね。

(大野) やっぱりこういう風にして、先生がまずは興味をもたしていきうような形でやっていくということが大事なことなんですね。

(田中) そうですね。しかも友だちと一緒に、自分のもっている力を発揮させていくということ、その中にはこうして、なかなか思うようにいかないこともあるけれども、子どもの世界というのはやっぱり結局は、協力しあって仲良しになっていくんですね。

(大野) なんかこれ、ほっとしあうところがありますね。

(田中) そうですね。表面的な上辺のことだけではなくってね、ひとつの仕事をやりあげていく……

(大野) かずちゃんのトイレです。かずちゃんは入園当時おむつをしていました。

先生はべったりと助けるのではなくって、要所要所だけを助けます。

(保母) お母さんと入園の前に一度面接という形でかずちゃんと二人来られたんですけどね、おむつだとおっしゃるし、大きい部屋でどうやって、しかも一番身体の大きな子のおむつをどうして換えようかって思ってね、もう、たれてもいいからってパンツにすぐしたんですけどね。

(保母) 初めはおむつカバーもあったんよね

(保母) はじめ便器に座らせたんですよ。そしたら便器のペーパーをはさむのに顔がうつるから、遊んで遊んで。それにしゃがむのができなかつたみたいやったしね、それでおまるで。おまるもなんとか壊れんといままできてるし。

(大野) かずちゃんはこのときはまだ半日保育で昼寝は一緒にできません。お母さんが迎えにきたんですが、すっかり保育園の生活に馴染んだかずちゃん、帰りたがりません。

(保母) かずちゃん、帰ろうって。

(母) かずちゃん、またもうちょっとしたらお昼寝して帰るようになるよ。おりこうやな。もういくつかな。

(保母) 今日、部屋の中をイスとりゲームをして、初めから最後まで走ってね、みんなと一緒に。

(大野) 梅雨がやってきました。雨の中をかずえちゃんはお母さんと一緒に歩きます。真剣そのものっていう感じの顔をして歩いています。でも保育園の門をくぐったとたん、顔がふつとなごんだのを見て、僕たちはびっくりしました。

外へ出られないので、部屋の中はごった返しています。そんなときに僕たちは、かずえちゃんが新聞紙を縦に折りたたんでいるのを見つけたわけです。誰かが折り目をつけた後なんでしょうけど。

かずえちゃんはたいへんおなかがへります。それでパンをそ

っと食べようとするんですが、先生に見つかってしまいました。でも残念で泣き出しちゃいました。

ここで先生、バンバン叩いてからだ中で怒っているわけですけども。

(田中) ずいぶん、気持ちを交わすようになりましたね。ただ身体で変に入っていただけではなくして、ずいぶんなごんだ気持ちで、更に自分のもっている率直な胸の内を現すようになっていきます。

(大野) そうですね。そういうのがいろいろなところ出でてきているんじゃないかと思うんですけど。

(田中) そうですね。

(大野) これなんかも、いたづらをするようになってるんですね。人のものを取り上げて。しのぶちゃんのを。

(田中) なかなかちゃめつけなまなざしで。

(大野) そうですね。そしてちゃんと返してやる。

(田中) 保育園の中で、友だちのルールみたいなものが、自分の気持ちを整えているようですね。

(大野) そうですね。

(保母) ふーしてごらん。じょうずじょうず

(田中) これも勉強ですね。これはだいじですね。足の力がしっかりついて雨の中でも歩けるようになるだけでなくして、そしてお友達の中に、自分の気持ちを率直に現すようになり、手や指の働きを自分の気持ちと一緒に、力強く教材や友だちの中にぶつけるようになると同時に、口で吹いたり。言葉が出るために基礎の仕事をやっていますね。

(大野) なるほどね

(田中) いい保育内容ですね。

(田中) ずいぶん力強く描けるようになってきましたね。これは楽しみですね。まだ広がりが出てきませんが、これから描いている世界の中にも広がりが出てくるんじゃないでしょうかね。

(大野) いろいろなことをやりながら、待ちに待った給食の時間がやってきました。かずえちゃんはお母さんの話によると、なんでも臭いを嗅いで確かめたそうです。

(田中) そしてまた、すぐに食べるんじゃなくて、みんなと一緒にという園の生活が自分のものになってきていますね。

(保母・子) いただきます。

(大野) 熱かったらしいですね。

(大野) お腹がへってしょうがないので、隣のお友達のにまで手をのばします。

(田中) ???ですね。いつまでもこういった関係ではなくし

て、きっと新しい関係が生まれていくでしょうね。楽しみです
ね。

(大野) かずえちゃんの体重はとうとう三十キロになりました。

七月二十日、近畿地区、梅雨明け宣言。そしてこの日、湖西線も開通しました。

(大野) かずえちゃんのお母さんは前から自動車の運転の練習に通ってとうとう免許をとり、車を買ってかずえちゃんの送り迎えをするようになり、この日が確か始めての日じゃないかと思うんです。みんな迎えに出たわけです。それで、両わきと後ろに従えて堂々とかずえちゃんが入ってきた。それを見たとき、ああみんなの仲間入りが本当にできたんだなあという気がしました。

見るだけだったブランコにも乗ってみることができるようになりました。でもまだ先生に助けてもらっています。でもおしりが大きいんでなかなか……体操も、身体は動かすんですが、手の方はついていけないようです。初めての水遊び。かずえちゃんはお腹を大事にするらしくて、やたらとお腹をよくたたくんです。

(大野) 色水遊びという時間。みんなでボディペインティングをやっています。

(保母) はい、見てください。かずちゃんのはすごいです。

(子) わー

(保母) ばんざいやなあ。かずちゃん。

(大野) 夏のある日、かずえちゃんは今までできなかったすべり台に挑戦していきます。

ついにかずえちゃんはすべり台への挑戦に成功しました。全日保育に変わり、昼寝の仲間入りができるようになったかずえちゃんは、はりきって準備をしています。やっぱり昼寝することによって、またエネルギーが蓄えられるんじゃないかという気が僕たちはしました。

大津市が保育元年を始めるに当たっていろいろな前史があるわけです。そのなかで僕たちは、近江学園を忘れることはできないと思います。今は亡くなった糸賀一雄先生が、同志の方々と始められたこの近江学園は、ここから全国の新しい障害をもつ子どもたちの教育の新しい実践が始まったといっても過言ではないのではないかと思います。そういう中からさまざまな動きが出てきます。たとえば大津市で始めた乳児健診なんかもそうです。先生、どういう形で乳児健診は行われたわけですか。

(田中) 障害ももっている子どもを小さい頃そのままほっておいて大きくなってから施設に入れるだけであつたり、あるいは

新しい試みではありましてもすぐ直線的に保育所に入れるというのではなくして、それまでをしっかりと健診をし、相談をし、また必要な治療をする。それを一人のもれもなくしっかりやっ
ていこうということで、障害をもっている人たちも、そうでない人たちも含めて、赤ちゃんの時期、四か月と十か月にしっかりその人の発達にどう
いう援助をしていったらいいかをみているわけです。

(大野) そういう中で、早期に発見された障害を克服するためのさまざまな対応策が考えられます。親子教室もその一つです。かずえちゃんもこの先輩です。

(田中) そうですね。親子教室で子どもたちはともだちを知るわけですし、親御さんは親御さん同士手をつなぐということを知るわけです。

(大野) やはりそういう長い歴史の中から障害児保育というのは始められたわけですね。そういう親同士の力が毎年琵琶湖のキャンプを行っています。ここでかずえちゃんがお弁当箱を新聞紙で包んでいるのを発見しました。これは初めてみたんです。

(田中) だいじですね。ただ開くというだけではなく、ものを包んでいくということはやはり気持ちを何か蓄えていく、そのことのひとつの現れですから。こういう気持ちをもって、力をもって、次への発達の構えが生まれてくるわけです。ただ足の力とか手指の力、あるいは吹く力がついてくるだけでなく、ついてきた力で何かを蓄えていくということがとても大切です。

(大野) なるほど

(田中) この夏までにそれができてきているのがわかりますね。

(大野) 水の中でお父さんの手を離れるとやっぱり不安になって泣きます。

(田中) 何か支えがほしいんですね。手に支えがあると、こういう風に足で非常に力強く、地上とはまた違った力強さを発揮していますが、これくらいのはなし言葉を身につけていく前の段階というのはこういう斜めの姿勢になっておもいきり力を出し切るということ。これは夏でないと無理ですが、水の中ですとか、あるいは坂を登りながらということでないと思えないんですけど、こういう風な力が出てくると、楽しみです。

(大野) ころらへんでかずえちゃんは、だんだんことばらしきものがまだ意味不明ですけど出始めてます。

(かずえちゃんのことば)

(大野) ここでもいろいろなことをしゃべりながら、すすきの穂を使ってそれをおもちゃにして遊んでいるかずえちゃんを発見しました。

(母) おばけだよ、おばけだよ

(かずえちゃんのことば)

(母) かずえちゃんうれしい？

(ぶちやぶちやぶちやぶちや……)

(母) おとうさんに英語しゃべっててもわからんよっていわれるんやな。かずちゃん。

(ぶちやぶちやぶちやぶちや……)

(大野) 園外の保育として、裏の小高い山というか、丘の上の公園まで歩いて出かけます。かずえちゃんも歩いています。

大津の町はちょっと高いところに登ればどこからでも琵琶湖が見おろせます。走ったのはいいんですが、友だちが止まるとかずえちゃんも一緒に止まってしまいます。帰りはうば車に乗って帰ります。なんでも春のときは、往復保母さんたちがおぶって行ったそうです。

(大野) 遠足は京都岡崎の動物園。かずえちゃんはここでいろいろな動物に対していろいろな反応を示します。お母さんもお昼に間に合うように弟のこうちゃんをつれて車で駆けつけました。

はなちゃんが袋からお菓子を出してくれます。でもかずえちゃんは歯が弱いのでおせんべいはいやといえます。はなちゃんがあめをプレゼントしています。でもそれには深い理由があります。帰るとき、お母さんが自分のくるまで帰るか聞きましたら、かずえちゃんはみんなと一緒にバスで帰るといって、バスと一緒に帰りました。かずえちゃんはすっかり園の一員です。

(大野) 大津祭りの宵宮。

(母) もういいな、かずちゃん、もういこうか。

(大野) こういう縁日の出店はかずえちゃん初めてだもんですからなにかもが珍しいようです。金魚すくいも道具の使い方は、持ててもまだわからないようです。手でつかもうとします。

(ナ) 祭りの調べの中に、古い近江が息づく。近津、近江、湖の幸と山の幸、豊かな水辺に人々は住みつく。そのむかし、まだ表日本だった日本海の浦々、人々は大陸から朝鮮半島からこの島国にわたり住む。この土地は渡来の人歩いた地、渡来の人住んだ地。そこに、まだ日本ではなかったときのそこにもっとも新しい文化が花と咲く。近津、近江。その昔新しく開いた古い花は、いままた咲き始める。

(大野) 一夜あけて十月十日、本祭り。こういう狭い道を曳山が入ってくるというのも地域の本当の祭りという感じがしました。そのからくりも大変古いものなのだそうです。

(大野) 逢坂保育園と合同の運動会。かずえちゃんの足は誰よ

りも一番高くあがっています。堂々の入場行進です。体操。手も少し上がるようになってきました。このころになると、かずえちゃんは、自分が苦手なもの、たとえばジャンプのようなものになると、それを前もってわかっている、先生のところにきて助けてもらいます。終わると戻って、ちょっとひと休み。

ここで僕たちはかずえちゃんが自力でジャンプをしたのを初めてみました。タオルもきちんと折り畳んでいます。もう友だちのを見ながらすっかりついていくなっています。

転回は縦に転がるのも横に転がるのもおんなじだということで、横に転がっていきます。

(大野) 園長先生は、都会の子どもたちは土の楽しさを知らない。土を知らないということで、何かさせようと、さつま芋を植えました。今日はいも堀。かずえちゃんはさつま芋がこんなところでできて食べられるものだというのを初めて知ったと思います。何か現場監督のように先生を指図しています。ここにもあるぞというように。園庭でやきいもをつくってみんなで食べます。味の方はともかく、みんなで食べあったということで、ひとつの連帯感が生まれたかも知れません。ブランコはようやく二回か一回だけこげようになりました。まだ足が上がっていません。でも嬉しそうです。朝日が丘名物、園庭走り。この保育園は涼しくなって、冬にかけて、また春まで、毎日園庭を走ります。みんなで園庭を走ります。かずえちゃんも一緒に走ります。ときどきさぼりながらそれでも一生懸命走ります。

(……むすんでひらいて……)

(大野) もうすっかりかずえちゃんはみんなと一緒に遊戯をすることが出来ます。

手を使わなくても足でしっかりリズムをとっています。自分で創作して人に教えることもしています。あれはおやすみをしているつもり。これはスキップのつもり。ちゃんとリズムには乗っているようです。

先生やとなりのけんちゃんにほめられると、かずえちゃんすぐ調子に乗って、また出演します。今度はだいぶよたよたしています。ちょっと複雑な折り紙なので、しのぶちゃんが手伝ってくれています。この辺になるとかずえちゃん、いたずらをするのに人の隙を見つけるのがだいぶうまくなってきています。さっと、またさっと。いたずらの度が過ぎてついにひっぱたかれてしまいました。さっそく先生にご注進に行きます。でもどちらがさきにやったのかということでかずえちゃんだいぶ歩が悪いです。仕方なく悲しそうに席に戻ります。

(大野) 冬がやってきました。

逢坂保育園と合同でもちつき大会です。

(……ぺったんこ、ぺったんこ……)

相変わらずいたずらをします。どうやってもだめなので、??を考えます。いよいよついたおもちを食べることになりました。かずえちゃんは、もうそわそわして落ち着きません。「わっ来た!」と思ったら素通り。「こんどこそ」と思ったらまた違う。ようやく口の中へ入れられました。おもちのび方について研究しています。このあとかずえちゃんは、自発的に先生の手伝いを始めました。

(田中) そうですね。これ、はじめてですね。運動会から少し見通しが出てきて、先生に教えてもたいに行くようになってきましたけど、こうして先生のしていることの中に、入っていくようになっていきます。ただ紙を折るだけでなくして、目的に応じてちゃんと自分の身につけたことがらが取り入れられるようになっていきます。

(大野) ちゃんとふいていますね。

(田中) そうですね。力を入れて。

(大野) クリスマス。なぜかかずえちゃんも一緒に入場してきました。

(……きよしこのよる……)

(大野) なんとなくかずえちゃんをモデルにして描いたんじゃないかという感じです。

(大野) 会食の準備。友だちはみんな部屋で待っているんですけど、かずえちゃんは現場監督よろしくデンと構えています。臭いをかいだり、いろいろと指図をしています。みんなが入ってきました。主催者のような顔をして、「まあ、座れよ」といった感じです。

このころになると、かずえちゃんは止められることをわかっていて、それを期待して何かいたずらをします。遊びの気持ちが出てきています。

(子) いただきます

(大野) この時僕たちはかずえちゃんのスプーンの使い方がうまくなったことにびっくりしました。

(大野) 年があけて、一九七五年。この冬は割と雪の多い年でした。

かずえちゃん、竹うまに挑戦。けんちゃんが支えてくれます。でもやめた。けんちゃんが、「じゃあ、僕がやるぞ」と言っているんですけど、かずえちゃん、「できるかしら」という顔でみています。やっぱりだめでした。このころになると、かずえちゃんはカメラに興味を持ちます。そしてカメラの方をじっとのぞき込みます。そしてカメラマンが「よーい、どん」と言うと、あ

あやって向こうにかけて行きます。ジグザグながら向こうに行ってまた戻ってきます。そしてもう一度「よーい、どん」。今度はだいたい端折って戻ってきます。

(大野) 出席をとるんですけど、かずえちゃんは、ひとつところで何回もやったり、それかとばしていっちゃったりするので数がわからなくなってしまいます。でもリズムはちゃんととっています。そのかわり、もう一回改めて勘定をしなおします。このころになると、かずえちゃんのいたずらはだいたいぶエスカレートしてきて、イスをさっと引いて尻もちをつかせるのです。しのぶちゃんはその犠牲者になりました。かずえちゃん、先生に叱られて、自分も悲しくなってやっぱり自分も泣いちゃいます。

(泣き声など)

でも子どもたちの世界はもう笑って、すぐに遊戯を始めます。おしくらまんじゅう。みんなでおしあいへしあい。かずえちゃんは下敷になって、動きたくても動けません。とうとう手をふんずけられてしまいました。それではもういっぺん。はみ出したところを、しのぶちゃんがまたつれて中にいれてきます。かずえちゃん、いやじゃないらしくて、また中へ入ります。外へ出られないときは、何かこうやってじっと春へのエネルギーをためているんじゃないかという気がしました。

(大野) 巡回相談です。

(田中) 子どもたちが蓄えた力を小児科の先生と、心理学の専門の人と、ケースワーカーの人と、これだけの人たちがチームになって、各保育園を巡回しています。子どもたちを総合的に、発達的に診断することと、そして保母の先生たちと話し合いをすることと、そしてお母さんたちのいろんな相談に応じて行きます。かずえちゃんの場合は、春からこちら、ひとつには足がしっかりしてきて、手にも力が入るようになってきた。それだけでなく、指先でもずいぶんしっかりといろんなことをやり越えるようになっていきます。それからもうひとつは、自分の感情をととても率直に友だちの中に、あるいは先生たちの表現して、しっかりと、真剣な顔をして物事に取り組む。そしてやりあげた時に、そのよろこびをふっくらと現しているという、感情の面でも豊かな成長をしています。そして自分の心にふくらんできたものを、道具を使ってなにかつみこんでいくような、それはおもちゃを、ただ扱うというだけでなく、気持ちを同時に包み込んでいくことが、しっかりできていますし、そのようにして包み込んできたものを友だちとのあいだでも、いたずらと言うよりはむしろ、「試す」ということの芽生えがでかかっています。ですからやったことを必ずお友達の中に、あるいは相手の中に確かめるように渡していくとか、あるいは気持ちを声に出していくというようなことがでて、ものごとをやりあげながら、こ

とばの世界が、その基礎を形作っていつているように思います。

(大野) 結局、ただ保育園に入ればそれでいいということではなくて、それ以降、こういう形で適切な、いろんな話合いとか、そういったことが行われることが大切なんです。

(田中) かずえちゃんの育ちをそういうふうにして専門家の人や、実際に、毎日献身的に取り組んでいるせんせいやお母さんたちと確かめあっていわば市民の共同の財産にしていくということですね、そういうとりくみがとても大事だと思いますし、それが歴史を培っていく基礎になるんですね。

(大野) かずえちゃんは、とうとうブランコをちゃんとこぐことができるようになりました。足をぴんと上げて、腕もこいでいます。

年が開けてから、毎週土曜日に第一びわこ学園のお友達が参加するようになりました。週に一度ですけど、土曜日の午前中。友情を確かめあっています。念のためもう一度。びわこ学園の仲間がスキップを始めます。かずえちゃんもスキップに参加します。大好きなスキップ。みんなそれぞれそれぞれの発達の段階でスキップをしています。

(大野) ひな祭りが始まりました。びわこ学園の仲間たちも招待されています。かずえちゃんたちのクラスは、ペープサート。かずえちゃんは、ちょうちょを飛ばす係だそうです。ちょうちょを持って、ご機嫌になってアクロバットをしています。

(大野) かずえちゃんが風邪をひいて休んだというので、僕たちはお宅を訪ねてみました。

(大野) こんにちは

(か) あーぶー

(大野) 風邪ですか？もういいの？こんにちはは
はずかしいか？あーあーあー どっこいしょ。

(か) どっこいしょ

(大野) ここでかずえちゃんが「どっこいしょ」と言ったのは驚きました。初めてかずえちゃんが言葉をしゃべった、そういった感じでした。

(大野) もう一回。あーあー

(か) うー ふふ あー ふふ

(大野) これ出して、これ入れよう。入れよう。

(大野) 親愛の情を示してくれています。かずえちゃんはこのころになるといろんな形でいろんなものに興味を持って、いろんなことを楽しむようになってきています。

(大野) あー

(か) あー あー

(大野) 僕たちはここで、かずえちゃんが話せるようになるのが、もうすぐだという気がしました。

(大野) ブランコに乗れるようになったかずえちゃんは、いろいろ角度を変えてやっていますね。

(田中) これは重要なことですね。友情を確かめたり、それからマイクなんかでも、自分の声を確かめたりしていましたけれど、本当に工夫するようになってきましたね。

(大野) ここは、録音部員真っ青という場面で、大変なことをしてくれているわけです。リズムも、何もなくてもとれるようになってきています。

(田中) そうですね。自分で工夫する力が湧いて、そのなかで確かめあって、こうなると本当にことばも出てくるんですね。こういうふうにして出てくるんですね。

(大野) 今のところでも、以前に自分に止められたことを人にしてますね。

(田中) 帽子なんかでもただかぶればいいではなくして、

(大野) いろいろかぶり方も研究をして

(田中) 確かめて、工夫して。

(大野) 人のものは人のもので、しのぶちゃんに嗜められて、

(大野) 朝日が丘保育園の卒園式。この保育園は四月にできたばかりでしたので、卒園して小学校に行く子どもは三人だけでした。かずえちゃんと仲のよかったけんちゃん、しのぶちゃん。しのぶちゃんがこの日、水ぼうそうで休んでしまったのです。で、二人からかずえちゃんについてのインタビューをとろうと思ったのですが、しのぶちゃんの声はとうとうとれませんでした。

お別れの歌を、かずえちゃんはちゃんとリズムをとっています。

(大野) かずえちゃんをこの一年間見ていてどうだった？

(K) えっとね、いたずらとかね、鼻つけたりいっぱいしゃべってんけど、いまあんまりしやらへんようになったしな、もうけん、学校いくやろう。そんで前のおたんじょうび、とちごて、ひな祭りのとき、遊んでて、鼻つけたりして遊んでたんや。そんで、そのとき鼻一回しかつけやらへんしな、そんで、なかよしになった。

(大野) そうか、学校いってもまた、ときどき遊びにきてやってよね。かずえちゃんのところにね。

(K) うん

(大野) 3月は別れの季節です、この膳所保育園は園全体がお別れしてしまうという保育園でした。この膳所保育園は、民間

の保育園としては大津市の中で最も古い保育園なんだそうです。でもこの卒園式を最後にこの園は取り壊されることになりました。園長先生です。そしてその裏手に鉄筋二階建てというデラックスな公立の膳所保育園が開園を待っています。これが一九七三年の夏にとったフィルムです。ごらんのようにこの園は緑のたいへん多い保育園だったんです。それが建築するためということなのですが、だいぶ切り倒されてしまって、非常に惜しい気がしました。こういう畳のある保育園というのももうなくなっていくんじゃないかという気がしました。ここでも障害児保育は着実に進められました。てつや君も立派に卒園して、胸をはって学校へ入学します。

でも三月は別れの季節ばかりではありません。門出の季節でもあるのです。青嵐保育園のともちゃん、だいぶ照れてしまって隠れてしまいました。ともちゃんはこの園を卒園して四月から国立滋賀大学附属小学校の養護学級に入学することになりました。ともちゃんは卒園の歌を声いっぱい唄い上げます。

三月の末の何日か、そのあいだかずえちゃんは京都の吉祥院病院に入院して検査を受けることになりました。その結果、ブラダーウィリー症候群他二つの症状の組合わさったたいへん珍しい症状で、そしてその複合症状のために障害が重くなっている、そういうことが判明しました。かずえちゃんはなんでも一度ものを確かめてみます。そして一度確かめると、いま見たようにちゃんと許可します。脳波なんかでも一度確かめてみるわけです。そして改めてこれから脳波をとっていこうというものです。こうしてかずえちゃんにとっての新しい歴史の一年が終わったわけです。それはまたもうひとつの新しい歴史の始まりだと思います。そしてそれは大津市にとっても保育二年が終わって新しい保育三年の始まりだということです。

(ナ) 別れは門出。終わりは始まり。ひとつの終わりとひとつの始まりのあいだでかずえちゃんは進む。まぶしい光を身体いっぱい吸い込んで。

別れは門出。終わりは始まり。光を浴びてかずえちゃんは唄う。この日本のあちこちにまだ光を知らないたくさんのかずえちゃんのために唄う。光を身体いっぱいすって、かずえちゃんは唄う。この地球のあちこちにまだ光を知らないたくさんのかずえちゃんのために唄う。

別れは門出。終わりは始まり。ひとつの終わりとひとつの始まりのあいだでかずえちゃんは唄う。かずえちゃんは未来に唄う。そしてその歌声は消して消えることはない。

Ⅲ-2-2. 『光の中に子供たちがいる 2 カズエちゃんの二年目』(1976年、綜合社)

(大野) かずえちゃんは一九七四年四月現在、三歳十か月。まだ話しことばはありません。体重は二十九、五キロ。家族構成は、お父さん、お母さん、お姉さん、そして弟です。五月一日、かずえちゃんはほかの友だちより約一か月遅れて、大津市立朝日が丘保育園に入園することになりました。かずえちゃん前の年の十二月まで歩くことができませんでした。いまようやくよちよち歩きができるようになったところです。園までの道を歩くあいだ、もう足があういう風に開いています。はじめての友だちとの出会い。かずえちゃんも友だちもちょっと戸惑い気味の様子です。相手の顔にさわって友情を確かめようとしています。みんなかずえちゃんがそばにいくと「わあ」と逃げますけどまたすぐ側によってきます。かずえちゃんはまだ歩き始め出バランスが悪いので、ちょっと押すとひっくり返ります。先生は子どもにたせようとしませけれど重いのでちょっと無理の様子です。それから約一か月半。もうこんなにひとりで歩けるようになりました。お母さんの手を離れてちょこちょこ歩いて行きます。そして入園の頃はしていたおむつももう外しています。少しゆとりができると、あちこち道草をくいます。そして道草をくうことによっていろいろと新しい情報を仕入れているようです。わずか一か月半のあいだに、前にはできなかった指さし行為ができるようになっていきます。そうして保育園の門を入った途端に小走りかけだして行きます。かずえちゃんは保育園が気に入ったようです。ブランコはまだ見るだけ。すべり台もすべってみたいのですが、まだできません。先生がそれを察して途中からすべらそうとします。次はいよいよ段を登るわけですが、やはり腕から指への力がまだ足りないために、登ることができません。

タイヤ運びでもまだかずえちゃんは自力で運ぶことができません。まして友だちが乗るとよけい無理です。でも結局は友だちと一緒に手伝ってくれて、なんとか運ぶことができるようになります。粘土遊び、力いっぱい年度をたたいています。それで、このころになると、茶めつけを出して、人のものをひゅっ取り上げたりします。でもちゃんと最後には返します。工作の時間。まず箱を立てます。たてると先生は「よくできた」とほめて自信をつけさせています。それから今度は吹くおけいこ。まだかずえちゃんは「ふーっ」と息を吹くことができません。どうしても「はー」という息になります。図画の時間も鉛筆を力いっぱい握って描けるようになってきます。

夏になると、かずえちゃんはもうすっかり園の人気者。かずえちゃんが登園してくるところやってみんなで出迎えます。ブランコも夏になると乗ることができます。でもこぐことができないので先生が助けます。

初めての水遊び。

八月のある日、かずえちゃんはどうとうすべり台を征服しました。かずえちゃんの足の力、そして腕の力、腕から指へかけての力、これらの力は着実に付いているようです。琵琶湖のキャンプでお父さんの手を離れると、まだ泣いてしまいます。でもこうやってちゃんと足で水をかいて斜めの姿勢をとることができるようになります。

八月の末ごろ、かずえちゃんはことば以前のことば、喃語を発するようになります。ここではなにか一生懸命しゃべっているわけです。でもまだ意味はよくわかりません。秋に入ってブランコを自力でひとこぎか、ふたこぎできるようになります。またこのころになると人の隙を見てきつものをとることが非常にうまくなります。そういうバランスがついてきたわけです。そのいたずらが、ちょっと度が過ぎてこういう状態になります。子どもたちはルール違反には厳しいのです。年があけて、とうとうブランコがこげるようになりました。三月のある日、僕たちは、かずえちゃんの家を訪ねました。そこでかずえちゃんは僕たちに素晴らしい贈物をくれました。

(大野) あーあー

(か) あーえっ

(大野) あー、どっこいしょ

(か) どっこいしょ

(大野) 一九七五年四月三日、朝日が丘保育園の入園式。この日、かずえちゃんには二人の後輩ができました。一方かずえちゃんは京都の吉祥院病院からかけつけました。この日は門出の日のはずなのですが、お別れの日にもなりました。北村園長先生と大島先生が移られることになったのです。大島先生は市の保育課の専門員になられます。これが後輩のかずみちゃんと、みゆきちゃんです。新しい園長先生から冠をかぶせてもらっているんですが、二人とも帽子が大嫌いなんだそうです。

(保母) すえひろゆうきくん

(子) はい

(保母) おがたさとみさん

(子) はい

(保母) ???かずえさん

(か) はい

(大野) 返事もちゃんとできます。お別れに当たって大島先生は

(大島) ああ、なんか一年… いい方向に向かって終わったので「よかったなあ」とほっとしてるとこなんですけど、でも

あの子自身が本と憎めない子ですしね、それが一番よくなった
というか、子どもとのかかわり合いも、子どもとのかかわり合
いもこちらから手をださなくても、自然に子ども同士通じる
んですね。それでかずえちゃん自身どんどん変わっていったし、
他の子どもも、いたわるとかなにか親切にしてあげるとか、ち
よっとしたことを手伝ってあげるといことが、それはかずえ
ちゃんだけにはなしに、他の子にもそういう形がみられてき
てるんじゃないかなと思うんですけどね。やはり二十なら二十
の家には一人障害児がいることで、その子にてもとられあとの子
がという心配がいままでもずっとあったんですけど、それが
今回はプラスになって、そうマイナスという面はでなかったよ
うに思っているの

(大野) かずみちゃん、みゆきちゃん初登園の日です。二人は
双子の姉妹。先に行くのがみゆきちゃん、後からついてくるの
がかずみちゃん。入ってくる時は一緒なんですけど、中には
いるとこういう風にばらばらに別れてしまいます。これはどう
いうことなんですか。

(田中) みゆきちゃんも、かずみちゃんも生まれたときの体重
が二キログラムちょっとと、二人とも少なかったそうですね。
それだけではなくて、飲んだり、食べたりする量も少なくって、
しかも吐いたり、風邪をひいたり病気がちで、外へもなかなか
つかれて出せなかったということをお父さん、お母さんがおっ
しゃっていました。

(大野) これはかずみちゃんのほうです。

(田中) 二歳すぎに歩く力がついてきたんですね。二人がよく
似てますね。

(大野) そうなんです。初めの内、僕もちょっとわからなくて。
あつ。これがみゆきちゃんですね。

(田中) お父さんもどっちがどっちか非常にまご孫されたとい
うことなんですけど、でもだんだんにわかってきたということですが、
二人とも生活経験がちょっと乏しくって、保育所なんかを
力強く自分の世界に取り入れていくのに、時間がかかるんじゃない
かなと見通されていたんですけど、というのはどちらかとい
うと、二人とも自分一人の世界に閉じ込もりがちで、寒いと
か、暑いとか言うことで病気がちになったり、また周りの人も
ね…

(大野) ま、これ、いま映っているのは前の年に二人が入って
いた逢坂保育園ですね。

(田中) そうですね。この時もずいぶん泣いたり、拒んだりし
て困ったという面を保育さんのおっしゃって、けれども自分一
人の世界にいても最初にあちこち歩いたり、それから水の所に行
くのが好きだということでしたけれど、これからいろいろな
ことを始める兆しをみせてくれていましたね。ちょうどそのと
きに逢坂保育園、そしてこの春から朝日が丘保育園へ、ちょう

どかずえちゃんの五か月後、後輩ということになるわけですね。

(大野) ここはちょっと園庭が狭かったですね。

(田中) そうですね、逢坂保育園の方はそうでしたね。

(大野) これはまた再び朝日が丘保育園に戻ったわけですけど、
ここでも先生の方にはちゃんとやってくれと…

(田中) そうなんですね。入るとか、渡すとか、それから置
くとかそういった日常生活でいま言ったようなことは見られる
んですけど、まだ話しことばでそれができるといいうんじやなく
て、どうも自分一人で勝手にそのようなことができているのか、
この一年間で友だちや先生とのことばに対してつながりが気持
ちを込めてできるようになるのが課題であると。

(大野) お母さんが迎えにいらっしやいました。このときは半
日保育です。

(保母) 保育園でもね、すぐ??したほうがよいかね…

(母) いや、もうほっといてください。そしたらあきらめてま
た風来坊しはるし。

ご機嫌すぐなおるね、甘やかさん方がいいと思うし。ほらブ
ーブーきた。あれパパか?

(子) パパ…

(大野) 長等公園へ花見に行くことになりました。かずえちゃ
んは大島先生が現れたのでおはしやぎです。

(大) おーい、おーい

(大野) おーいおーい

(か) おーい

(大) わんわん

(か) ワンワン

(大) そうや ……

(大野) 大津駅の裏で、電車を見送るまで絶対動きません。電
車がみえなくなると、自分でちゃんと前へ進みます。

(か) ……声…

(保母) ものすごく機嫌ええやんか

(か) アーアー、ア、ア、ア、

(大野) ア、ア、ア

(大野) 横断歩道をちゃんと手を挙げてわたっていく、そこま
ではよかったですけど、坂道にかかったらもうダウン。

(保母) どうや、気分は、どうや?

(保母) もちあげてんねん。ああしんど

(か) あーあーあ、

(大野) ついにはご覧の状態。ご当人はご機嫌そのものです。待望の乳母車がきました。去年は一人で乗れなかった乳母車に、今年は一応一人で乗ります。でも支える先生の方が大変です。

(保母) よいしょ、そうそう、足、足、

(保母) 足、足、上にあげる。足、

(保母) よかったね。

(保母) 嬉しいは？

(か) ウ、ウ、

(保母) 嬉しいは

(か) ウ、ウ、

(大野) 先生は、出発する前にかずえちゃんの気持ちを確かめます。

(保母) 出発は？

(か) ウ、ウ、

(保母) 出発は？いうてよ

(大野) シーソー。二対一。重心のバランスにご注意ください。

(保母) すごいなあ。よう？？になったねえ。おーいって。

(か) おーい

(保母) おーい

(大野) すべり台もこんなに力強く上がれるようになりました。

(……声……)

(子) ……みんなそろってごあいさつ……

(大野) 満開の桜の木下で、楽しい食事。特にかずえちゃんにとって楽しい食事。このころになると、少しことばが出かけていますので、先生たちはなんとか少ししゃべらせようとしています。

(保母) かずえちゃん、これを食べようか。むいてっていってごらん。むいて

(か) ちょー、うーん

(保母) ちょうだいはお口で言うの。ちょうだい

(か) ちょー……うーん……だ

(子) 先生おはようございます。みなさんおはようございます。

(保母) かずえちゃん、ちょうだい

(大野) ここでも先生たちはかずえちゃんに、しゃべらせようと一生懸命になっています。このころになるとかずえちゃんは、ポケットになんでも入れるんです。そしてこの日はゴムの小さ

なボールを持っていました。そして先生たちはそれを取り上げて、ちょうだいといわせようとしています。

(保母) ちょう代いは？ちょうだい

(か) ……泣き声……

(大野) でもちょっと行き過ぎるところということになります。

(保母) ちょう代いは？ちょうだい

(大野) ちょう代いいう前の悲しくなっちゃったね。

(か) うーんうーん……だ

(保母) ちょうだい、だい

(か) ……だい

(大野) カエル跳びもすっかりできるようになりました。そして終わると、もうちゃんと席に戻ります。

(保母) かずちゃん、横に、こうしてかいてみ。横シュウーつと。

(大野) 前は腕を上下に動かすだけの絵だったのですが、先生がかかせようとする、ちゃんと線とか丸を描くようになります。ちょっとやりすぎではみ出しちゃいました。ルールにしたがって、後をふきそうじします。

(か) いー、いー、えー

(保母) ごしごしして、ごしごし

(大野) 子どもの日、大津市と親の会の共催で、集いがありました。みんなでこいのぼりを描いて、そのこいのぼりをあげようということです。かずみちゃん、みゆきちゃんも初めて参加しました。みんなの創ったこいのぼりが勇ましく泳いでいますね。

(保母) 今日は何日？

(子) 5月6日

(大野) ずいぶんと顔が和んできました。かずえちゃんがちゃんと席までつれて行きます。かずえちゃんも後輩ができたので、すっかりお姉ぶっています。

(子どもの声)

(大野) かずえちゃんがちゃんとついていっているのにはびっくりしました。さらにけしかけられると、すぐいい気になって前に出て行きます。でもちゃんとやっています。

(大野) 裏の山までかずみちゃんが散歩に参加します。

(かずみ母) 一足跳び言う感じですね。いままで、私がつれて出ようと思っても、ふたりだと手がかかるでしょう。ひとりやといけるんやけど。それが一足跳びに集団の中に入ったような感じで、家帰ったら、それこそ…… 今度こっち来てからね、あんだけ炎天下にいてるのに、平気で帰ってくるし、それを思うと、雲泥の差やと思いますわ。こんな子やと、先生には迷惑やろうけどね、やっぱし入れてほしいと思います。

(大野) スプーンもちゃんと持っています。このころになるとかずえちゃんは集団化らポツと飛び出すことがよくあります。先生が呼びに行くわけですけど、なかなか言うことを聞きません。でもこういうところが対話の場所にもなるわけです。そして「いや」という言葉を覚えてわりに連発するようになります。

(保母) もうおしまいにしてよな。お茶あげるし、いこうな。

(か) イヤ

(大野) 巡回相談。

みんなにごあいさつ。カメラマンにもごあいさつ。

(大野) こうやっっているいろいろと対応ができるようになってきているんです。

(田中) とてもよくごあいさつしてますね。場面の知能というんですが、場面に応じて事柄がわかって、自分の気持ちを動作で意志表示する、といったことができるようになっていきますね。しかも動作だけでなくして、動作と一緒にかずえちゃんにとっては言葉ですが、音声が出てきているのが特徴です。

(大野) それがやはり見えますと、言葉だけでなく、身体全体で言葉表現し始めている。

(田中) そうですね。ここの発達診断ではことばが出る時の前提になる力が全部整っているかどうかを見たわけです。冬から春にかけて、これができあがっておりました。

(女) はい、おさかなどれですか？

それ？はい。次はね、電車どれ？

(大野) このテストは打率九割でした。

(女) おちゃわんは？はさみちよきちよきは？

ぜんぶできた？

(大野) やはり一年をかけていると、梅雨は毎年やってくるようです。腕の力のついたのには本当にびっくりしました。六月のお誕生会の朝、かずえちゃんはひとりででんぐり返りをやりました。これは初めてみました。お父さんのはなしではもう少し前から家ではやっていたそうです。

(保母) ゆり組さんのいわねかずえさん。かずえさん

(大野) 園長先生がペンダントをかけてくれます。かずえちゃんはそわそわ。

(保母) おめでとがかずえちゃん。かずえちゃんはいくつになりましたか。

五歳？よかったね。

(大野) かずえちゃん五歳の誕生日会でした。この後、みんなで遊戯をしましたが、かずえちゃんは大変複雑な足の動かし方ができるようになっています。足もこんなに高く上げます。びわこ学園のみのる君がやってきました。かずえちゃんは何やかやと一生懸命世話を焼きます。タオルなんかかけてちよつとした女番長と言った感じで、一生懸命世話を焼きます。人数の数え方は相変わらずなんです。ついに反撃をされます。やられた。

(保母) これ、かずえちゃん、鏡。

(大野) 鏡が取り付けられました。かずえちゃんは大変珍しくて、百面相をします。

(保母) あーうれしい。かずえちゃん、舌どれ？

(大野) ずいぶん歯ははえてきました。

(保母) かずえちゃん、昨日、歯医者さん行ったか？

(か) あう、あう、

(大野) 夏です。かずえちゃんのブランコはたいしたものになりました。そしてブランコをこぎながら、何か歌らしいものを唄います。手と足と口と三つちゃんとバランスをとっているわけです。

(か) うん、だ……

(大野) 吹く力も強くなり、ビニールクッションをこうしてちゃんとふくらませます。去年着ていたかずえちゃんの水着はもう小さくて着られません。そこでお母さんの水着を急きょ借用。

この日は曇ったり、晴れたりの天気でしたが。ビニールのボールがなかなか捕まらないようです。どっこいしょ。あら、また逃げた。それでもバタ足をやろうと努力しています。

かずみちゃんとみゆきちゃんはなかなか一緒にならないのですが、ここでは珍しく一緒になっています。と思ったらすぐに一人が出て行きます。そしてまた戻ると、また出て行きます。なんでもお母さんののはなしだとみゆきちゃんは大変水遊びが好きなんだそうです。

プロレスごっこ。(子どもの声)

子どもたちはみんな水が大好きです。あんなに泳げたらなあという感じ。パンツも一人ではくんですけれど、なんせこの巨大なお腹とお尻、どっちかがひっかかっちゃいます。友だちが早速前と後ろから、よいしょっと。

折り紙は紙でっぽうに興味を持っています。できた。もう一丁。こうなると、先生の話なんかそっちのけ。

(大野) 親の会の琵琶湖のキャンプ。かずえちゃんは浮袋を手で支えなくても落ちません。お姉さんが泳ぎの指導。去年はお父さんの手が離れると、泣きだしたんですけど、今年は泣きません。弟のこうちゃんの浮袋につかまると、お父さんはその手を離させます。気のせいかな、前の方が少し沈んでいるような感じ。すいか割はまだ一人では無理なようで、お母さんとお姉さんと三人がかり。

(大野) 大津にはいろいろ旧いものが残っています。そして旧いいきたりも今に続いています。これは大津や京都で、夏の終わりに毎年おこなわれる地蔵盆。地蔵盆は子どもの天下です。大人たちは子どもたちのために一生懸命汗を流して準備をします。このちょうちんにはひとつひとつ子どもの名前が書いてあります。かずえちゃんの家の方でも地蔵盆がおこなわれていました。横のモータープールを借りて、金魚すくい。ここで、去年との違いを発見しました。去年は、ただ闇雲に手を突っ込んでいたんですけど、今年は、ちゃんと道具を持ち、それが面倒くさくなると、持ち変えて手を突っ込んでいます。そしてちゃんと金魚を追っかけています。お母さんがくると、慌ててまた道具を持ちます。でも結局は手でもって捕まえました。

シン町の子どもたちが、かずえちゃんとしのぶちゃんを招待してくれました。この餡は笛になっています。かずえちゃん、ご機嫌になって吹いています。お坊さんがやってきました。これからみんなで数珠回しです。「あーあじゃまだ」「あいた」。なかなか難しいようです。「じゃまだったら」。ついにお腹の上を通した方が楽だということに気が付いたようです。そのくせ、しのぶちゃんがちょっとさぼっていると、「やんなきゃだめじゃない」という感じで、ついにはみんなを監督するようになります。このころになると、高い石段でも一人でさっさ

と上がって行きます。ご機嫌になって何かわめいてるわけですけど、でも降りることができません。そして誰かがこういう風に犠牲になるわけです。ビニールのボールが以外に丈夫だということを発見しました。子どもたちはすぐこれをプロレスごっこにしてしまいます。夜はみんなで盆踊り。曲はお馴染み江州音頭。かずえちゃんはさつき、一生懸命おばさんの手振りを見ていました。そしてついに躍りに参加します。大津では地蔵盆が終わると、夏が終わって、秋がやってくるのです。

(大野) 秋。かずえちゃんはお母さんと車で登園してきます。このころになるとかずえちゃんの声の表現はだいぶ豊かになります。かずえちゃんの唄っている歌をお聞かせしましょう。

(大野) かずえちゃん、うたうたおう。

(か)

(大野) このころ、保育園では、産休の先生が出て、かずえちゃんの担任の中東先生が幼児クラスにまわり、かずえちゃんの組には臨時の先生がやってきました。

今みえたのが、臨時の先生です。かずみちゃんとみゆきちゃんが、登園してきました。4月と同じように別れて行きます。手前はかずみちゃん、向こうにいるのがみゆきちゃん。このころになると、友だちがやってきて、上へあげて先生の所へつれて行きます。よけいな人間がよけいなことを教えると、すぐ真似をします。かずえちゃんは鉄棒にたいへん興味を持つようになってきました。ああいうことをやりたいんですが、ちょっと無理です。でも腕の力はたいへん強くなりました。元子どもとかずえちゃんとのブランコの比較。あまりのへたくそさに後ろから押してくれます。ちゃんと反動をつけて、「エイ」「もういっしょう」。でも実力の差は歴然。

園外保育は、三上山の麓、希望ヶ丘県立公園です。みんなはこのたび石づたいに川をわたって行くんですが。大島先生は、ここでかずえちゃんに川を渡らせようとしています。かずえちゃんなかなか慎重で、渡りません。水に興味をもたせようと、お魚を見つけます。

(保母) 気持ちいいよ。お魚がいるかもしれん。いるよ、ほら。小さいのがいるわ。つかまらないかなあ。おてて入れてごらん。よく歩けたなあ。かずちゃん。

(大野) 今度は他の園の子どものいる方向、つまり岸にそって歩かせます。と思っている内に渡り始めました。慎重に。途中で、方向をもう一回ちゃんと確かめます。この間、約四十分位。これでフィルムを使い果たしてしまい、フィルムを交換してい

るあいだに、かずえちゃんは今度、かけ足で往復しました。かずえちゃんは、一度自信がつくと、たいへん勇気が出ます。ひとつの目的を達したかずえちゃんは、次はトランポリンに挑戦。いじわるな大人どもがさかんに揺らしています。このころからかずえちゃんは、「オオ、コワ」ということばがちよっと出始めています。お父さんの所へ向かって、必死に進みます。ホツとした瞬間にドスン。

(父) ヤッタ。成功した。アア、よかった。

(大野) 階段も、わずかひと月ばかりのあいだに、手を離すとダメなんですけど、手をつないでやると、ちゃんと降りるようになります。ともかく、こうやっていろいろな目的に向かって進んで行ったわけですけど、川渡りのことを大島先生はこう話しています。

(大島) かずちゃんというのは、すごくひとつひとつ「だいじょうぶ」と確かめてからでないとやらないというところがありますね。今までこういう水の中というのはプール以外、あまり渡ったという感じも持っていなかったし、とにかく、どんな無理でも渡してみようと、最後はわたしも脱いで「一緒にいこう」くらいに思っていたんですけどね。とにかく渡らして、一回やればあの人というのはもうすごく続くんですよ。だから一回わたしもいけばいいだろうそう思って、そういうことが、あの人自身に、自信をつけるんじゃないかなと思って。

(大野) バスを指さして、「バツ、バツ」といっています。

(大野) 今年の運動会は、びわこ学園のみのる君とさゆりちゃんも、お客さまではなくて、一緒に参加しました。かずえちゃんは、みのる君の手をとって、コンダクターよろしくリズムをとったり、それからみのる君がちよっと遅れそうになると、ちゃんと止まって待ってやります。それからみんなの描いた万国旗も参加しました。体操は前の時よりももっとちゃんとできるようになっています。おすもうさんのようなこともできるようになっています。この年はやたら小さな組へ入ったり、あちこちウロウロするようになっていました。ここでも小さな組に入ってちゃんといいていっています。終わると、かずえちゃんはさっさと自分の方へ戻るんですけど、子どもたちはそうだと思って一緒にくっついて行ってしまいました。また、このころになると、大人の世話を焼くようになります。ここでも大島先生の靴のひもをとっています。いつもおぶってもらったお返しに、おぶってくれます。

(大島) 五十キロよ。いいですか。足広げて、イチ、ニノ……

(大野) 障害物競争。かずみちゃんとみのる君とが一緒に行きます。みのる君は自力でゲートをくぐり抜けます。そしてくぐり抜けたゲートをもう一度確かめています。そして今度はステレオに少し興味を示し。マスゲームはしのぶちゃんと一緒に参加しました。でもしのぶちゃんは、この踊りを知りません。ですから人を見ながらやっているわけなんですけど、さっぱりわからないわけなんです。だからどンドンみんなとテンポが遅れていっちゃいます。「アレ?」「またちがっちゃった。そっちじゃなくて、こっちでも……?アレ」もう次ぎに進んでいます。「ヨイショ」「どっこい」やっぱり無理なようです。最後に足をふんずけたところで終わり。

(大野) このころ、かずえちゃんの折り紙は紙でっぽうから、ヒコーキにかわってきました。裏の空き地にもだいが家が建ってきました。落葉をのりで貼りつけます。相変わらずいたずら。

(保母) かずちゃん、ここにあるやん。ここにだしてな。クルクルとあけてごらん。かずちゃんのやろ?

(大野) 貼った方を手の方に持ってきちゃいました。「アレ?おかしいなあ」「のりがたりないのかなあ?」

(大野) かずえちゃんの記録の試写会が大津で開かれました。

(田中) こうした記録では毎日の生活や保育の中では捉えにくい一年間と言うものを通してみることで、そして聞くこと、考えることができます。しかも大勢の目で、くりかえしくりかえし見て、考えて、確かめ合い、他の実践なんかともつきあわせて、たくさんたくさん発見をしていくことができます。

(大野) 冬がやってきました。かずえちゃんは意外に神経質です。こうやってちゃんと砂が入ると、くつをぬいで砂を払います。

(保母) かずちゃん、できた?

(か) ウーン

(保母) できたらここにもってきて。

(か) ハーイ

(大野) かずえちゃんはやられたら、やり返します。そしてあぁやってキューツとみかんの皮を絞って人にかけてようと、いたずらまでします。

(大野) クリスマス会は夕方から開かれました。かずえちゃんはあちこちの組に入って、どこでもすぐ真似をします。ちっちゃい子のクラスにはいり、先生にちゃんとご挨拶します。もう一回ご挨拶。あ、おこった。

(きよしこのよる……)

(大野) 年があけて、一九七六年。子どもたちは雪が大好きです。こうやってみますと、かずえちゃんはドアを自分で閉めたり、「よいしょ」とかけ声をかけて戸を開けようとしたり、ずいぶん表現や、動きが豊かになってきているのがわかります。

(大野) さかさま。

(子) こっちむけ、こっちむけ。

(か) イヤーヤー

(大野) さかさま

(大野) 頑固として自分でやろうと努力しています。

(子) 先生、さかさまにやろうとしてやる

(保母) 反対、かずえちゃんちゃん。

(大野) かずちゃん、ズッとひっくり返すの。そうだ。

(か)

(大野) このころは、もうさかさまということばの意味がわかってきたようです。

(子) かずちゃん、やっ顔が出た。

(大野) かずちゃん、はやく着なよ。

(か)

(子) ぎょうさん着すぎで、ぬげられへん。

(大野) この音はたいへん高く聞きづらいんですけど、ピーピーと笛を鳴らしています。

(大野) 年があけた頃から、かずえちゃんは再びみんなのなかに入っていくようになり始めます。みんなと一緒に手伝いもするようになります。できてもできなくても一生懸命やろうとしています。でもすぐちょっとどこかにちょっかいをだして。そして友だちがやっているのを一生懸命見えています。「かずちゃん、やってやるよ」。ノブユキ君が、これは持ち上げているつもり。粘土はちゃんと道具を使って切ったりします。でも相変わらず人のものをとったりなんかして、ついにノブユキ君のかんしゃくが爆発します。でもお父さんの話しだと、自分が悪い時には、どんなにやられても泣かないそうです。かずえちゃん作品。また始めました。

(保母) アレはかずちゃんのやな。コレはかずちゃんの違うなあ。アレはケンちゃんのやな。コレはノブユキ君のでしょう。コレがかずちゃんの。

(か) チャチャ…… アッギヤ

(大野) みえたなあ。

(か) ウン

(大野) わかった？

(か) アーアー

(大野) アーア

(か) アーア

(大野) アーア

(か) チャーチャージャンジャンジャン

(大野) みんないるところにいこう。みんなのいるところ。

(か) ゼッタイ イヤ

(女) だいじょうぶかな？

(か) オーラーイ オーライ

(女) ほんまに見てくれるか？

(か) オーライ

(大野) こうしてみますと、かずえちゃんのことばが、ひとつひとつ本当にことばとなって行くのがわかります。そしてぼくたちはその着実な発達ぶりに驚かされました。ところで秋から、弟のこうちゃんが保育園に通うことになりました。でも別の保育園なので、まずこうちゃんから先に送って行きます。

(大野) ひなまつり会の日、かずちゃんは、お腹を壊してすっかりダウン。でも歌はしっかり唄っているようです。

(田中) かずえちゃんの場合、たとえばお誕生会の遊技の時もそうでしたし、ボール遊びの時もそうでしたが、みんながひとつの目標に向かって身体全体を動かして取り組むというような時、(今日はそれとは別な世界にいるようですけど) 先ほどのような時、????ますね。心の高まりを、みんなでやった後の心の高まりをもつとあとで、その、いわば気持ちの膨らみを手先などまで行き渡らせて、やったあとで、折るとか、たたむとか、非常に細かい動作に気持ちをむけておりました。そういった、心の高まりを締めくくっていたということがでていたわけですね。その締めくくりの発展として服を着たり、のりをつけたりというときに、さかさまとか、反対ということがわかるようになってきていました。こうした心の締めくくりがことばを産んでいくわけですね。

(大野) 三月のある日、ぼくたちはかずえちゃんの朝から夜までを撮影してみました。

(か) アレー？

(大野) 何が、どうした？

(大野) このころかずえちゃんの折り紙は今度、かぶとです。

(大野) あったか?ここにあった。

(か) ……ことば……

(大野) 楽器もこなすようになります。

(大野) いただきます

(か) イタダダ……タ。

(大野) あれはいただきますのつもりです。かずえちゃんのはしの持ち方もずいぶんうまくなりました。いよいよ登園の時間。ちゃんと自分のカバンを自分でとります。ここでちょっといじわるをします。自分が先に出て、スタッフが出ようとする、ボンと戸をしめて「アッハッハ」と高笑いをします。でもスタッフを先に乗せる配慮を忘れません。

ノブユキ君がこのころになると、かずえちゃんにすぐ抱きついて、チュッとやります。下履きもきちんとそろえなおします。でも相変わらずかずちゃんは、小さい組へフラフラと入り込みます。そしてお人形さんを扱うのがだいぶ気に入ったようです。

(保母) かずちゃん、最後までかたづけてよ。

(大野) なんでも、先生の話しですと、四月ころから、ときどき、お人形さんを抱いたりするようになっていたそうです。

(保母) いわねかずえちゃん

(か) ハーイ

(保母) 今日はかずえちゃんが特別参加。

(大野) たかし君がまずちょっかいを出しにきます。続いてノブユキ君がやってきます。少ししつこくチュツ。かずえちゃんは俄然怒ります。かずちゃんは今ややられてばかりいません。俄然、反撃に出ます。「エイ！」

はり絵の時間です。まず、構図を考え、きり絵を選びます。落葉の時とちがって、ちゃんとのりのついた方を紙に貼ります。ちぎれたやつもちゃんと貼ります。できた!割り込もうとしてシンちゃんに怒られます。

四月の頃には、まだ抱きかかえるだけだった人形の扱い方も、だいぶ複雑になってきています。そして人形をあやしなながら子守歌を唄います。かずえちゃんと人形の関係について、下村先生は……

(下村) 今年の四月のクラス編成をしたときに、また、人形を抱え込むことと、それからまた、十一月に人形をもって歩くよ

うな行動があったわけなんです。それはやっぱり、かずちゃんなりにクラス編成、新しい集団への受け答え方をしているのではないか。そのへんの切り替えを大事にしていきたいと思うしね、そこで子どもたちを通しての中で、新しい経験の積み上げというものをしていくことが大事やないかと思うんですけど。

(大野) 手伝いも俄然堂に入ってきます。友だちのを見て、わかっているつもり。なかなか手の格好もいい。足もかっこよくやるんですけどちょっと、逆にやっちゃっています。先にこっちを持ってというわけで、「こっちな?」「ヨイショ」「ア、やっぱりこっちな」

このころのかずちゃんは、「オオ、こわ」と「モウ」というのをやたらと連発します。そして友だちのやっていることを一生懸命見て、すぐそれを真似します。降りないで、そのままドスン。「オオ、こわ。それでもちゃんと下までおります。次は「らくちん、らくちん」とばかりに滑っております。面白いからもう一回やってやろうというわけです。「ヨイショ」ところがこの三輪車、ちょっとサドルのところがおかしくなっていて、なかなか前輪が回転しにくくなっています。ここでも「モウ」といっています。もういっぺん、「モウ」。らくちんらくちん。はしゃぎすぎてひっくり返りました。ほつてもおけないので、ター坊が助け起こします。

(子) どもない、どもない。起き。

(大野) でも、腕をすりむいてしまいました。さっそく中東先生に薬をつけてもらいます。

(保母) 赤チン、ぬっところか。

(か) あーあつ

(保母) いたいの?ちょっとまってて

(大野) 名誉の負傷をみんなにみせびらかしています。かずえちゃんに「いただきますは?」というと、得意になって何回でもいいです。お茶を一杯。ちょっと少なすぎたな。もういっぺん。相変わらず人のパンを侵略します。誰のですか?おっこちてますよ。いらないんですか?それではちょっと…あ、やばい。ちぎったやつを食べるかと思ったら、袋にしまいます。知らん顔。もうちょっと大きい方にしようかな。小さい方にしよう。ここまできちゃうとバレてしまいます。さとみちゃんに「メッ!」。

この一年のほとんどをかずえちゃんの面倒をみていた中東先生は、「かずえちゃんは年があけて二月ごろからまた集団の中に入り込むようになり、いろいろなことに積極的に参加し始めていました。そしてひなまつりの稽古なんかでも、歌を一生懸命

命唄ったりしてたんですが、あのひなまつりはご覧になったようにお腹を壊して、全然ダウンしていたので、その実力が発揮できなくて、たいへん残念だった」こう言われていました。そのせいでしょうか、ここでも中へ入り込めなくなっちゃってワーワー大騒ぎをしています。中へ入れてもらって、今泣いたカラスがもう笑ったという形で、にこにこおおはしゃぎ。

(保母) かずちゃん、じゃんけんしよう。ジャンケンポン！

(大野) 勝っても負けても手帳を返してもらいます。もういっぺん「ポイ！」。

夕方、かずえちゃんの一日が終わります。かずえちゃんの二年目もうじき終わるわけです。

(田中) かずえちゃんは、この一年は、いろいろな場面に応じた動作的な、リズム的な音声がとても豊かにでてきていました。それがお父さん、お母さん、先生なんかとの対話を通して、わたしたちの中にもそれは成立してきました。、あた、お友達なんかとの共同の仕事、道具を使った共同の仕事を通してことばに変化してきました。いわば発達の地盤を揺り動かすようにことばの塊を随所に出してきてくれた。そのことへの援助をしていくということが、かずえちゃんを支えるみんなにとっての課題になってきておりました。来年は、自分の方から目標と見えますか、見通しを持った行動をして、そうしていくことによつて見通しをつけて行くためのことば、本当の意味のことばが生まれてくると思います。

(大野) 家に帰り、お母さんは夕飯の支度に忙しい。お父さんも帰ってみえました。風船はずいぶん膨らませるようになりました。「ポイ」。棚の上にお菓子がありました。食べ物に俄然執念を燃やすかずえちゃん。イスにのぼってとろうというわけです。ようやくと登り、ちよつと届きません。手伝わせようとしています。でもみんな知らん顔。それでしかたなく、ミシンの台の上に乗ります。「ア、これちがった」戻すのも面倒くさいので、下に置いて。ア、こうちゃんにもたせよう。こうちゃん、ちゃんと受け取ります。つぎはかずえちゃんの写真でした。

(父) お母さん指どれや？

(大野) お姉さんがかぶとを折ってくれています。

(父) こうちゃん指はどれや？こうちゃん指は？それか。なら、とうさんは？

(か) ア、カ

(大野) かずえちゃんが最近かぶとを折ったのはこのせいでしょう。

かずちゃん、おはしの使い方がだいぶうまくなってきているんですけど、でもこの大きな海老フライは手でつかみず。

(父) ハーイ

(大野) ハーイって。もういっかいやって。そうそう。はいりますって。

(大野) 風呂桶にももう自分では入れるようになっていました。いい湯だなという感じです。こうしてかずえちゃんの一日が終わりました。

(大野) 卒園式。こうしてまたかずえちゃんの一年が終わります。この一年を振り返って市の専門員として、客観的にかずえちゃんをみられた大島先生は、

(大島) ひとつひとつの動きなんか、すごく自信がみられたというのをすごく感じましたね。私、障害児の人持って思うんですけど、一年目というのはものすごい持った者にとって持ちがいがあるんですね。すごく変化があつて。いままで0という点から出発しますでしょう。だから二年目というのはかなり横ばいというのがあつて、そこで保母自身が悩みなんかがあつて、それが子どもに影響するのかなにか知らないけど、どっちもが???おこしたような時期があると思うんです。だからああしてフィルム見たら、着実に……

(大野) みんな新しい場所へ向かって巣立って行きます。そして在園児たちは拍手でみんなを送ります。かずえちゃんも一生懸命拍手しています。来年はかずえちゃんが拍手をされる番なのです。

Ⅲ-2-3. 『光の中に子供たちがいる 3 「わかれ」は「かどで』(1978年、綜合社)

(大野) 僕たちが、カズエちゃんに初めてあったのは一九七四年四月のはじめでした。そのときカズエちゃんは、三歳と十か月。まだ話しことばもなく、ようやっと歩けるようになったところでした。カズエちゃんの障害は、プラダウィリー症候群、他二つの複合障害といわれていました。大津市では、一九七三年から自治体としては全国で初めて、障害を持っている子どもたちを保育園に入れるという制度、つまり障害児保育を制度化していました。カズエちゃんはその次の年に朝日が丘保育園に入り、みんなと一緒に遊んだり、歌ったり、喧嘩をしたりしながら、僕たちも目をみはるような発達を続けて、そうして二年という月日がたちました。

一九七六年四月、僕たちにとっても、カズエちゃんにとっても、朝日が丘保育園の子どもたちにとっても三回目の四月を迎えました。入園式に新しい小さな仲間が入ってきました。今年も先生の移動があります。そして新しい年度の保母さんの数は、園長先生を除いて五名。在園児数、六十七名。障害を持っている子どもの数は、五名だそうです。クラスわけは、年齢順に、大ブタ、中ブタ、小ブタというおもしろい名前のクラスに分れます。カズエちゃんは小ブタ組。

(出席をとる様子など)

(大野) 琵琶湖の湖岸にある琵琶湖文化館まで、みんなで歩いて園外保育。つまり遠足です。

この琵琶湖文化館には、大津の古いものがいろいろ置いています。常夜灯や、道しるべ、それから日本で一番古い舗装道路かもしれない車石など。それから本館の中には、昔の土器とかいろいろなものが展示されています。そして一番下が水族館。一番上が展望台になっています。これから展望台まで上がろうというわけです。

いよいよカズちゃんにとって難関の階段上がりが始まります。

(保母) カズちゃん、お友達、上で待ってはるよ。一服しながら上がろうな。

(大野) 先生は、カズちゃんを励ましながらか、それでもひとりで登らせようとしています。友だちが手を貸そうとしても、先生は一人で上がらせるといって止めます。このころになるとカズちゃんは、自分の向かう目標、目的、そういうものをきちんとみながら行動するようになります。なんといいですか、見通しをもって行動する。ここでも上を見ているわけです。ようやく展望台につきました。「あっちのほうがいいのかな? あっちへいってみよう。ありや、やっぱりこっちか」

今日は残念ながらベタ曇り。カメラマンがパンをしてみると、「ありや」。

最後の難関、下り。ここでも先生は、離れたところで見守りながら、カズちゃん一人で階段を降りさせます。でもカズちゃん、ここでもちゃんと降りる下を見えています。それでもだいぶうんざりした顔。「まだあれだけある……」。みんなは当の昔に降りて行ってしまったわけですけど、カズちゃんようやっとたどり着いた。でも時間がかかろうと、かかるまいと、カズちゃんはこの上まで一人で上がって、降りたわけです。

梅雨にはまだ早い五月の雨。こうやってみていて、カズちゃんのことばと行動がずいぶん一致してきたなあ、とそんな気がしました。目的を持った行動というのは、やはりいろんな所で表れているようです。ここでもヒコーキを狙いを定めて飛ばすようになり始めました。

本当はもうかたづけの時間なんですけど、かたづける途中で、カズちゃんハブロックの造形を始めました。どうやら馬のようです。しょうがない、かたづけるかというわけで、面倒くさいから全部いっぺんに運ぼうと、横着なことをやっています。

この日は当番なので、十時のお茶をみんなで給食場まで運びます。

集まる時間なんですけど、カズちゃんまだ鉄棒に未練があるらしく、ノブユキ君が連れに行きます。ノブユキ君が呆れ果てて、しょうがないやと行ってしまいました。カズちゃんは、次はブランコ。それでも今までと違うのは、ブランコをしながらもみんなの方をときどきチラチラッと見て、一応気にしてるわけですね。そしてあるところまでいくと、自分からちゃんとみんなの輪の中に入っていきます。

腕や足の力、つかむ力はたいへん強くなってきました。撮影できなかったんですが、ジャングルジムが一番上までも、このころはもう登れるようになっていました。そしてこういうときに、いつも友だちがまわりで励ましたり、やり方を教えたり、一生懸命やってるわけです。

一年目は、単なる棒としか思っていなかったマイクロフォン。もうカズちゃんはマイクだということを知っていて、パラボラからネジを外して、マイクを取ろうとしています。とたんにみんな集まって、大騒ぎ。

(子どもの声)

(大野) もうカズちゃんは、クラスの中の軽い子だったら、ああやっておんぶができます。そして降ろすときに、台の上にチョンと降ろします。今度は、ケンちゃんがおぶってよ。そうするとケンちゃんは重いから、重い子はダメだって、逃げて行き

ます。

(父) カズちゃん、これフーツし。もっと、いっぱい。もう一本、フーツは？

(か) フーツ

(大野) 前のクリスマスの時まで。ろうそくの火を吹き消せなかったカズちゃん。ちゃんと六つも吹き消すことができました。みんなが飼っていたザリガニを、タカシ君がちょっといたづらをしたら、死んでしまいました。タカシ君がわるいぞっと、カズちゃんは得意になって戻ります。

(保母) タカシ君。カズちゃんが「タカシ君、メッ」ていうてやるで。

(大野) そうするとすぐ調子に乗ってまた、メッ。もういいよ、とみんなから。ドスン。膝と一緒にひっくり返ります。でも気が収まらなくて、メッ。メッ。ま、このへんでいいだろう。これからみんなで朝顔に水をやるわけです。

(保母) ここのな、お伊モさんにも水やって。

(大野) カズちゃんは途中でさぼって水遊び。どろんこ遊びです。モトコちゃんと一緒につきあっています。だいぶ水が進入してきました。そこへモトコちゃんがさらに……。実はこの日、朝、もうパンツをどろんこにしてしまって、もう替えがないんです。それで先生が急きょパンツを制作しています。特大のパンツができて、カズちゃん、はくわけです。ここでも入るかどうか、ちょっと確かめるようにしています。なんとか入りそうだ、というんでやったんですけど、ちょっと無理のようです。そのあと、カズちゃんがちゃんとゴシゴシとパンツを洗っているのにはびっくりしました。絞るのもきちんと絞っています。

いよいよ夏がやってきました。今日は水あそびの日。こうやって泳ぐんだ。水のはいると、みんながカズちゃんの手をとり、足をとって泳ぎ方を指導。でもちょっと目に水が入ったようです。

カズミちゃん。水がみんな、子どもたち好きですから、そのせいでもあるのですが、カズミちゃんのウロウロもだいぶ、短い周期で回っています。でもみんなが削ったところ、砂の城なんかをぶつこわしちゃうもんですから、とうとうホースで水をかけられます。でもカズミちゃんはうれしそうに、キャッキゃいって逃げてます。

バタ足は一年前よりもうまくなっています。

今年にはいると、カズミちゃん、ミュキちゃんの二人をこうやって撮影するのがたいへん楽になってきました。

みんながあがって、ようやくと広くなったので、悠々と泳ぎ始めます。これは平泳ぎのつもりなんでしょうか。

すいかわりでカズちゃんは、ちょっとズルをします。見えるかな？これも目的を確かめようとする行為の現れなんではないかとぼくたちには思われました。でもちゃんと当ててるようです。考えてみると、一年前のすいかわりの時は、全然できなかったんですが……。さあー。みんなで、陽が当たって生温くなったすいかを食べます。カズちゃんもやってきました。「あ、あんな大きいの持ってる。先生だ」。

お昼はカレーでした。「あ、やってるから、ついでにかけさせちゃおう」と思ったらサッと逃げられちゃって、「しょうがない、自分でやるか」。そこへトシオ君がやってきました。「カズちゃん、こうやって持つんだよ」とトシオ君におそわりながら、カレーをちゃんとかけています。ここでひとつ発見をしました。カズミちゃんがヒラヒラさせながら、友だちの方にみせています。これは初めて見ました。

秋がきて、カズちゃんの身体もずいぶんやわらかく動くようになります。今のところでも、反動をつけるのを、ちゃんとやっています。ここでも自分の身体のバランスにあったところまで、足の位置を確かめます。

(大野) 先生、カズちゃんがいろいろと工夫したり、見直しを持っていろいろなことをやるようになったんですけど、今年のポイントというのはどういう点ですか？

(田中) そうですね、さっきの体操でも、足を開いて、それをもうちょっと大きく開くとか、ずいぶん調整していましたけど、去年、第二の発達の変わり目を越えてるわけなんです。これはことばが出てくる前提になるひとつのことを別の視点にたって見直してみるということが、自覚的に行えるようになってきているわけですけども、その上にたって、新しい世界をずーっと広げていくわけですが、その広げていくためには、お友達の中で、しかも体操の時とか、食事をする時とか、場面に応じて必要な道具を取ってきて、目的に向かって、その道具を使いこなしていくと、そのときにもうちょっと遠くまでやらなければいけないとか、もう少し手前でおさえおくとかいう風に、遠くと近くとか、大きくと小さくとか、それから短くと長くとか、あるいはいま積木でやってますけど、横に積んで、あるいは横にならべて、今度は縦に積むとか、なにか二つの方向というものもしっかりと見極めて、世界を築き上げていくわけですね。こういうふうな新しい次元の世界に入ってきているわけですが、それをただ単に道具だけでやるのではなくして、この場面でもそうですけど、ハンカチの中に積木が入っていますが、そのつつんであるのをもういっぺんつつみなおして、いま指さしをしました、あの人に渡すんだという風に、だから気持ちを込めて、ああいう風に……

(大野) 今みたいに、もう一度確かめてみる……

(田中) そうですね。

(大野) さわってまた確かめるとか。

(田中) そうですね。とてもやさしい気持ちが出てきておりますけど。第三者に目標をちゃんとむけて渡すとか、渡した後、その気持ちを「ああ、よかった」とか「今度はなにをしてあげようかな」という気持ちをつなげていくようになってきているわけですね。この描いているものを見ましても、以前は、ただなぐり描きをするようなのが多かったわけですが、よくみてみますと、横に線を引っ張って、そしてそれに対して、縦にそれを切り抜けるという風なこともできるようになってきています。二つの方向を持ったとりくみが、いろんな生活の中で、みんなと一緒に場面に応じてやれるようになっていく、そういうふうなやりかたで、新しい中へ入っていつてるわけなんですね。

(大野) ここなんかでもやっぱり、フライングをしますね。

(田中) そうですね。とても気持ちがあふれている。しかしそれを抑えて、抑えすぎちゃうと……

(大野) ああいうふうにとちょっと遅れていくんですけど、でも最後までちゃんと

(田中) やりきるわけですね。そして気持ちの中では、「あ、今度はこういう風にしよう」というふうな反省するというか、改善していくというような気持ちが出てきているわけですね。

(大野) 三年目のこのころになりますと、ここの所なんかでも出てくるんですけど、ここではカズちゃん、白い帽子の方がよかったですね。それがジャンケンで負けて、ああいうふうには赤い帽子になると、「イヤダ」と腕をああいうふうに回す、ああいう行為がときどき見られたんです。

(田中) なるほどね。自分の気持ちが収まらないときに、ああいうふうにして、ただダダをこねるのではなくして、

(大野) 気持ちを表現していくということですね。

(田中) そうですね。

(大野) それがやっぱり今みたいに

(田中) 自制心が芽生えてくるわけですね。

(大野) 今のボール投げなんかでも、前はできなかつたんですけど、目標に向かって投げるといことが

(田中) そうですね。目標に向かって道具を使って、ちゃんと到達していくわけですから、全くもう外の世界を自分のものにしていく、そういう力が強くなってきますね。

(大野) このころのカズちゃんの特徴として、僕たちは「中抜きの尻合わせ」とよく言っていたんですが、初めやって、途中適当にさぼるわけですね。そして最後になるときちんと締める。最後はきちんとやる。

こういうなのでも、運動会。途中、お腹がすいたりなんかして、だいぶさぼったんですが、最後の江州音頭になるとこうや

ってきちんと合わせます。ここでももちろんお母さんや、先生たちのを見ながらやっているんですけど、それでも一年前から比べると、ちゃんと踊りになってきています。つまり、最後の目的というものをきちんと、目的を持って、カズちゃんが行動している、そういうことができるようになってきているんじゃないかと思えました。

目的とか、見通しを持った行動にともなって、カズちゃん自身、自分がその目的がわかっている場合、なにか「自分が楽しい」とかそういう場合、非常に緊迫した条件とか、そういう所にいったとき、そういうときには非常に豊かなことばが出てきます。それからなにかをいわせようとしてもいやがりません。ちゃんと、何回でも言うようになります。

(父) ちょうだいっていい。

(か) チョウジャイ

(父) もういつかい

(か) チョウジャー

(大野) ちょうだい

(か) チョウジャイ

(大野) あー、言った、言った。じゃ、こつちをあげましょう。

(か) コワイ

(大野) こわくないよ、甘えてるな。

(か) ア、コワコワ、コワイヨー

(大野) だいじょうぶ。こわくない

(か) コワー、アー、コワイ、コワイ

(大野) カズちゃん、ここまで

(か) アー、コワ。

(大野) いままでは、「オオ、コワ」だけだったのが、こういう場面では非常に様々な「こわい」が、カズちゃんの口から飛び出していきます。

(大野) それで止まったわけか？

(か) アー、コワイ

(大野) あがれる。あがってみる！もう一段。

(か) コワー

(大野) こわくない。ハイ。ここ。できた。

(か) デキタ

(大野) あがっていくか？この上あがっていくか？

(か) アー？

(大野) あがっていくか？

(か) コッチ

(大野) ここでもカズちゃんは、タイヤの初めの方だけちょっとやって、また「中抜きの尻合わせ」で、一番最後のタイヤに

足をかけます。

(大野) あれ、なんだろう。あれ。

(か) ア、コワ。

(大野) カズちゃん

(か) ???トコワイヨ

(大野) なにがこわいよ?。なにすんだ?

(か) コレ?

(大野) ハッパ

(か) ハッパ

(大野) カズちゃんこれからどこへ行くんだ?

(か) オーオー

(大野) お祭り。

(か) オーツイ

(大野) ホラホラ、お祭り。

(大野) こうやって、さまざまなことばも行動を伴って出てくる、それからなんといいですか、「中抜き尻合わせ」もよき終わりとして締めくくる、そういうことを通じて、これからのカズちゃんの課題というのは一体なんでしょうか。

(田中) 二つの値打をコントロールして、新しい世界をどんどん築いていくわけなので、保育の場面でそれをうまく取り入れて、自分でも、それから仲間の中でも承認され、励まされていくようなとりくみをしていくこと。これはまあ、秋から以降、卒園にむけて蓄積されていくと思いますけれども。以後になってきますと、いよいよことばをちゃんと自分のものにしていく課題が出てくるわけですが、これまでみたところで、大きな問題は、話しをする上で必要な力が、もう少し自覚的に訓練されていないわけですね。たとえばものを流し込んで食べてしまっている。もっとじゅうぶん顎を使ってかむとか、動作の面でも力をいれ込むというふうなことがもっともって行われて、その上でことばに切れ味をもたせていくということが必要なわけです。それからいろんな言語的な環境を周りからもしっかりカズちゃんのことばを確かなものにしていくために返してあげるといことですね。生活と切り離れたかたちではできませんけど、そこの所に少し注意をむけた指導がこれから必要になってくると思います。

(大野) 子どもたちは園庭ばかり走るのではなく、外へも飛び出して行きます。園外マラソン。先頭グループはどんどんと出て行きます。でもカズちゃんは相変わらずラスト。

(か) ヨイショ ヨイショ

(大野) ヨイショ

(大野) それでもああやって、ちゃんと閉めようとしています。

(大野) あかんか?

(か) アカン

(大野) ヨイショ。なにやっとなるか!

(か) ヨイショ

(大野) はしんなきゃだめだよ。ヨイショ

(か) ハーアー

(大野) 工事事務所のおじさんにご挨拶。

先頭グループはもう国道の上に出てきています。カズミちゃんやミュキちゃんも一生懸命ついて行っています。カズちゃんは相変わらず。こうやって、あちこと道草をくいます。

(大野) カズちゃん、ハイあがって。

(か) アカン

(大野) なにがあかんの?

(か) アカン、アカン

(大野) 階段の途中まで行くとああやって止まって、一応目標をちゃんと確かめます。そして上へあがると、いま来た方角をああやってみています。

(大野) カズちゃん、こっちむいて。

(か) アー?

(大野) カズエさん。

(大野) 最後は裏の生協のおじさんと交歓をしています。カズエちゃんは保育園の側にくると、今度は歩きながら「ファイトファイト」というわけです。

(か) ファイト ファイト

(大野) ファイト

(大野) カズミちゃんは、先生に呼ばれるとちゃんと、ああやって戻ってきます。マラソンから戻ったカズエちゃんは、ブランコになんと立って、ブランコをこごうとしています。今日の立つ練習これで終わり。あとはやっぱり座ってやった方が楽だ。先生も子どもたちも、何か本当にゆったりした保育をやっているなあという気がしました。

(大野) 大津市のはずれ、比良山のちょうど裏側で、安曇川の上流に桂川というところがあります。カズエちゃんが保育園に入った一年目にカズちゃんの面倒を見ていた大島先生が、二年目には市の保育課の方に移られたのですが、今年また現場に戻

られ、ここ桂川の保育園に勤務しています。この桂川保育園は園児の数が二十名。保育士一人。それとこの地元から給食の係の女の人が一人来ています。

(大島) こんにちは。カズちゃん。

(大野) この保育園にカズエちゃんが遊びにきました。

(大島) みんな、ホラ、こんにちは。カズちゃんの好きなブランコ。それなあに？

(か) コレ？

(大島) カズちゃん、どうぞ。入ってください。

(か)

(大島) ブランコ乗りたいの？じゃあ、かわってって。

(大野) 最近の成果をご披露。

(大島) カズちゃん、のるの？

(か) ウン

(大島) イヤー、いつからそんな、乗るようになったの？

(子) あぶないよ。

(大野) カズエちゃんがトイレに行こうとすると、一人づつ立ってカズエちゃんの後を追っかけてついて行きます。

(大島) イワネカズエちゃんっていうの。みんなヒマワリさんと同じ六歳のお友だちで、今度四月から学校いかはるのよ。こんにちは。あそびましょうって。

(か) ア、イビー

(大島) ハイ。今日、一緒に給食食べて、そのあとまたみんな一緒に遊ぼうね。

(大野) この保育園は当番の子どもたちがいただきますというまでは絶対食べられません。今日はさかんにじらしています。でもカズエちゃんは嬉しそうに笑いながら、じっと待っています。

(子) みんないっしょにいただきます。

(大野) みんなカズちゃんがどんな顔をして食べているのか興味津々です。

(大島) 食べて、またブランコのるの？

(か) ウン。ノル。

(大野) でもカズちゃんは、そのなかで悠々と食べています。この保育園はバスでみんなかよっているものですから、その時

間の関係でお昼に帰る子どもたちもいます。カズちゃんがおみやげを持ってきたので、早速その贈呈式。

(大島) ウン、その人。ゲンヤちゃん、あげようって。

(か) ハイ

.....

(大野) もうカズちゃんに友だちができました。この新しい友だちはよくみていると、カズちゃんが最初に来たときから、カズちゃんのそばに行っても何かとても気になるようでした。

(大野) バスの時間がきて、みんな帰ります。カズちゃんはみんなの乗ったバスが消えて行くのをいつまでも見送っていました。そしてカズちゃんの桂川旅行も終わったわけです。

今日はカズエちゃんは、当番の日です。それでなにかやっているのかと思いましたが、出席簿にいたづら描きをしていました。

お昼のしたくができました。さっそくカズちゃんは、そっちのほうへいきます。先生にもご注進。みんなをかたづけさせなさい。「みんなかたづけなさい」と一生懸命行っているんですが、みんな知らん顔。しかたがないので、カズちゃん、一人で机を引っ張り出してきます。去年できなかった机、今年は一人でちゃんとだして、足もちゃんとやっています。

いたづら描きがバレてしまいました。

(保育) カズちゃんがしたんか？

(大野) これはカズちゃんがなにかバレたときのお得意の知らん顔です。ヤバイなあという感じ。

(保育) カズちゃんがしたんやろ。ちゃんとあやまって。したらアカンのよ。

(か)

(大野) 机の上にスプーンかなにかこぼしてしまって、ついでに雑巾か何かをこぼしてしまいました。でも机の上は雑巾ではなくて、台フキンでふく、それを友だちが教えています。ぼくたちはこの保育園へ通って、友だち同士が教えたり教わったり、そういう関係があることをずいぶん学びました。

カズミちゃんとミユキちゃん。この秋から全日保育にかかわって昼寝をするようになりました。

クリスマスの日はずいぶん、雪ではなくて、大雨がふりました。この日は、子どもたちの作品の買物ごっこ、そのあと父兄会主催のバザーがありました。カズちゃんも自分の財布からお金を出して、なにか買っています。こうしてカズちゃんも、貨幣

経済について学んでいるらしいのです。バザーは各自の家から
不用なものを持ち寄っているわけですが、たいへん安い値段
で売っています。カズちゃんは、そういうものよりも、すぐ
に食べられるサンドウィッチの方がいいというわけで、サンド
ウィッチを買っています。物価高を反映してかたいへんにぎわ
ったバザーでした。帰るときになって、カズちゃんは何かうろ
うろしてるなと思いましたが、一生懸命ノブユキ君を探してい
ます。そして門の所まで一緒に手をつないで帰ります。

カズちゃんの体重は着実に増え続け、とうとう五十キロに近
くなってしまいました。これ以上増えると身体に大変悪い影響
を与える。太る原因が食べ過ぎのためなのか、障害のためなの
かよくわからないので、一応きちんとした生活のルールを守ら
せるようなことを教えていこうということで、お父さん、お母
さんはたいへん考えられたそうですけど、決心をしてこの四月
から近江学園にカズちゃんをいれることにしました。今日は、
その体験入園の日です。車のドアのロックもちゃんとできます。

近江学園は一九七六年に、今亡くなった糸賀一雄先生が同志
の方と始められた施設です。そして初めは大津市の南郷という
ところにありました。それが一九七一年に、この石部町東寺と
いうところに引越してきました。この近江学園から新しい障
害を持つ子どもたちのいろいろな教育がなされてきました。

学園についてカズエちゃん。なんかちょっとなんとか組の組
長さんという、そういう貫禄があります。園長先生との話。

小雪の降る中を、生活班の方に歩いて行きます。

お昼の準備が始まりました。するとカズエちゃんは初めての
所にもかかわらず、さっさと先生の手伝いを始めました。こん
なことは保育園でいつもやってることなんで、カズエちゃんに
とってはあたりまえのことといえるのかもしれません。

石部養護学校へ行っている友だちが、お昼を食べに帰ってき
ました。

午後から、みんなと一緒に石部養護学校へ行きます。この石
部養護学校は、近江学園の中に併設されています。先生が「む
すんでひらいて」をやってくれたので、カズエちゃんはさっそ
くやっています。と思ったら、今度はピアノの独奏を始めまし
た。暑いから、ジャンパーを脱ごう。これはいつもスモックを
脱ぐので、その習慣がついているようです。ひと区切りつくと、
ああやって拍手を強要します。

節分が近いので、先生が鬼になって豆まき。鬼退治です。カ
ズちゃんも、ちゃんとああやって玉を投げます。今度はちょっ
とものぐさに、ねっころがって「エイ」。ちょっとはずれ。「エ
イ」。でもこうやって側によって、目標に向かってねらいを定め
て投げます。ついに鬼がやられました。

カズエちゃんの近江学園での一日目が終わろうとしています。
布団を敷くときもカズエちゃんは先生の手伝いをかいかいしく
します。こんなのは昼寝の準備でいつもやっているから手慣れ

たものなのかも知れません。でもそもあと、こうやって衿の折
り返しをつけているのには僕たちはびっくりしました。

(大野) もういっぺん。

(か) ナニ？

(大野) もういっかいやってごらん

(大野) 今みたいに手で、ちゃんとやる動作を示します。お風
呂から出て、未来の仲間にお休みを言っています。

七時起床。カズちゃんは、もう靴下まで自分でちゃんとでき
るようです。そればかりか自分の服を着終わると、今度は服を
着れない子のセーターなど着せるのを、先生の手伝いをちゃん
とやっています。ここら辺の所も、保育園で身につけたものが
生かされているように僕たちには思えました。カズちゃんは、
歯を磨くのは、家ではわりとさぼっていたわけですが。ここで
はちゃんとやらされています。今度は自分でやってみなさい。ち
ゃんと自分でも、ま、しょうがないからかやっています。カズ
ちゃんの世界話焼きぶりはここでも発揮されます。「ハイ」戸渡す
んですけど、ちょっと反応がなくて、でもちゃんと置く先を見
ています。この女の子は「私は小さいからこんなもんでいいわ」
というんですが、ダメだといって、断固としてたくさん入れよ
うとします。お昼でカズちゃんは帰りますので、先生がカズち
ゃんにみんなにお別れの挨拶を言うように言ってるわけなんで
すけど、録音はここら辺から入っています。

(先生) そんならかずえちゃんさよならいうたしね、ついでに
ごちそうさまでしたいうて。

(母) ごちそうさま

(か) ゴチ……ダ……タ

(先生) そしたらさようなら。もういっかい握手しようか。

(か) イヤーヤー

(大野) 今日は土曜日なので、第一びわこ学園のサユリちゃん
とミノルくんが登園してきました。カズミちゃんとミユキちゃん
も登園。ちゃんとドアを閉めています。今日はお母さんが風
邪をひかれたそうで、お父さんがつれてきています。でも中
に入ったら、去年と違って、二人はちゃんと一緒に入っていきます。
そうしてお父さんの帰る方を二人ともちゃんと見送ってい
ます。

いよいよ殿にカズちゃんの登園。ぼくたちはいつもくつを出
しっぱなしにしているので、しまつてやろうと、あそこにしま
うぞ、とちゃんと指をさしています。

「ここだ、ここだ」「下の方がいいよ」「じゃ、ここだ」。

この日はなにかたいへんリズムカルにカズちゃんは動いてい
ました。スモックもああやって調子をつけてきています。考え
てみると一年前までは着るのに悪戦苦闘していたのがそのよ

うです。

今日は園庭マラソン。カズちゃんは、ミノル君の手を引っ張って一緒にマラソンをします。あ、先生みたいにやってみよう。あんまりうまくいかないなあ。じゃこうしよう。ここで僕たちにとって、ひとつの奇跡とも言うべき事件が起きました。ミユキちゃんがスタッフの手を自分の方からつないできたのです。これは二年間で始めてのことです。

三組が三様のユニークなマラソンをしています。よし、どこいしょ。うまくいかなければちゃんと先生にやらせます。

『いっすんぼうし』のおはなし。カズちゃんはこういうときになるとすぐに、これはちょっとわざとですがトイレへ行くと言い出します。

(保母) いっといで。紙もって。いっといで。なんでな。いきなさい

(か) アーナー、ナー、イヤヤ

(大野) ここでカズちゃんはみんなが自分に注目しているということに気づいて、「パー」。みんなが笑うものですから調子にのって。こうなるとカズちゃんは相当しつこいのです。

雑巾がけ。みんなでやります。カズちゃんは張り切って先頭に立っています。ミノル君もはりきって雑巾がけに参加しています。トシオ君がころげたら、サユリちゃんはうれしそうに笑っています。考えてみると、二年前のサユリちゃんたちの表情と今とを比べてみて、まるで別人のような気がしました。帰る時間になりました。カズちゃんは、かいがいしく送ります。ここでわざとくつつを放り出すと、サユリちゃんは「いじわる」というような手つきをします。ロックされててドアがあかないので、カズちゃん大騒ぎ。ここでもちゃんと荷物を出して、先生を乗せる。それから閉めるぞとみんなに声をかけて、よいしょ。もう一回確かめます。

このころになるとカズちゃんは、折り紙を折りながら、ことばでこちらの説明するようになってきています。

(か) コーッテ、コーツチ

(大野) それから？

(父) おかあちゃん呼んできて

(か) アカン

(大野) それから前の年の十二月ころから、アッチ、コッチ、アコ、ココというようなことをちゃんと指で方角を指し示しながら言えるようになってきました。

(大野) こっち。ママいるよ。

(か) イヤイヤ、コワイヨ。

(大野) こわいか？お父ちゃん、どこ？

(か) ココヨ、ココ

(大野) なんていうの？

(か) ココ

(大野) お母ちゃんは？

(か) コレ

(大野) カメラの先生は、どこにいる？グルグルガーとまわしてる映画の先生。

(大野) 弟のこうちゃんが「ホラ、カズちゃんカメラで映してるぞ。いい顔しなさい」。兄弟そろっての記念撮影。

(か) ヒトツ、フタツ

(大野) まだ数の意味はわかってないようですが、数をかぞえる真似をするようになってきています。

(か) イチ、ニ、ゴ、ゴ、ニ、ゴ、ゴ、ニ、ニ、ロ、アッタ

(大野) みんなはひな祭りのうたのけいこをしているんです。カズちゃんはちょっとさぼって自分の作品の修繕をしています。セロテープで貼って、はりつけているわけですけど、去年秋ころまでは、のりをつける裏表もわからなかったカズちゃんが、セロテープを使っていました。そして切れなくなると、サッサとはさみを出して切ります。

カズミちゃんも一生懸命しぼろうとしています。

このころミユキちゃんはスリッパにととも興味を持っています。カズちゃんが一生懸命絞っている上から、カズミちゃんは水をたらしめます。

(保母) カズちゃん、しぼれた？カズミちゃんまだやろう。

(大野) それじゃ、しぼってあげなさい。じゃ、しょうがない。しぼってあげるよ。なんとなく、お姉さんぶりを発揮しています。バケツをかかえてこれから水を捨てに行きます。水を自分の方にすててしまおうとしています。それでいろいろ、角度を変えながらやろうとしています。そして二度目からは水を捨てないでやろうとしています。どうもうまくいかないなあ、という感じで。下へ置いて、水を出しながら濡れないところへ足を持って行きます。最後にちゃんと捨てることができました。

ひなまつりは大雪が降りました。控え室は子どもたちでごったかえしています。

ミノル君もうれしそうに叫んでいます。サユリちゃんも楽しそうに園の友だちと話をしています。

紙芝居はケンちゃんとペア。

(保母) 突然ハプニング。ほんとはイワネカズエさんが、この

なかにはいつてするんだけど、ずっとここにいまして、やっと終わったところに自分の番だということに気づいて、本人、いま、もういっかい言うことなんで。

(大野) カズちゃんは、コンサートマスターよろしくピアノシモからしだいに強くたたいていきます。ここでも終わりをきちんとあわせました。カズちゃんたち、大ブタ組の劇。これは「ネコとネズミ」のおはなしです。カズちゃんは、ネコの役。このネコの役は、一番頭と、終わりに出ます。まんなかはネズミたちが出ています。ちょうどカズちゃんの得意な「中抜き尻合わせ」の役です。保母さんたちに聞いてみたらなんでもカズちゃん、この役を自分で選んだそうです。カズちゃんとしては、自分で、そういうことを自覚して、意識しているのかも知れません。かずちゃんはこうして、終わりを立派に締めました。大ブタ組の合唱。「気のいいあひる」。サユリちゃんも一生懸命歌っています。カズちゃんは、歌詞の部分はわりとモゴモゴやっています。そしてラーラーラという部分になると、俄然はりきって歌います。うたごえにのってとうとう卒園の日がやってきました。

(大野) 生まれた年月日順に並んだわけですけども、なぜかカズちゃん一番前のドまん中。

(保母) それではこれから大ブタさん、中ブタさん、小ブタさんのおなまえをいいますよ。卒園児。

(大野) いよいよ卒園証書の授与。

(保母) タンバノブコさん。

(子) ハイ

(保母) イワネカズエさん

(か) ハーイ

(保母) 保育証書。イワネカズエ。昭和四五年六月十日生まれ。あなたは本園で三年間保育したことを証します。昭和五十二年月二十五日。大津市立朝日が丘保育園。園長 鈴木恭子。

(大野) 三年間、カズちゃんとなかよく遊んだり、けんかしたりした友だちがみんな新しい世界へ進んでいこうとしています。

(保母) カノウカズミさん、カノウミユキさん。保育証書カノウミユキ。

(保母) それでは中ブタより、ハンカチに絵を描きましたので、

(大野) 在園児たちが、ハンケチに自分たちで絵を描いて、プレゼントします。

卒園児からのプレゼント。通称、「何か入れ」。

卒園の歌を、カズエちゃんは「顔じゅう口」というようななかんで歌っています。一年目のカズちゃんちゃんは口で歌わず、足でリズムをとるだけだった。そんなカズエちゃんが、こんなに歌えるようになっていきます。

わかれはかどで。おわりははじまり。みんな保育園での生活に別れを告げて、学校という新しい世界に進んでいこうとしています。それはひとつの終わりであり、ひとつの始まりでもあります。カズちゃんも別れを告げて、新しい世界に進もうとしています。カズちゃんにとって、新しい生活がこれから始まるのです。

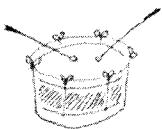
(か) パイパイ、パイパイ……

(大野) 一九七七年七月。僕たちは久しぶりで朝日が丘保育園を訪ねてみました。みんな元気で、水遊びに励もうとしています。今年の子どもの数は六十一名。保母さんは二人増えて、七名。障害を持っている子は五名だそうです。もう大津市では障害児保育というのは当り前のことになってきています。そしてカズエちゃんと一緒に遊んだみんなが大人になったとき、そしてこういう子どもたちがもっと増えたとき、日本の国はもっとよくなるだろう、そういう気がしました。

光の中に大人たちもいる

——独断的発達についての覚書——

大野松雄



はじめにお話ししておきたいこと

私は幼児教育、保育の専門家ではありません。また障害児教育の専門家でもありません。本職は、電子音楽などをつくっている、音響デザイナーです。ただ、人類の進化、特に人類が何故直立二足歩行をするようになったのか、何故言語を獲得するようになったかに興味をもち、たまたま八年程前から、何人かの障害を持って子どもたちと「つきあい」をすることに成り、また、これもたまたま三年程前から、大津市の障害児保育の現場で、障害を持って子ども、持っていない子どもたちと「つきあい」をすることに成ってしまった大人です。そしてつきあいの中で、『光の中に子どもたちがいる』という記録映画——と

いうより、映像と音響によるレポート——をつくることになってしまった一人の大人です。この記録は、一人の障害を持って子どもが、大津市の公立保育園に入り、一年の間にどのように変わっていくか、そしてその子どもとかかわる他の子ども——いわゆる「健常児」たちもどう変わっていくか、さらに、その変わり合ひの中で私を含めた「大人」も、どう変わっていくか……を記録したものです。

私は今この作品を、子どもたちと育ち合う記録——と勝手に名づけています。私は、子どもたちから沢山のことを教わり、いろいろなことを私なりに発見したと思います。子どもの発達について、子どもたち相互のつきあい方について、大人と子どもとのかかわりについて……とくに大人

と子どものかかわりについての面で、私は大変貴重な発見をしたと確信しています。そしてそのことは、いわゆる「専門家」の人たちには、意外に見逃されていく面があると思われるのです。しかし、この事実の中に、子どもの発達についての「何か」があると考えられるのです。私は『光の中に子どもたちがいる』を通して学んだことを、これからお話ししようと思いますが、門外漢の私の話なので、多分に独断的なことになると思います。「専門家」のみなさんの御意見、御批判を受けたいと考えています。本題に入る前に、私が何故いろいろな子どもたちとかかわりを持つようになったかを、簡単に説明しておきたいと思えます。

心の負債を背負ってしまったこと

子どもたちのきびしさやさしさを

約八年前『夜明け前の子どもたち』という記録映画が製作されました。これは滋賀県にあるびわこ学園という、重症心身障害児の施設の療育記録映画で、私は音響スタッフとして参加していました。私たちは、療育に映画が参加した」とか感想をつけて、また相前に気負って製作をしてい

ました。いよいよ編集も大詰めに近づき、私は録音機をかけたので、子どもたちのインタビューをとりました。子どもたちはみんな、大なり小なり言語障害をもち、車椅子に坐る時以外は、寝たままではいなければなりません。聞きとりにくい話のやりとりの中で、私は次第に呆然とせざるを得ない状態になってしまったのです。子どもの口から出てきたことは、ベトナム戦争批判、万國博批判、全国の施設の子どもたちとの連帯……これらが、十歳前後の子どものうち、それも障害をもっているために、学校へ行きたくてもそれを免除させられてしまった子どもたちの声だったので、話はさらに、現場の職員がやめていく問題——当時から、すでに製箱などで職員の多くがやめていきました。せっかく慣れた職員がやめる、新しい人と交る。子どもにとって、これはいろいろな面で、大変苦痛を伴うことなのです。でも、驚いたことに、子どもたちの言葉の中には、批判めいた響きはなく、むしろ、やさしい、いたわりの気持ちを感じられたのです。この「日本」の現状に対するきびしさ、職員の現実に対するやさしさ……この現実を見すえた確かな視点を、また十歳にもならない子どもたち、それも障害児であるために、教育を受けられない子どもたちが

持っていたのです。私たちスタッフは、療育に映画が参加したとか何とか、結構幹がって一年間も現場にいたくせに、子どもたちの確かな眼について全く無知であったのです。さらに、現場の職員も大部分も、この事実気づいていなかったのです。私たち大人は、えらそうなことをいうくせに、何故この事実が判らなかったのだろう。私たちは——現場の職員も含めた私たち大人は、その事実には無知のまま、映画を製作してしまったのです。このことは、私にとって、子どもたちへの心の負債として、私の中に長く残ることになってしまいました。

光の中の子どもたちとの出会い

子どもの発達とは何だろう

一九七三年、滋賀県大津市は全国の自治体に先がけて、障害児の幼稚園、保育園への全入制度を実施しました。いわゆる「障害児保育」が制度化されたわけです。そしてその記録映画「保育元年」が、大津市によって企画され、私もその製作に参加しました。私は、びわこ学園の子どもたちから借りた「心の負債」が、これで多少なりと返済できるかと思いました。しかし結果はその逆で、新しく出会っ

た子どもたちから、負債の上のせをさせられたような気持ちになってしまったのです。

よくよく考えてみると、子どもたちは単なる被写体、対象物として扱われたに過ぎないのではないか。(もちろん、大津市も私たちも精一杯やったつもりですが……)結局、大人たちが大人たちのために作った……そんな気がしてきたのです。これではやはり子どもたちの「心」を知ることができない。子どもたちの「心」を知るために、「心」の発達を記録してみよう。「光の中に子どもたちがいる」の記録は、こうして始まりました。

発達とは空間的有機的なものであること

デジタル的なものからアナログ的なものへ

前にも申しましたように、この記録は一人の障害を持つ子ども——カズエちゃんを中心に、保育園の仲間たちのかかわりを、一年間追ったものです。では、カズエちゃんの変化の主なものを、時間の経過に従って書いてみましょう。一九七四年四月初旬、カズエちゃんとの初めての出会い。当時三歳十か月、前年の十二月迄歩くことが出来ず、まだ話し言葉はありません。障害の原因は、一時脳性マヒ

ではないかといわれましたが、一応不明ということになっていました。ただ、大変ふとってその時二十九・五キログラム。初めて会った時の感じは、愛想はいいが、まだ動作はにぶく表情の変化もあまりありません。でも、向けたマイクに一回だけですが反応を示したこと、そして、食事の後のけじめ——皿を重ねる、手を合わせてゴチソーサマをする——がついているのが印象に残りました。

五月一日、カズエちゃんが一月おくれで、保育園に入園する日です。ようやく歩き始めたばかりのカズエちゃんは、お母さんに手をひかれて歩きますが、歩道程度の段差の上り降りも、相当のエネルギーを使います。少しの歩行でもう足が開き、まだ指さしが出来ません。友だちとの最初の出会い。おたがいにとまどっているようです。カズエちゃんは、相手にさわつて、たしかめています。子どもたちは、カズエちゃんが寄ると、わっと逃げます。でも逃げたままではなく、直ぐにまわりを囲みます。一人の子どもがちょっと押すと、足の弱いカズエちゃんは、どすんと尻もち。先生は、先ず子どもに起こさせます。遊戯が始まっても、まだみんなのリズムに入っていないけません。大体一時間半位であきができます。しかし親子教室などですでに学習し

て、自分の興味のあるもの——むすんでひらいての手を叩くところ、オルガンの音色等——には反応を示し、また、新しい世界をあちこち「探検」していました。

六月中旬、カズエちゃんはお母さんの手をはなれて、一人で歩きます。歩くためのエネルギー消費が減ると、「ゆとり」が出て盛んに道草をします。情熱の入力が増大してきます。ちゃんと指さしが出来ます。そして、保育園の門迄くると、小走りにみんなの所へ走っていきます。カズエちゃんは、新しい世界が気に入ったようです。遊戯でも、先生や友だちを観察してついでいこうとします。この頃になると、自然なかたちでカズエちゃんをサポートしてくれる。「友だち」が現れます。遊戯では、大分走れるようになり足の力がついたカズエちゃん。まだ腕の力、指の力が弱く、ブランコは無理のようです。スベリ台に興味をしめしても、段を登ることが出来ません。その興味を、すべり台の下りに坐り込む、逆に登ろうとするルール違反で表現しようとしています。ルール違反を友だちに止められると、自分のおなかを叩いて泣きます。またすべり台に登れない口惜しさを、先生に抱きついて泣くことであらわそうとします。歩けるようになった自信と、新しい世界への興味があ

ゆとりと好奇心を生み、道草、他人の観察、友だちのサポート、ルール違反を止められる……等から、情報量は着実に増大しています。また、すべり台ですべりたい気持ち等を、別の形で表現する。先生に抱きついて泣く……等の情報入力に対する出力、つまりフ、イ、ド、バ、ツ、クの芽生えが見られます。

七月上旬、まだ梅雨時、雨にぬれてカズエちゃんは歩きません。保育園の門をくぐると、その顔はニコッとほころびます。みんなの真似をして紙を折ろうとします。先生に叱られて、床を叩いて泣きます。友だちの粘土をとりあげるなど、いたずらをするようになり、でも最後はちゃんと返します。何か仕上げると、嬉しそうに手を叩いて喜びます。食事の時も、みんなで「イタダキマス」という迄、待つことが出来るようになります。しかし、フーと吹く息の方は、まだ出来ないようです。カズエちゃんは、園での生活が次第に自分のものになりつつあるようです。感情表現も豊かになり、前は自分のおなかを叩いて泣いたのが、この頃は床を力一杯叩いて泣く……感情を表に向ける……アウトプットの回数が増えます。こうして、いたずらをする、取りあげて返すという、友だちの間でのフ、イ、ド、バ、

ツ、クの関係が成立し始めます。そして床を力一杯叩く、粘土をべたべた叩くという一連の行為が、次第に腕から指にかけての力をたくわえていくようです。また、半日保育であったのが、昼寝を入れたての全日保育に切り変わったことで、エネルギーの発散、蓄積、発散のバランスが、うまくとれてきたようです。

七月下旬、初めてプールに入って友だちと水かけっこ、色水遊びというボディインテンドごっこで、体に絵具を塗ったり塗られたり、つまり、フ、イ、ド、バ、ツ、クの関係が定着します。プランコも先生にのせてもらいます。そして、これも先生に助けられませんが、とうとうすべり台に登り、すべり降ります。

八月上旬、びわ湖の湖水浴で、カズエちゃんは昼のおべんとうの残り、紙で包みます。浮輪につかまり、体を斜めにかたむけた姿勢で、足で水を力一杯かきます。そして八月下旬、カズエちゃんは遂に、「バ、バ、バ、ジャブジャブジャブ」等、話し言葉の前段階に達します。入園して四か月間、カズエちゃんの変化を見ると、子どもの発達とは、決して直線的・平面的なものではなく、もっと空間的・有機的なものだと思います。何か一つのこ

との完成……それがたとえ僅かなことでも……が、ゆとりと自信を生みだし、それは情報量の増大をもたらします。その増大が情報の出力をうながす時、友だちのフ、イ、ド、バ、ツ、クの関係が成立します。私はカズエちゃんの変化を見て、このフィードバックの関係の成立が、大変重要なのではないかと思いました。何故ならこれらのことは、「心」

だけでなくむしろ「心」の発達、体全体の発達、中での相関関係……つまりフィードバック……が、外部とフ、イ、ド、バ、ツ、クする間で、さらにフ、イ、ド、バ、ツ、クを起す……何だか大変ややこしい言いまわしになりましたが……だから私は、子どもの発達とはより空間的、有機的なもの、言葉を変えて言えば、デジタルなものでなくアナログ的なものではないか、と考えるのです。

ヨコのフィードバックからヨコタテのフィードバックへ

カズエちゃんは四か月の間に、友だちと相互のフィードバック、つまりヨコのフィードバックは成立する途になりましたが、まだ先生など、大人へのアプローチ、つまりタテのフィードバックは成立していませんでした。これで

は、発達の空間としては不完全です。カズエちゃんと大人との関係は秋から始まります。しかし残りの紙数があまりないので、いささかハシヨツテお話しいたします。

秋に入ってカズエちゃんの足は、ますます丈夫になり裏山への園外散歩も、ちゃんと歩いて登り降りします。言葉らしきものも大分増えてきます。十月初めになると、体操などで自分の能力的弱点を予知して、カズエちゃんの方から、先生に助けを求め、いくようになります。大人へのアプローチの始まり、タテのフィードバックが芽生えます。いたずらも、すきを見つけて人のものをさっと取り上げる……判断と行動のバランスがすっかり身につけてきます。時には度が過ぎて、友だちにヒッパタカれます。カズエちゃんには泣きながら先生に訴えにいきますが、その原因がカズエちゃんにあることを、逆にたしなめられます。ここではヨコとタテのフィードバックが、それぞれ作用し合っています。大人へのアプローチは、十二月に入ると、先生がやっている雑巾がけを自発的に手伝う、そして雑巾のしぼり方や拭き方を教わるという順番発展します。いたずらも、十二月中旬を過ぎると、止められることを期待して、わざとずる……遊びの気持ちがあらわれ、また、人のすきを見

つけてのいたずらは、年が開けると椅子をさっと引いて、尻もちをつかせる迄になります。この一連の行為は、いたずらというより、「ためす」という感じになっています。話は前後しますが、プランコは十一月に入ると、一回か二回自力でこげるようになります。その頃になると、遊戯は何とかついでにけるようになります。「つもり」の行動が出てきます。たとえばスキップ。カズエちゃんは大変ふとっている割に足首が細いので、飛ぶことは苦手で、まだスキップはちゃんと出来ません。でもスキップをしているつもりで、リズムに合わせてみんなの前で動きます。そして区切りがくると席に戻ります。自分の限界一杯に、遊戯のリズムとみんなのリズムに合わせて、表現しようと努力しています。年が開けると、カズエちゃんの大人へのアプローチは、先生ばかりでなく私たちスタッフにも向けられます。カメラマンが撮影していると寄ってきて、レンズをじっとのぞき込みます。撮影を続けながらカメラマンが、「ヨイ・ドン」というと、くるりと向きを変えて走り出し、ある所迄いくとまた走って戻り、再びレンズをのぞき込みます。プランコは、二月に入るとどうとこげるようになります。三月になるといろいろ向きを変えて、工夫しながらやる迄にな

ります。そして三月中旬、風邪をひいて休んだというので、お見舞いにいった私たちスタッフの前で、遂に「ドッコイチャ」と言いました。

カズエちゃんが一言喋る迄の一年間、カズエちゃんはそのごく沢山の物を見、音を聞き、物にふれ、人に接します。何度もくり返すようですが、情報量の増大、自身のフィードバック、友だちとの、大人との、そしてヨコナタのフィードバック、さらに、それぞれが相互にフィードバックし合う中で、量的に蓄積されたものが質的変化をとげる……カズエちゃんの「ドッコイチャ」の中にそれを感じ、人類進化の長い営みを感じました。大分前になりますが、今西錦司さんの本に、「人類進化の中で、直立二足歩行と言語の問題は、立つべくして二本足で立ったのであり、話すべくして話すようになった……」とあったのを読んだ記憶があります。その時は、その意味がさっぱり判りませんでした。カズエちゃんの「一言」を聞いて以来、おぼろげながら判るような気がします。

子供と大人との関係について もう一つのタテとヨコの関係

紙教ありませんが、もう一つふれておきたいことがあります。それは初めにお話しした、子どもの「心」を知る問題です。「専門家」の方々にとっては当り前のことかも知れませんが、これは、私と子どもたちとのかかわりの出発点でもあるので、私なりの考えを簡単にまとめてみます。結論から先に申しますと、私たち大人は、とかく「大人」としてタテの関係のみで、子どもたちと接しているのではないだろうか。「大人」が子どもたちと友だちとしてつきあうという、ヨコのつきあい方も必要なのではないでしょうか。もちろん、「大人」としての経験や社会ルール等を伝えていく、というタテの接し方も必要です。しかし、それもヨコのつきあい方がなされていなければ、子どもたちによりよく伝わらないのではないかと考えられます。ヨコの関係の中で、子どもたちは「心」を大人に向けて開いてくれる——そんな気がします。

私の貧しい経験でいうならば、カズエちゃんの初めての言葉、「ドッコイチャ」は、私の前で出てきたものです。これは、私とカズエちゃんとの友だち関係の中で出てきたと思われまます。実は私は、この記録を続ける中で、なんとカズエちゃんと友だちになれないか、と考えていまし

た。そして以前、びわこ学園の子ども——脳性マヒとちえおくれを伴っている、いわゆる重症心身障害児——たちに試みたことを思い出しました。みんな話し言葉はありませんが、よく唇を合わせて「ブー」とか「ブルブル」とやっているのを見て、何となく眼を同じ高さに合わせて、その真似をしてみました。すると、大変喜んで反応するので、真似をして遊んだことがありました。子どもは大人の真似をして、いろいろなことを覚えていく。「大人」が子どもの真似をする、とどうなのだろう。八月のびわ湖の湖水浴の夕方、カズエちゃんの「しぐさ」の真似をしてみました。はたして、カズエちゃんの反応は大変なものでした。キャッキャと喜んで、いろいろな「しぐさ」をします。それを私は直ちに真似をします——眼を合わせ、なるべく姿勢を低くして……そのうちに、カズエちゃんは私のタイミングを外そうとしますので、私はこの時、カズエちゃんと同じく、あえたと思いました。

二度目は、九月の遠足の時、星のおべんとうの後、カズエちゃんはそれ迄しゃぶっていたパロパロキャンデーを、私の方に差し出しました。私はそれを口に入れてしゃぶり、再び返すと喜びようはものすごく、そのあと何回か、

私とカズエちゃんの口の間を、ペロペロキャンデーが往復しました。

三度目が例の「ドッコイチャ」になるわけです。丁度この頃、カズエちゃんの大人へのアプローチは先生だけでなく、私たちスタッフにも向け始めた時でした。風邪もすっかりよくなって、弟と一緒に隣の家のガレージで遊んでいました。私たち「大人」が遊びにいったことが、カズエちゃんには思いがけない喜びだったようです。ごあいさつの際、私は早速カズエちゃんの声を真似しました。しばらくやりとりがあつて、カズエちゃんがしゃがもうとした時、私は思わず「どっこいしょ」と言いました。するとカズエちゃんは「ドッコイチャ」と答えてくれたのです。

私とカズエちゃんは、この三つの段階をふんで友だちづきあいをするようになった……というわけです。

子どもたちは自身で光り輝いている

「大人」も光の中へ入れてもらおう

「光の中に子どもたちがいる」を記録する中で、私はたくさんのことを教わりました。そして「子どもたちと育ち合う」ということが、実感として判ったような気がしま

す。完成後、多くの御意見や御批判を頂きました。その中に気になるものがいくつかあります。その一つに「光の中……」の光源についてのものです。私は、光源は子どもたち自身と考えています。障害を持つとうが持つまいが、子どもたちはみんな「光」です。子どもたちは自身で光で輝き合っているのです。ところが、恵まれない子らに、大人たちが、光を当ててやらねば……という考え方が、意外に多いのです。「大人」たちは、少しうぬぼれが強すぎるようです。「大人」たちが子どもたちにしてやれることは、みんながもつと輝くよう手助けをする……精々その程度のことではないでしょうか。私たち「大人」は、子どもたちを「指導」したり「教え」たりする前に、まず子どもたちと友だちになりましょう。「大人」たちと「子ども」たちが、タテとヨコの関係で結ばれた時、相互のフィードバック作用は、きっと「大人」たちを「発達」させるでしょう。その時「大人」たちは、初めて「子ども」たちに照らされてにぶく輝くでしょう。惑星が恒星のおかげで光るように……。そして「光の中に大人たちもいる」状態が出現し、子どもたちはやっとな安心して、光をうたい続けられるでしょう。

(映画製作者・総合企画)

59 ページ以降不掲載